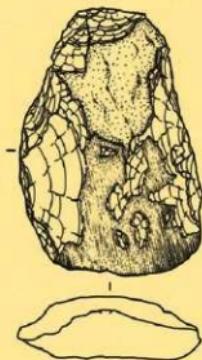


一般国道18号(野尻バイパス)
埋蔵文化財発掘調査報告書

かんのき
貫ノ木遺跡・西岡A遺跡 にしおか



1998

建設省関東地方建設局
(財)長野県埋蔵文化財センター

一般国道18号(野尻バイパス)
埋蔵文化財発掘調査報告書

かんのき にしおか
貫ノ木遺跡・西岡A遺跡

1998

建設省関東地方建設局
財長野県埋蔵文化財センター



貫ノ木遺跡旧石器時代出土遺物（約3万年前）



遠跡遠景(1) 南東上空から



遠跡遠景(2) 南西上空から

序

信濃町は黒姫山麓にあって新潟県と境を接し、俳人小林一茶の里として知られる高原の町です。観光地として知られる野尻湖は、野尻湖発掘調査団によって継続されている湖底の発掘でも知られています。この発掘は全国各地から参加者を集め、ナウマンゾウやオオツノシカなどを狩った人々の生活のようすや当時の自然環境が明らかにされつつあります。また、化石が発見される湖底の遺跡だけでなく、湖の周辺に広がる野尻湖遺跡群も、日本の旧石器時代を代表するような遺跡の密集地として知られています。

信濃町を縦断して建設される上信越自動車道などの工事に関連して、(財)長野県埋蔵文化財センターは、平成5年から8年まで発掘調査を実施しました。調査対象地が野尻湖遺跡群を縦断するものであったため、旧石器時代の大遺跡を数多く発掘することになりました。なかでも日向林B・貫ノ木・東裏遺跡などでは、新聞紙上で大きく報道された発見も数多くありました。

本書の貫ノ木遺跡と西岡A遺跡は、現在の信濃町インターチェンジ周辺にあたります。調査は、高速道と交差する国道バイパス新設に伴って行われたもので、高速道部分の調査と並行あるいは前後して実施されました。この建設事業は、高速道・国道・県道・町道の新設あるいは改良、関連する民家移転やガスパイプラインの移設などが行われ、発掘調査も当センターと町教育委員会が分担した部分があり、その事業主体・実施時期などが錯綜していました。そのため、発掘調査にあたり関係の皆様には大変なご努力をいただきました。

貫ノ木遺跡は、野尻湖調査団による調査などが過去に行われており、その重要性は知られていたところです。今回の調査によって、遺跡の範囲が大幅に拡大することが確認され、まれにみる大遺跡となりました。後期旧石器時代全般にわたる遺物はひとつの丘陵のほぼ全域に広がっており、旧石器時代では希少な砥石が何点も出土しました。縄文時代早期の土器も重要な資料となることでしょう。西岡A遺跡は貫ノ木遺跡に隣接し、西日本や北陸地方に見られる石器群に類似する石器を出土したことで知られましたが、バイパス部分ではその周辺部に当たるところを調査しました。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、深い御理解と御協力をいただいた建設省関東地方建設局長野国道工事事務所・信濃町・同教育委員会などの関係機関、地元の地権者・関係者の方々、発掘・整理作業に御協力いただいた多くの方々、直接の御指導を賜った長野県教育委員会の皆様に、心より感謝申し上げる次第であります。

平成10年3月31日

財団法人 長野県埋蔵文化財センター

理事長 戸田 正明

例　　言

1. 本書は一般国道18号（野尻バイパス）建設工事に伴い事前調査された、長野県上水内郡信濃町貫ノ木遺跡・西岡A遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本事業は建設省関東地方建設局の委託を受け、(財)長野県埋蔵文化財センターが実施した。発掘調査は平成6年度から8年度、整理作業は平成6年度から平成9年度（平成6・7年度は冬期間のみ）、報告書作成事業は平成9年度におこなった。
3. 上記遺跡の概要は、(財)長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』10・11・12・13等で紹介しているが、内容において本書と相違がある場合は、本書をもって訂正する。
4. 本書に掲載した地図は、長野国道工事事務所作成の野尻バイパス平面図（1：500）、日本道路公团作成の上信越自動車道平面図（1：1,000）をもとに作成したほか、国土地理院発行の地形図（1：25,000）を使用した。
5. 写真図版の航空写真は（株）写真測図研究所に撮影を委託したものである。
6. 出土遺物等の理化学分析は次のとおりである。

黒耀石产地同定：沼津工業高等専門学校 望月明彦
残存脂肪酸分析：（株）ズコーシャ
放射性炭素年代測定：（株）パレオ・ラボ
7. 石器実測は一部を（株）アルカに委託した。
8. 執筆分担は次のとおりである。

土屋 積 第1章1節1項
谷 和隆 第1章3節
中島英子 第2章3節3項1)
戸谷邦隆 第2章3節3項2)
大竹憲昭 上記以外
9. 本書の編集・校正は大竹が行い、土屋が全体を校閲した。
10. 発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご指導・ご協力を得た。本文中にお名前を掲げさせていただいたが、厚く感謝申し上げたい。
11. 本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は、長野県立歴史館が保管する。

凡　例

1. 本書に掲載した実測図の縮尺は原則として下記の通りである。ただし、地形図・調査区全体図などは任意である。

1) 主な遺構実測図

遺物分布・遺構全体図 1:800 旧石器時代石器分布図 1:160 踏群・集石 1:40
土坑 1:40

2) 主な遺物実測図

旧石器時代小形石器 3:4 旧石器時代大形石器 2:3と1:2と1:3と1:4
縄文時代石器 2:3と1:2と1:3
土器実測図 1:4 土器拓影 1:2

2. 本書に掲載した遺物写真の縮尺は下記の通りである。

旧石器・縄文時代石器 1:1と2:3と1:2と1:3で、それぞれプレートの右下隅に示した。
縄文時代土器 1:1と1:2と1:4で、それぞれプレートの右下隅に示した。

3. 旧石器時代石器分布図のなかで、平面分布は器種によって記号を変えてある。それぞれの記号は以下の通りである。また、平面図の遺物に付された番号は遺物実測図の番号と対応する。

記号	器種名	記号	器種名
◊	ナイフ形石器	○	2次加工のある剥片
▽	台形様石器	●	微細剥離痕のある剥片
◆	槍先形尖頭器	*	敲 石
▲	笄形石器	◎	砥 石
☆	削 器	①	磨 石
★	搔 器	②	凹 石
③	彫 器	④	台 石
⑤	錐錐器	□	石 核
■	楔形石器	◎	原 石
⑥	石 刃	※	剥片・碎片
⑦	折断剥片		

4. 石器の長さ・幅・厚さの計測方法は以下の通りである。

長さ・幅：石器主軸方向を上下の基準として方眼紙におき、長方形を想定し、上下（縦方向）を長さ、左右（横方向）を幅として計測した。

厚さ：最も厚い箇所を、主要剥離面から垂直方向で計測した。

5. 縄文土器実測図・拓影図の断面のスクリーントーン（網点）は、繊維の混入をあらわす。

本文目次

序
例言
凡例

第1章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の経過.....	1
1 発掘調査に至る経緯 2 調査体制と調査期間 3 指導者・協力者 4 調査参加者	
第2節 調査の方法.....	4
1 発掘調査の方法	
(1) 試掘と調査区の設定 (2) 遺跡名称と遺跡記号	
(3) グリッドの設定と呼称法 (4) 遺構記号と遺構番号	
(5) 遺物の取り上げと記録方法	
2 整理の方法	
(1) 遺物整理の方法と収納	
第3節 遺跡周辺の環境.....	8
1 遺跡の位置と概要 2 周辺の遺跡	

第2章 貫ノ木遺跡

第1節 遺跡と調査の概要.....	14
1 遺跡の概要	
2 調査の概要	
(1) 調査範囲と調査方法 (2) 調査経過 (3) 調査結果の概要	
(4) 基本土層	
第2節 旧石器時代の遺構と遺物.....	20
1 概要 2 遺物の分布 3 碑群 4 出土遺物	
第3節 縄文時代の遺構と遺物.....	86
1 概要	
2 遺構 (1) 土坑 (2) 集石 (3) 土器集中	
3 遺物 (1) 土器 (2) 石器	

第3章 西岡A遺跡

第1節 遺跡と調査の概要	110
1 遺跡の概要	
2 調査の概要	
(1) 調査範囲と調査方法 (2) 調査経過 (3) 調査結果の概要	
(4) 基本土層	

第4章 まとめ

挿 図 目 次

- | | |
|-----------------------------------|------------------------|
| 第1図 グリッド呼称法 | 第34図 貫ノ木遺跡旧石器時代縄群7 |
| 第2図 貫ノ木・西岡A遺跡の調査区の設定 | 第35図 貫ノ木遺跡旧石器時代縄群8 |
| 第3図 野尻湖周辺の地形 | 第36図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図1 |
| 第4図 野尻湖周辺の遺跡分布 | 第37図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図2 |
| 第5図 貫ノ木遺跡縄在区 | 第38図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図3 |
| 第6図 貫ノ木遺跡基本土層 | 第39図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図4 |
| 第7図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器分布図 | 第40図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図5 |
| 第8図 貫ノ木遺跡旧石器時代縄群全体図 | 第41図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図6 |
| 第9図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図1 | 第42図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図7 |
| 第10図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図2 | 第43図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図8 |
| 第11図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図3 | 第44図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図9 |
| 第12図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図4 | 第45図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図10 |
| 第13図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図5 | 第46図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図11 |
| 第14図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図6 | 第47図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図12 |
| 第15図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図7 | 第48図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図13 |
| 第16図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図8 | 第49図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図14 |
| 第17図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図9 | 第50図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図15 |
| 第18図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図10 | 第51図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図16 |
| 第19図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図11 | 第52図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図17 |
| 第20図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図12 | 第53図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図18 |
| 第21図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図13 | 第54図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図19 |
| 第22図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図14 | 第55図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図20 |
| 第23図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布図15 | 第56図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図21 |
| 第24図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物石材別分
布図1 黒耀石 | 第57図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図22 |
| 第25図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物石材別分
布図2 安山岩 | 第58図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図23 |
| 第26図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物石材別分
布図3 貫岩 | 第59図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図24 |
| 第27図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物石材別分
布図4 チャート | 第60図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図25 |
| 第28図 貫ノ木遺跡旧石器時代縄群1 | 第61図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図26 |
| 第29図 貫ノ木遺跡旧石器時代縄群2 | 第62図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図27 |
| 第30図 貫ノ木遺跡旧石器時代縄群3 | 第63図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図28 |
| 第31図 貫ノ木遺跡旧石器時代縄群4 | 第64図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図29 |
| 第32図 貫ノ木遺跡旧石器時代縄群5 | 第65図 貫ノ木遺跡縄文時代遺構全体図 |
| 第33図 貫ノ木遺跡旧石器時代縄群6 | 第66図 貫ノ木遺跡土坑1 |
| | 第67図 貫ノ木遺跡土坑2 |
| | 第68図 貫ノ木遺跡土坑3 |
| | 第69図 貫ノ木遺跡土坑4 |
| | 第70図 貫ノ木遺跡集石 |

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 第71図 貫ノ木遺跡縄文土器実測図 1 | 第75図 貫ノ木遺跡縄文土器実測図 5 |
| 第72図 貫ノ木遺跡縄文土器実測図 2 | 第76図 貫ノ木遺跡縄文土器実測図 6 |
| 第73図 貫ノ木遺跡縄文土器実測図 3 | 第77図 貫ノ木遺跡縄文時代石器実測図 |
| 第74図 貫ノ木遺跡縄文土器実測図 4 | 第78図 西岡A遺跡調査区 |

挿 表 目 次

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 第1表 野尻湖周辺遺跡一覧 | 第7表 貫ノ木遺跡報告書掲載石器属性一覧 |
| 第2表 野尻湖周辺遺跡調査一覧 | 第8表 貫ノ木遺跡土坑一覧 |
| 第3表 貫ノ木遺跡旧石器時代器種組成 | 第9表 貫ノ木遺跡出土土器觀察表 1 |
| 第4表 貫ノ木遺跡旧石器時代石材組成 | 第10表 貫ノ木遺跡出土土器觀察表 2 |
| 第5表 貫ノ木遺跡旧石器時代石材重量 | 第11表 貫ノ木遺跡出土土器觀察表 3 |
| 第6表 貫ノ木遺跡標群属性一覧 | |

写 真 図 版 目 次

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| P L 1 貫ノ木遺跡調査状況 | P L 14 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (11) |
| P L 2 貫ノ木遺跡調査状況 | P L 15 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (12) |
| P L 3 貫ノ木遺跡調査状況 | P L 16 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (13) |
| P L 4 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (1) | P L 17 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (14) |
| P L 5 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (2) | P L 18 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (15) |
| P L 6 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (3) | P L 19 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (16) |
| P L 7 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (4) | P L 20 貫ノ木遺跡縄文時代土器 (1) |
| P L 8 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (5) | P L 21 貫ノ木遺跡縄文時代土器 (2) |
| P L 9 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (6) | P L 22 貫ノ木遺跡縄文時代土器 (3) |
| P L 10 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (7) | P L 23 貫ノ木遺跡縄文時代土器 (4) |
| P L 11 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (8) | P L 24 貫ノ木遺跡縄文時代土器 (5) |
| P L 12 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (9) | P L 25 貫ノ木遺跡縄文時代土器 (6) |
| P L 13 貫ノ木遺跡旧石器時代石器 (10) | P L 26 貫ノ木遺跡縄文時代土器 |

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査の経過

1 調査に至る経緯

本書の貫ノ木遺跡および西岡A遺跡の発掘調査は、建設省関東地方建設局長野国道工事事務所による国道18号線妙高野尻バイパス建設に関連して行われたものである。信濃町内では、この道路と交差する上信越自動車道の本線および信濃町インターチェンジの建設、それに関連する諸事業が並行して行われた。これにともない、(財)長野県埋蔵文化財センター(以下、センター)および信濃町教育委員会(以下、町教委)により同一遺跡の調査が、調査時期・地点を変えて行われている。これら発掘調査の全体像については、平成11年度に予定している上信越道信濃町内の報告書で示す予定である。なお、町教委の調査分では、すでに報告書が刊行されたものがある。本書の刊行により、このバイパス関連の長野県内分の発掘調査事業は第1期分を終了することとなったが、以北の県境部の既開通区间と今回調査分との間に予定される2期工事区间では、著名な仲町遺跡等の調査も予定されている。

従来、長野県においては、高速道等にかかる埋蔵文化財保護は広域にわたる統一的措置が求められるところから、長野県教育委員会(以下、県教委)が対応し、発掘調査はセンターが実施してきた。また側道拡幅などこれらと一体的に行われる開発についても市町村と協議の上、センターが調査を行う場合が多い。国道事業は、これまでの例では市町村教委が対応してきた。しかし、妙高野尻バイパス事業のうち貫ノ木遺跡および西岡A遺跡に関しては、県教委・町教委・建設省・センター間の協議の結果、事業規模・遺跡の重要性・隣接する高速道事業との一体性を考慮して、センターが受託することとなった。受託範囲には取付道等、一体施工の県道・町道部分も含まれる。発掘および整理は、当初に4年間の調査計画の概要を協議のうえ、年度ごとに建設省とセンターの間で委託契約が結ばれて実施された。

調査範囲は、国道新設部分・高速道と橋台で接する部分・現国道拡幅部分・取り付けの県道・町道改良部分など、工事内容・時期・現況などがさまざまであった。そのため、調査区設定・調査方法・調査時期などが、埋蔵文化財調査の観点からふさわしくない点もあるが、最善を尽くした結果であり、当初の目的には達成できたといえよう。周辺も含めての調査区域・調査年度等は別項に記した。

センターでは、須坂以北の上信越自動車道・中野市内のいわゆるオリンピック道路の調査に対応するため、平成3年、中野市立ヶ花に中野支所を設置した。中野支所は翌4年から中野調査事務所となったが、平成7年度、降雪の中、信濃町内の発掘調査を終え、8年3月、閉所された。この間に、中野調査事務所の実施した旧石器時代遺跡の調査面積・出土遺物量は、日本における旧石器時代遺跡の調査史上、特筆されるべきものであり、その成果の公表はきわめて重要な意義を持つものである。現在、これらの整理作業は長野調査事務所に引き継がれており、万全を期して11年度の刊行を果たしたい。

2 調査体制と調査期間

調査体制及び調査期間は以下の通りである。

(1) 平成6年度

調査体制	事務局長	峯村忠司
同	総務部長	神林幹生
同	調査部長	小林秀夫
中野調査事務所長		関 孝一
同	庶務課長	高野幹郎 (6月より) 村山茂美
同	調査課長	土屋 積
同	調査研究員	大竹憲昭 白田広之 奥山宗春 小田切清一 片山 徹 代田 孝 鈴木孝則

調査期間 平成6年7月13日～同年11月30日

(2) 平成7年度

調査体制	事務局長	峯村忠司
同	総務部長	西尾紀雄
同	調査部長	小林秀夫
中野調査事務所長		関 孝一
同	庶務課長	村山茂美
同	調査課長	土屋 積
同	調査研究員	大竹憲昭 奥山宗春 小田切清一 神林忠克 鈴木孝則 柳沢佑三

調査期間 平成7年7月10日～同年11月30日

(3) 平成8年度

整理体制	事務局長	青木 久
同	総務部長	西尾紀雄
同	調査部長	小林秀夫 (兼長野調査事務所長)
長野調査事務所長		小林秀夫
同	庶務課長	戸谷 功
同	調査課長	土屋 積
同	調査研究員	大竹憲昭 神林忠克 谷 和隆 柳沢佑三

整理作業内容 遺物の分類・実測、遺構図作成

調査期間 平成8年6月5日～同年7月12日 (残件発掘)

(4) 平成9年度

整理体制	事務局長	青木 久
同	総務部長	山崎悦雄
同	調査部長	小林秀夫 (兼長野調査事務所長)

長野調査事務所長 小林秀夫
 同 庶務課長 戸谷 功
 同 調査課長 土屋 積
 同 調査研究員・調査員 大竹憲昭 谷 和隆 藤森俊彦 中島英子
 整理作業内容 遺物実測、写真撮影、遺物・遺構図のトレース・図版組み、原稿執筆、編集・校正

3 指導者・協力者

発掘調査と整理作業にあたり、下記の方々や機関にご指導ご協力を得た。お名前を記して感謝したい（敬称略・五十音順）。

阿部 芳郎 安藤 政雄 池谷 信之 伊藤 健 稲田 孝司 岡村 道雄 小野 昭 織笠 昭
 角張 淳一 栗島 義明 小杉 康 小菅 将夫 小林 達雄 近藤 洋一 佐藤 宏之 島田 和高
 白石 浩之 諏訪間 順 鈴木 次郎 鈴木 忠司 須藤 隆司 竹岡 俊樹 還 聰 鄭 漢德
 堤 隆 戸沢 充則 中島 庄一 永峯 光一 中村 由克 野口 淳 朴 英哲 比田井民子
 平口 哲夫 藤野 次史 保坂 康夫 松藤 和人 宮坂 光昭 宮下 健司 望月 明彦 矢島 國雄
 柳田 俊雄 領塙 正浩 細田 弘実 渡辺 哲也
 信濃町教育委員会 (株)写真測図研究所 (株)新日本航業 (株)パレオ・ラボ
 (株)ズコーシャ 中野土建(株) (株)北條組

4 調査参加者

青柳 正一 青山 嘉汪 青山 弘美 赤塙 範治 麻田 紀子 天尾 洋子 荒井 かち 荒井 恵子
 新井 晴美 池田 強 池田 ひで 池田 博之 池田 良高 池田 隆 石川 治 石川 清子
 石川 峰子 石田 寿文 石野清治郎 市川 武 市川ちず子 市川 由一 稲田 敏恵 井上 司郎
 岩泉 長子 岩下 とい 岩下 昭吉 岩村五十鈴 上島 啓作 牛木悦次郎 内山恵美子 内山 清子
 内堀はるえ 大川 和子 大川 成司 大塚千代子 大橋 理奈 大林久美子 岡田 勤 奥村 和子
 小崎 延子 大澤 孝枝 小田切吉夫 小沼 泉 小野 順子 小野沢時子 小日向 一 風間たき子
 片山 恒子 門内 政広 金井 清里 河崎 裕二 川村 幸彦 川村 齋一 川本真由美 北沢 富幸
 北原ひさえ 北村 智子 北森梨恵子 久保田貴美江 久保田哲子 倉石 久子 小金井都子 小坂 仁造
 小坂 幸子 小林 栄子 小林 和子 小林 定子 小林 節子 小林 千里 小林 初子 小林 春枝
 小林 昌子 小林美智子 小林 義治 小宮山武男 小山 周一 小山 富江 西條 桃恵 斎藤 静
 酒井 泉 酒井今朝吉 酒井 千代 酒井 優 坂口 秀美 坂田 与一 佐藤 桂子 佐藤さち子
 佐藤 幸人 塩崎 嶽 塩崎きみよ 静谷さつき 篠澤 きよ 志原三千夫 渡澤 仲治 渡澤とし子
 白井隆太郎 菅谷 澄子 鈴木 道子 須藤友美子 関 克也 関谷 照二 関谷 シン 関谷 花江
 篠崎恵美子 田相多恵子 高相 三男 高木けさ子 高城 大輔 高嶋 肇 高橋 肇昭 高橋 格
 高橋 静 高橋 周三 高橋 節子 高橋 深 高橋 安正 高柳すえ子 武井スミ子 竹内 寅雄
 竹内 三男 竹内 良子 武田 初枝 竹田 保夫 竹花 民夫 田崎 金一 辰野 重男 田中 格一
 田中せつ江 田中 迪子 玉井 久雄 田村 哲 檜原 康信 塚田 悅子 塚田 牛二 塚田 てい
 土屋 照美 土屋 と志 寺島 厚二 寺島 尊夫 寺田真木子 傳田 米三 徳武 洋 徳武 孝丈
 德竹 喜春 戸谷 邦隆 中島 透 中野 聖夫 中村華佐雄 中村 弘 中村 又二 中村 芳子
 中山 和江 中山 安雄 新野 源吾 横岸 由恵 野村 久子 野村竜太郎 萩原 みな 橋内 賢裕
 橋本 静子 長谷川悦子 長谷川和朗 長谷川繁信 長谷川芳恵 畑山 茂治 服部恵美子 服部カツ子

花岡 彰夫 原田 忠直 張間 政信 棚口のり子 日詰 甲子 深谷 亘 深沢 政雄 福岡 邦友
藤木 明子 藤沢 大樹 藤城 昇子 藤田 桂子 藤牧 久男 藤本 敏男 藤原 素子 踏分 実
古澤三千代 降旗 茂 降旗まつ子 保坂 勝子 保坂 吉次 堀川 章 卷柄 恵子 牧野タマエ
真篠 美晴 待井 春子 松尾よし子 松田 正一 松野クラライレーネ 松橋 千里 三木 陽平
宮川 朝子 宮川 優作 宮崎 正枝 宮沢 盈 丸本 市郎 三澤 貞利 渥 喜一 渥 美佐子
宮沢ツネ子 宮沢ひさみ 宮沢美代子 宮澤 亨 宮下 金一 宮本 和明 宮本五一郎 宮本 澄子
宮本みち子 宮本 宰江 宮本 義章 村上 安子 矢澤健太朗 矢澤ゆき子 矢島 弘子 柳沢 純子
山尾 洋美 山崎千代和 山田 啓子 山口 久江 山口 守 山本 昭 山本智恵子 山本 知良
山本 房子 横田 節子 横山 真 横山真理子 吉川耕太郎 吉川 忠吉 吉澤 聖子 吉沢平一郎
吉沢 好夫 吉田 米子 繊貫 良人

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) 試掘と調査区の設定

本書で報告する貫ノ木・西岡Aの両遺跡は、バイパスと上信越自動車道の路線が交差するところに位置するため、試掘から本調査にいたるまで並行で行われた。

調査対象地区には、畑等の耕作地は少なく、大半が山林であったため、遺物の有無を地表面でとらえることはほとんど不可能であった。そのため本調査に先立ち、末周知範囲を中心に用地的のほぼ全域で試掘調査を行った。試掘調査に際しては、上信越自動車道路線内を長野県教育委員会および長野県埋蔵文化財センターが、バイパス路線内は信濃町教育委員会が主に行い、それらの調査結果をもとに調査範囲を設定した。

西岡A遺跡は上信越自動車道路線内の試掘結果により遺跡範囲が大きく変更されることになり、バイパス路線内にも遺跡が拡大することが確認された。さらに、貫ノ木遺跡と西岡A遺跡との間は、現地形により線引きをしたが、立木除去後の本調査時に中間部分についてもトレンチ調査を行い、両遺跡の範囲を確認した。

(2) 遺跡名称と遺跡記号

本書で報告する遺跡の名称と遺跡記号は下記のとおりである。遺物・写真他の記録類の注記などもすべてこれによる。また、上信越自動車道分についても同じである。

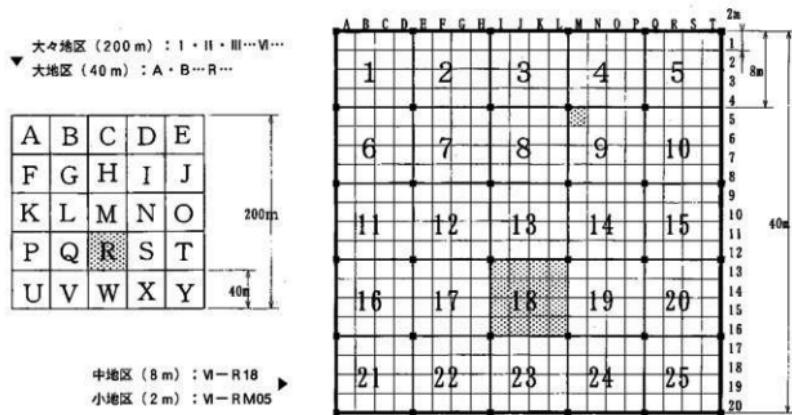
貫ノ木(かんのき)遺跡 MKN

西岡(にしおか)A遺跡 MNA

(3) グリッドの設定と呼称法

グリッドの設定にあたっては、国家座標を基準として大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階に区分した。

大々地区：調査対象地区全体にかかるように200m×200mの区画を設定し、北西から南東方向にI・II・



III…とローマ数字で表記した。

大地区：大々地区を40m×40mの25区画に分割し、北西から南東へAからYまでの大文字アルファベットを用いた。

中地区：大地区を8m×8mの25区画に分割し、北西から南東へ1から25の算用数字を用いた。

小地区：大地区を2m×2mの400区画に分割し、小地区とした。大地区の北西角を起点として東西軸上に西から東へAからTまでアルファベット、南北軸上に北から南へ01から20の数字を付して、両者の組み合わせで「A01」のように小地区名とした。

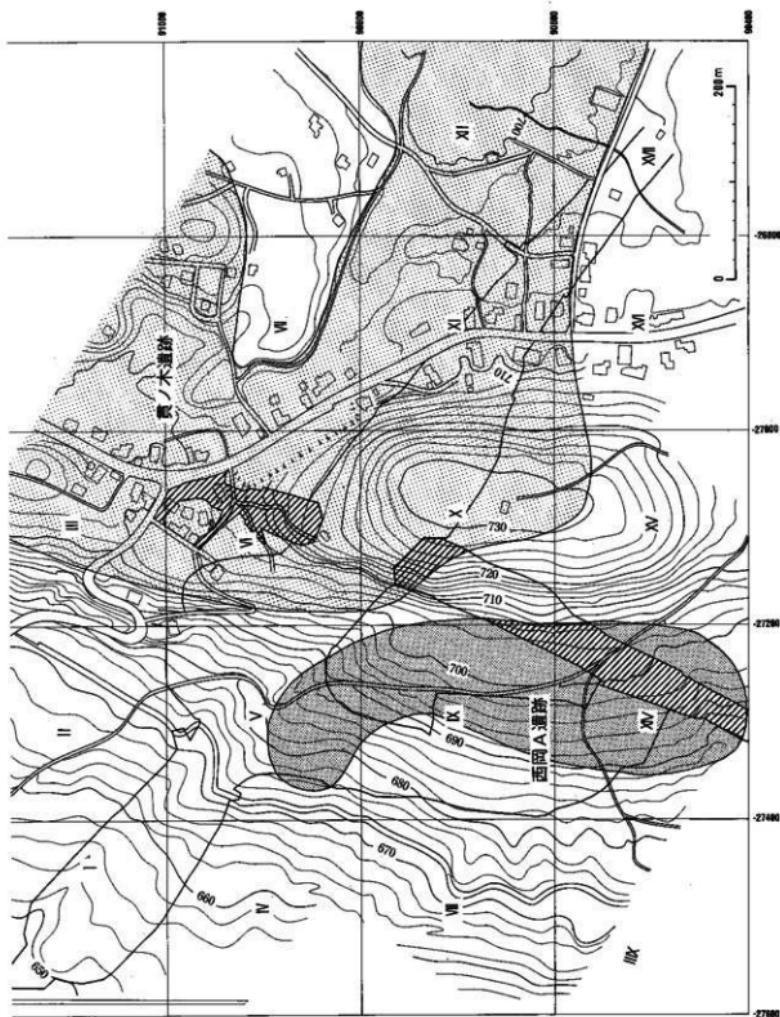
上記の呼称を組み合わせ、たとえば貫ノ木遺跡の大々地区「VI区」、大地区「R区」、中地区「18区」(8m×8m)は「VI-R18」と表記される。また、大地区「R区」を小地区に分割した「M05」(2m×2m)の場合は「VI-RM05」と表記される。

本調査は高速道の調査と同時に並行しておこなわれること、貫ノ木遺跡と西岡A遺跡は隣接していることから、グリッド設定に際し、一括して「I区」から「XVII区」まで大々地区の設定をおこなった。バイパス調査区に関する大々地区は、貫ノ木遺跡が「III・VI・X区」、西岡A遺跡が「IX・XIV区」である。

(4) 遺構記号と遺構番号

記録・注記等の便宜を図るために遺構名称は記号を用い、遺構番号は時代等にかかわらず種類ごと、検出順に付した。遺構記号は原則として検出時に決定するため、主として平面的な形態や遺物の分布状況等指標としたもので、必ずしも遺構の性格を示すものはない。整理段階で遺構名称変更の必要が生じた場合は、発掘時の遺構記号・遺構番号は欠番とし、新しい遺構記号の最終番号に追加した。また、遺構番号は高速道調査区と一連で付している。本書で報告する遺構番号は前述の理由から飛び番号が生じているが、混乱を避けるため発掘時の遺構記号・遺構番号をそのまま使用した。したがって最終遺構番号=遺構数とはならない。

なお、本書の遺構記号は当センターで共通して用いているもので、以下のとおりである。



第2図 貫ノ木・西岡A遺跡の調査区の設定

[S B] 2m以上の大さきの方形、円形、橢円形の掘り込み。(竪穴住居址、竪穴状遺構)

[S K] 単独もしくは他の掘り込みと関係が認められないS Bより小さな掘り込み。(土坑、陥し穴、貯蔵穴、井戸等)

[S H] 石(主に礫)が面的に集中するもの。ただし旧石器時代の石器・石片集中であるブロックには、発掘時に決定することが困難なため用いない。(集石、疊群、配石)

[S Q] 遺物が面的に集中するもの。(ごみ捨て場、祭祀址)

[S V] 炭化物集中

(5) 遺物の取り上げと記録方法

旧石器時代の遺物が主体となったため、遺物の取り上げに際しては、測量業者に委託して、光波トランシットを用い端点測量をおこなった。現地では、出土位置をmm単位までの精度で、端点の属性として、①点の種別(土器、石器、礫といった遺物の種類等)、②出土層位、③遺物番号をデータとして電子野帳に記録し、それをもとに作成した、編集図面、観測成果簿、観測データ(フロッピーディスク)の3種で管理している。また、疊群や良好な遺存状態で集中していた遺物については、別に微細図を作成した。

遺物の取り上げ番号は、遺構に帰属する遺物については、遺構ごとに1番から番号を付し、包含層・遺構外の遺物については大地区ごとに1番から番号を付した。注記については以下のとおりである。

貫ノ木遺跡第20号疊群3番の遺物は、MKN. S H20. 3と記す。

貫ノ木遺跡VI-R区250番の遺物は、MKN. VI-R. 250と記す。

2 整理作業の方法

(1) 遺物整理の方法と管理収納

遺物の洗浄については、使用痕観察のため、安山岩のような表面が風化・劣化が著しい遺物以外は、超音波洗浄機を用いた。

遺物の注記終了後、石器と礫と土器とに分別し、それぞれに整理作業を進めていった。

石器の整理では、最初に器種判別作業を行った。器種判別の観察項目は以下のとおりである。

器種/材質/礫面の遺存状態/欠損部位/遺存度/剝離方向/打面形態/打角/打面長/長さ/幅/厚さ/重量

器種判別後、石器実測作業と並行しながら、個体判別、接合作業をおこなった。

礫の整理では、礫の計測・観察を行った後、接合作業をおこなった。

土器の整理では、分類後、実測をおこなった。

遺物管理は、石器・礫・土器の大別にしたがい、それぞれ収納している。

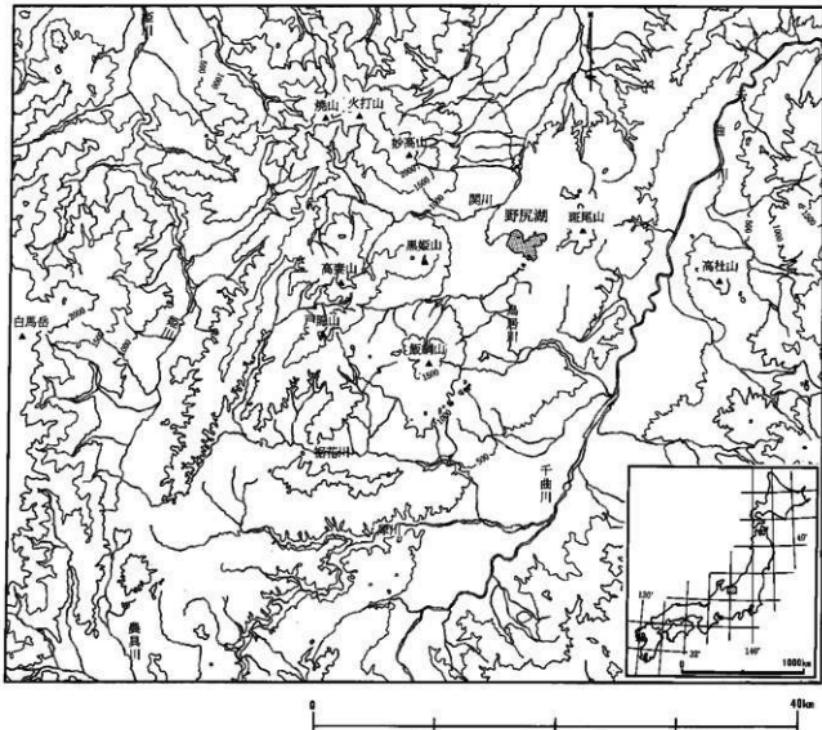
第3節 遺跡周辺の環境

1 遺跡の地理的環境

野尻湖は長野県の北端の上水内郡信濃町にある。この湖の西側を中心に北西南東方向に約6km、北東南西方向に約4kmの範囲に旧石器時代から縄文時代草創期の38遺跡が集中しており、野尻湖遺跡群と呼ばれている。貫ノ木遺跡、西岡A遺跡は野尻湖遺跡群に含まれる。

野尻湖は日本海に面する高田平野と内陸の長野盆地との間にあり、古くから交通の要所となっていた。湖の西側には北から妙高、黒姫、飯綱の火山が並び、東側には斑尾山が存在し、これらの山々に囲まれている。水面標高は654m、面積は3.96km²である。野尻湖の水は西岸の池尻川から流れ出し、関川を経て日本海へと注ぐ。鳥居川は遺跡群内から南西に向かって流れ、千曲川を経て日本海へと注ぐ。分水嶺は貫ノ木遺跡内に存在し、貫ノ木遺跡でも南東部分が島居川水系で、それ以北は関川水系になる。西岡A遺跡は関川水系で、貫ノ木遺跡も本報告書で対象となる範囲については関川水系に当たる。

野尻湖周辺には火山の影響によりローム層が堆積している。主たる火山灰の給源とそれぞれの火山の活



第3図 野尻湖周辺の地形 (40000分の1)

活動期は次のとおりである（地学団体研究会1996）。飯綱火山の活動期は約34万年前と約20万年～15万年で、約6万年前に水蒸気爆発を2回起こしている。黒姫火山の活動開始年代は約25万年前で最新のマグマ噴火は約4.3万年前である。妙高火山の活動開始年代は約30万年前で、最新のマグマ噴火は約4200年前である。焼山火山の活動開始年代は約3000年前で現在も活動中である。班尾火山は約70万年前と55万年前ごろに活動をしていた。したがって、野尻湖遺跡群が形成されていた時期には飯綱、黒姫、班尾火山はすでに休止しており、活動していた火山は妙高火山ということになる。また、焼山の活動は繩文時代にはいってからとなる。

野尻湖は約7～6万年前に起きたと思われる黒姫山からの池尻川泥流が、班尾山西麓からの川を堰き止めたことによって誕生した。その後、湖西側の仲町丘陵の隆起と湖東側の沈降により、形を変化させながら現在の野尻湖へとなっていく。貫ノ木遺跡の北西部にある池尻川低地は上部旧石器時代には野尻湖の一部であったことが確認されている。

野尻湖周辺は丘陵地帯となっている。旧石器時代の遺跡は丘陵の様々な場所に立地している。丘陵頂部、中腹の緩斜面やテラス状の場所、丘陵の裾部など比較的平坦な地形に遺跡が形成される場合が多い。また、現在の水田域となっている部分の多くが、かつては池や湖、湿地であったことが確認されており、野尻湖以外にも多くの水場が存在していたこととなる。これらの丘陵地形と水場環境の良さから、多くの狩猟対称動物が生息していたと考えられる。これら丘陵地帯では隆起・沈降が激しく旧石器時代には現在の地形とはかなり異なる様相を示していたと思われる。7～6万年前頃の野尻湖底堆積物である貫ノ木層が貫ノ木遺跡において約50mの比高差が確認されており、1万年で10m近く隆起していたことになる。したがって、旧石器時代の人々が活動していた当時は、現在の地形よりも起伏が緩やかであったと考えられる。

2 遺跡の歴史的環境

野尻湖はナウマンゾウの化石が湖底から発見されたことがきっかけとなり、古くから学術調査がおこなわれてきた。近年になって、町教育委員会や県教育委員会（埋文センター）により数多くの遺跡が調査されるようになり多大な成果があがってきている。それらの調査の経過について、信濃町立ナウマンゾウ博物館により簡潔にまとめられた年表があるので、第1表に転載した。特にこの2～3年の発掘調査の成果は著しく、現在それらの整理が進められている中で、遺跡群の評価は刻々と変化しているが、現時点では以下のようにまとめられよう。

現在確認されている野尻湖周辺における最古の人類遺跡は立ヶ鼻遺跡であり、中部旧石器時代（約5～4万年前）に相当する。立ヶ鼻遺跡からは、ナウマンゾウなどの動物化石と共に石器や骨角器などが出土している。立ヶ鼻遺跡以外では仲町遺跡で確認されているが、こちらも湖成層からの出土であり、陸上の風成層からはまだ確認されていない。

上部旧石器時代に入ると遺跡が激増し、野尻湖遺跡群が形成されるようになる。全国的に見ても遺跡数は多く、遺跡密度の高い遺跡群となっている。また、石器組成も特徴的で、1遺跡から1～数点の出土が一般的であった斧形石器を多量に組成する遺跡が多く存在する。また、斧形石器の研磨に用いたと思われる砥石も同じ遺跡内から発見されている。台形様石器も大量に出土しており、その形態も他地域のものと比較すると大形で齊一性の高いものとなっている。また、ナイフ形石器も多く存在する。同一時期と思われる遺跡間においても斧形石器、台形様石器、ナイフ形石器の組成が異なる点も注目される。

約2.5～2.4万年前の姶良丹沢火山灰（A T）降灰以後多くの遺跡が存在している。また、系統が異なると思われる複数の石器群が存在するようになる。裏の山遺跡や東裏遺跡のように黒曜石やチャート、無斑晶質安山岩などを石材とし、2側縁加工のナイフ形石器や槍先形尖頭器、搔器などを主な組成とする石器群、貫ノ木遺跡XIグリッドや七ツ栗遺跡のような珪質頁岩や珪質凝灰岩、無斑晶質安山岩を主な石材と



第4図 野尻湖周辺の遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	田 石 古 事 文 傳 承 構 造 新 原 平 安	中 近 世	田 石 古 事 文 傳 承 構 造 新 原 平 安	中 近 世	
1	虎沢A	古御・虎沢	○	○	○	○	○
2	廣沢B	古御・廣沢	○	○	○	○	○
3	池屋C	古御・池屋	○	○	○	○	○
4	梅屋D	古御・梅屋	○	○	○	○	○
5	梅屋E	古御・梅屋	○	○	○	○	○
6	池屋F	古御・池屋	○	○	○	○	○
7	林畔	古御・林畔	○	○	○	○	○
8	花ヶ入	古御・花ヶ入	○	○	○	○	○
9	古御城跡	古御・城ノ腰	○	○	○	○	○
10	猪崎城跡	古御・猪崎	○	○	○	○	○
11	曾川A	古御・曾川	○	○	○	○	○
12	曾川B	古御・曾川	○	○	○	○	○
13	寺坂	古御・寺坂	○	○	○	○	○
14	帝都	古御・帝都	○	○	○	○	○
15	朝久保	野尻・市川の内側久保	○	○	○	○	○
16	丸山C	野尻・丸山	○	○	○	○	○
17	山手	野尻・山手	○	○	○	○	○
18	曾川、赤川城跡	野尻・赤川	○	○	○	○	○
19	大木道A	野尻・大木道	○	○	○	○	○
20	大木道B	野尻・大木道	○	○	○	○	○
21	人木道C	野尻・人木道	○	○	○	○	○
22	小木道	野尻・小木道	○	○	○	○	○
23	野尻湖城跡	野尻・城ノ人	○	○	○	○	○
24	家老路城跡	野尻・家老路	○	○	○	○	○
25	城通りA	野尻・台場	○	○	○	○	○
26	城通りB	野尻・城ノ人	○	○	○	○	○
27	桜ヶ崎	野尻・桜ヶ崎	○	○	○	○	○
28	旧野尻湖中学校	野尻・舟場	○	○	○	○	○
29	杉久保	野尻・舟場	○	○	○	○	○
30	野尻鳥	野尻・錦ヶ島	○	○	○	○	○
31	立ヶ鼻	野尻・立ヶ鼻	○	○	○	○	○
32	御塙	野尻・御塙	○	○	○	○	○
33	川久保	野尻・川久保	○	○	○	○	○
34	土櫻稻荷	野尻・土櫻	○	○	○	○	○
35	小丸山・土櫻城跡	野尻・小丸山	○	○	○	○	○
36	河野D	野尻・河野	○	○	○	○	○
37	南向田B	野尻・土橋	○	○	○	○	○
38	南池	野尻・高山	○	○	○	○	○
39	清高台	野尻・高山	○	○	○	○	○
40	仲町	野尻・仲町	○	○	○	○	○
41	神山北	野尻・上山	○	○	○	○	○
42	杉久保	野尻・杉久保	○	○	○	○	○
43	神山A	野尻・神山	○	○	○	○	○
44	神山B	野尻・神山	○	○	○	○	○
45	神山C	野尻・神山	○	○	○	○	○
46	岡月台	野尻・岡月台	○	○	○	○	○
47	菅ノ木	野尻・菅ノ木	○	○	○	○	○
48	星光山莊A	野尻・山島	○	○	○	○	○
49	星光山莊B	野尻・山島	○	○	○	○	○
50	下山森A	野尻・下山森	○	○	○	○	○
51	下山森B	野尻・下山森	○	○	○	○	○
52	下山森C	野尻・下山森	○	○	○	○	○
53	下山森D	野尻・下山森	○	○	○	○	○
54	駒爪	野尻・高沢	○	○	○	○	○
55	上山森A	野尻・上山森	○	○	○	○	○
56	上山森B	野尻・上山森	○	○	○	○	○
57	瑞應A	野尻・瑞應	○	○	○	○	○
58	瑞應B	野尻・瑞應	○	○	○	○	○
59	大久保A	柏原・日向	○	○	○	○	○
60	大久保B	柏原・口向	○	○	○	○	○
61	大久保C	柏原・中山	○	○	○	○	○
62	大久保南	柏原・西山	○	○	○	○	○
63	西岡A	柏原・西岡	○	○	○	○	○
64	西岡B	柏原・西岡	○	○	○	○	○
65	毛織	柏原・毛織	○	○	○	○	○
66	上ノ原	柏原・上ノ原	○	○	○	○	○
67	駒ヶ丘	柏原・駒ヶ丘	○	○	○	○	○
68	御前山園地	柏原・御前山園地	○	○	○	○	○
69	小丸山公園	柏原・小丸山	○	○	○	○	○
70	笠置城跡	柏原・笠置城跡	○	○	○	○	○
71	東塚	柏原・東塚	○	○	○	○	○
72	裏の山	柏原・裏の山	○	○	○	○	○
73	伊勢見山	柏原・伊勢見山	○	○	○	○	○
74	東城跡	柏原・東城跡	○	○	○	○	○
75	御山	柏原・御山	○	○	○	○	○
76	熊合	柏原・熊合	○	○	○	○	○
77	新川山	柏原・新川山	○	○	○	○	○
78	五輪堂	柏原・五輪堂	○	○	○	○	○
79	仁之倉A	柏原・仁之倉	○	○	○	○	○
80	仁之倉B	柏原・仁之倉	○	○	○	○	○
81	仁之倉南	柏原・仁之倉南	○	○	○	○	○
82	長水A	柏原・長水	○	○	○	○	○
83	長水B	柏原・長水	○	○	○	○	○
84	風浦川第二魚塩場	柏原・風浦	○	○	○	○	○
85	上島	古間・上島	○	○	○	○	○
86	相原	古間・相原	○	○	○	○	○
87	一里塚	古間・一里塚	○	○	○	○	○
88	陣場A	古間・陣場	○	○	○	○	○
89	陣場B	古間・陣場	○	○	○	○	○
90	小古間	古間・久根郷	○	○	○	○	○
91	清水東	古間・清水東	○	○	○	○	○
92	清水尻	古間・清水尻	○	○	○	○	○
93	吹野原A	古間・吹野原	○	○	○	○	○
94	吹野原B	古間・吹野原	○	○	○	○	○
95	山根	富浦・山根	○	○	○	○	○
96	古間文館裏	古間・下島	○	○	○	○	○
97	大平A	富浦・大平	○	○	○	○	○
98	大平B	富浦・大平	○	○	○	○	○
99	針ノ木	富浦・針ノ木	○	○	○	○	○
100	毛間	富浦・毛間	○	○	○	○	○
101	毛間ヶ崎	富浦・毛間ヶ崎	○	○	○	○	○
102	毛間沢	富浦・毛間沢	○	○	○	○	○
103	御坊ノ原	富浦・御坊ノ原	○	○	○	○	○
104	美野里	富浦・美野里	○	○	○	○	○
105	日向林A	富浦・日向林	○	○	○	○	○
106	日向林B	富浦・日向林	○	○	○	○	○
107	七ツ原	富浦・七ツ原	○	○	○	○	○
108	香光田	富浦・香光田	○	○	○	○	○
109	庚申堂	富浦・庚申堂	○	○	○	○	○
110	西久保	富浦・水穴	○	○	○	○	○
111	水穴	富浦・水穴	○	○	○	○	○
112	大日方A	富浦・大日方	○	○	○	○	○
113	大日方B	富浦・大日方	○	○	○	○	○
114	富浦原	富浦・原	○	○	○	○	○
115	利賀台城跡	富浦・城山	○	○	○	○	○
116	海沢	富浦・海沢	○	○	○	○	○
117	東原	富浦・東原	○	○	○	○	○
118	鴨沢	富浦・鴨沢	○	○	○	○	○
119	南原A	富浦・南原	○	○	○	○	○
120	南原B	富浦・南原	○	○	○	○	○
121	乙原	富浦・乙原	○	○	○	○	○
122	中村	富浦・中村	○	○	○	○	○
123	自前A	富浦・自前	○	○	○	○	○
124	日細B	富浦・日細	○	○	○	○	○
125	御前若岳跡	富浦・舟山要塞	○	○	○	○	○
126	行	富浦・行	○	○	○	○	○
127	佐ノ原	富浦・佐ノ原	○	○	○	○	○
128	佐ノ神	富浦・佐ノ神	○	○	○	○	○
129	葛城	富浦・葛城	○	○	○	○	○
130	戸草城跡	富浦・船井	○	○	○	○	○
131	芦原	富浦・芦原	○	○	○	○	○
132	正寺守	荒瀬原・正寺守	○	○	○	○	○
133	荒瀬原	荒瀬原・原	○	○	○	○	○
134	大原	荒瀬原・大原	○	○	○	○	○
135	別院山	荒瀬原・山峰	○	○	○	○	○
136	石原	荒瀬原・石原	○	○	○	○	○
137	佛母	富浦・荒瀬原・佛母	○	○	○	○	○
138	万影	荒瀬原・万影	○	○	○	○	○
139	北ノ原A	平岡・北ノ原	○	○	○	○	○
140	北ノ原B	平岡・北ノ原	○	○	○	○	○
141	宮原	平岡・宮原	○	○	○	○	○
142	丸山	平岡・丸山	○	○	○	○	○
143	北山道	平岡・北山道	○	○	○	○	○
144	御料	平岡・御料敷地	○	○	○	○	○
145	向原	平岡・向原	○	○	○	○	○
146	丸谷地	雙葉・丸谷地	○	○	○	○	○
147	大糸道下	雙葉・大糸道下	○	○	○	○	○
148	海原(五箇山)	海原・五箇山・峰・古道場	○	○	○	○	○
149	上の山	海原・上の山	○	○	○	○	○
150	北中島	海原・北中島	○	○	○	○	○
151	中島	海原・中島	○	○	○	○	○
152	社山	海原・社山	○	○	○	○	○
153	宮ノ原	海原・宮ノ原	○	○	○	○	○
154	宮原ヶ原	大井・宮原ヶ原	○	○	○	○	○
155	大井	大井・大井	○	○	○	○	○
156	大井ヶ原	大井・大井ヶ原	○	○	○	○	○
157	大井ヶ原	大井・大井ヶ原	○	○	○	○	○
158	大井ヶ原	大井・大井ヶ原	○	○	○	○	○
159	大井ヶ原	大井・大井ヶ原	○	○	○	○	○
160	大井ヶ原	大井・大井ヶ原	○	○	○	○	○
161	北信	大井・北山寺	○	○	○	○	○
162	鍋場	大井・鍋場	○	○	○	○	○
163	七瀬	大井・七瀬	○	○	○	○	○
164	カジカガワ	大井・カジカガワ	○	○	○	○	○
165	雲仙寺跡	大井・雲仙寺	○	○	○	○	○
166	石楠	大井・石楠地	○	○	○	○	○
167	市道	大井・市道	○	○	○	○	○
168	高山	大井・高山	○	○	○	○	○
169	清水久保	大井・清水久保	○	○	○	○	○
170	吳山	大井・吳山	○	○	○	○	○
171	曾浦B	大井・曾浦	○	○	○	○	○
172	難池	大井・難池	○	○	○	○	○

第1表 野尻湖周辺遺跡一覧

し、基部加工のナイフ形石器、彫器を組成する石器群、西岡A遺跡のような無斑晶質安山岩を主な石材とし横長剣片を素材とするナイフ形石器を特徴とする石器群などが存在し、中には九州地方にみられるような剣片尖頭器や台形石器を組成する石器群もある。それぞれの石器群がある程度の時間幅をもって登場し、異なる系統の石器群が同時期に存在していた可能性も高いと考えられる。

上部旧石器時代終末期には断片的ではあるが多くの遺跡で、神子柴系石斧が発見されている。また、ナイフ形石器や槍先形尖頭器の石器群と比べると遺跡数は少なく、規模も小さいが細石器の石器群も存在する。

縄文時代草創期にも人間の生活の跡が確認される。星光山荘B遺跡では隆起線文土器片とそれに伴う石器類が多量に発見されており、その他にも爪形文土器を出土する遺跡などいくつかの遺跡が確認されている。表裏縄文土器の出土量は特に多い。その後、縄文時代前期頃までの遺物は多く発見されているが、中期以降になると少なくなり遺物が断片的に出土する程度になる。現在のところ縄文時代遺跡からの住居跡の発見はなく、土坑や陥し穴、集石遺構などが残されているのみである。

弥生時代・古墳時代の遺跡は非常に少なく、断片的に土器片などが出土するのみである。

平安時代になると再び遺跡数が増える。大規模な集落は発見されていないが住居が数棟ていどの小規模な遺跡が点在するようになる。

中世には野尻湖周辺に集落が点在するようになる。また、高田平野から長野盆地を結ぶ経路となっていたようだ（各遺跡の位置、時期については第4図、第1表を参照。なお、この遺跡地図等の作成には信濃町教育委員会の協力をえた）。

引用・参考文献

- 赤羽貞幸 1996 「野尻湖の生い立ちとその変遷」『アーバンクボク』35
酒井潤一 1996 「野尻湖と最終氷期の研究」『アーバンクボク』35
信濃町誌編纂委員会 1968 「信濃町誌」
地学団体研究会編 1996 「新版地学辞典」平凡社
野尻湖人類考古グループ 1994 「野尻湖遺跡群における文化層と旧石器文化」『野尻湖博物館研究報告』第2号

年度	野尻湖の発見	信濃町内の発見	高速道路の発見	おもなできごと
1948(昭23)	ナウマンゾウの化石発見			
1953(昭28)		杉久保遺跡の石器、旧石器と判明		
1958(昭33)	☆野尻湖開拓始まる 第1次野尻湖開拓	二之谷遺跡【開拓】		
1962(昭37)	☆野尻湖開拓始まる 第2次野尻湖開拓	杉久保遺跡		ナウマンゾウ、オオツノシ化石化を発見
1963(昭38)	第2次野尻湖開拓	伊勢見山遺跡(国学院大学) 杉久保遺跡		野尻湖発掘、C14年代測定と花粉分析による ラムネ水垢の発見
1964(昭39)	第3次野尻湖開拓	杉久保遺跡		はじめて石器(刮削)を発見
1965(昭40)	第4次野尻湖開拓	杉久保遺跡、鷹巣島遺跡		ナウマンゾウの頭骨の一部を発見
1966(昭41)		杉久保遺跡【駐車場】		
1967(昭42)		久保道跡【町道】		
1973(昭48)	第5次野尻湖開拓			「刀と星」の発見
1974(昭49)	74年3月原町制表 74年10月竹町調査			
1975(昭50)	第6次野尻湖開拓			ピーナス像(?)の発見
1976(昭51)	第1回地上発掘(仲町)	仲町【水道工事】		
1977(昭52)				
1978(昭53)	第7回野尻湖開拓			ナウマンゾウの頭骨を発見
1979(昭54)	第2回地上発掘(仲町)			馬鹿頭でナウマンゾウの牙を発見 仲町遺跡で織文墓群の土坑跡発掘 台形状のナウマンゾウ頭骨発見
1981(昭56)	第8次野尻湖開拓			【ナリ状木】骨董スクレイバーの発見 2.4mのナウマンゾウの牙発見
1982(昭57)	第3回地上発掘(竹町、向新田)			尾瀬文士部の発見
1984(昭59)	第9次野尻湖開拓			キルサイドの発見
1985(昭60)	第4回地上発掘(仲町、向新田、大久保南遺跡【土取り】 照月台、真ノ木)			向新田遺跡で縄石器文化確認
1987(昭62)	第10次野尻湖開拓			サガクリーバー発見
1988(昭63)	第5回地上発掘(真ノ木)			縄石器と配石を伴う生糞跡を確認 丸久道跡で平安時代の住跡を発掘 灰陶陶器、縄などが出土
1989(平1)		☆信濃教育委員会の調査始まる 丸谷地遺跡【町道】 大浦下遺跡【町道】		
1990(平2)	第11次野尻湖開拓	大浦下遺跡 上ノ原遺跡【開拓】 杉久保遺跡【町道】 一里塚遺跡【町道】 丸谷地遺跡【町道】		第1次発配でナウマンゾウの足跡化石を確認 上ノ原遺跡で5基が並んだ石柱が発見
1991(平3)	第6回地上発見	質ノ木遺跡【美術所】 大浦下遺跡【開拓】 丸谷地遺跡【古墳群】 赤川遺跡【団道18号】 辻屋遺跡【工場】		路上発見でナウマンゾウの化石発見
1992(平4)		質ノ木遺跡【美術所】 東高瀬遺跡【町道】 尻屋根遺跡【店舗】 赤川遺跡【団道18号】 辻屋遺跡【工場】		質ノ木遺跡で局部磨製石斧4点や特殊な尖頭器を発見
1993(平5)	第12次野尻湖開拓	東高瀬遺跡【特別養護老人ホーム】 東高瀬遺跡【宅地造成】 上ノ原遺跡【宅地造成】 毛無遺跡【町道】 西岡B遺跡【宅地造成】 七ヶ瀬遺跡【未道】	☆高速道路建設に伴う発掘調査始まる 日向村B遺跡 七ヶ瀬遺跡 東高瀬遺跡 質ノ木遺跡 普光寺遺跡	日向村B遺跡で石斧4点出土 上ノ原遺跡で杉久保遺跡Ⅱ型形石器多数出土 東高瀬遺跡(町)内系の石器群が出土 東高瀬遺跡(県)で「新出土須弥壇」出土
1994(平6)	第7回地上発掘	東高瀬遺跡【町道】 七ヶ瀬遺跡【未道】 日向村B遺跡【宅地】 質ノ木遺跡【宅地造成】 北野瀬遺跡【町道】 山根遺跡【広域農道】 高山遺跡【ゴルフ場】 市道遺跡【ゴルフ場】	七ヶ瀬遺跡 日向村B遺跡 大字B遺跡 東高瀬遺跡 質ノ木遺跡 普光寺遺跡	陸上発見で財布文化の石器多数発見 質ノ木遺跡(県)で砥石8点出土 山根遺跡で生糞土器が多数出土
1995(平7)		大久保南遺跡【未道】 上ノ原遺跡【ガソリンスタンド】 上ノ原遺跡【消防署】 役庭遺跡【急救病院対策】 山根遺跡【広域農道】 市道遺跡【ゴルフ場】 清水木保遺跡【ゴルフ場】 上ノ原遺跡【林道】 上ノ原遺跡【宅地】	七ヶ瀬遺跡 日向村B遺跡 東高瀬遺跡 大字B遺跡 上ノ原遺跡 質ノ木遺跡 普光寺遺跡 西岡A遺跡 星光山遺跡	大久保南遺跡(県)で黒曜石の石核がまとまつて出土 市道遺跡で陶土器など24,000点以上出土 星光山遺跡で子孫焼石斧など出土 上ノ原遺跡(町)で、戸内系の石器群が多数出土
1996(平8)	仲町遺跡、立が鼻遺跡で地質調査	上ノ原遺跡【堀跡】 吹ノ原A遺跡【広域農道】 山根遺跡【広域農道】 大久保南遺跡【未道】 七ヶ瀬遺跡【町道】 大字B遺跡【立が鼻】 山根遺跡【町道】	質ノ木遺跡	上ノ原遺跡で堀跡内系石器群が2つの地層から出土 吹ノ原A遺跡で砾石群が出土 山根遺跡で生糞中期の住居址が出土 火連下遺跡で绳文早期の土器が多數出土
1997(平9)	第13次野尻湖開拓 仲町遺跡、立が鼻遺跡で地質調査	吹野尻A遺跡【広域農道】 吹ノ原遺跡【未道】 東高瀬遺跡【町道】 上ノ原遺跡【町道】 照月台遺跡【店舗】 役庭遺跡【駐車場】		上ノ原遺跡で砾石と石斧素材がおかれた状態 由出 東高瀬遺跡で戸内系の石器群が出土 阿町台遺跡で古手の杉久保ナイフと小形の石器群が出土 吹ノ原A遺跡で大形の石核が出土

第2表 野尻湖周辺遺跡調査一覧

第2章 貫ノ木遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

貫ノ木遺跡は、長野県上水内郡信濃町大字野尻字貫ノ木1461他に所在する。本遺跡は野尻湖の西がら南西方向に次第に標高を増していく仲町丘陵の最南端に位置する。野尻湖までの距離は約2kmほどである。遺跡内は北流して日本海に注ぐ開川水系と一度南流して千曲川に注ぐ鳥居川の分水嶺にあたり、標高は700mから730mと比高をもち、小丘陵と低地が複雑に入り込んだ地形が存在する。

遺跡地は土取場等によって形成された崖面が多く、野尻湖発掘調査団により地層の観察がよくおこなわれてきており、「貫ノ木層」という神山ローム層に対比される水成層の模式地となっている。土層観察の折りに崖面より石器が発見されており、A・B・Cの3地点が以前より確認されていた（野尻湖発掘調査団1975）。

発掘は野尻湖調査団により1985年（A・B地点）と1988年（B地点）の2回、信濃町教育委員会により1991年～1992年にかけてC地点が、1995年にB地点が緊急調査されており、約3万年前以降の上部旧石器時代の文化層が5枚確認されていた（野尻湖人類考古グループ1987、同1990、渡辺・中村1993、信濃町教育委員会1996）。

上記のような過去の調査の結果から、遺跡の広がり、文化層の数とも野尻湖周辺の旧石器時代遺跡群のなかでも最大級の遺跡であることがわかつていていた。

今回の調査対象地区は、野尻湖発掘調査団により命名されたB地点の周辺にあたる。

2 調査の概要

（1）調査範囲と調査方法

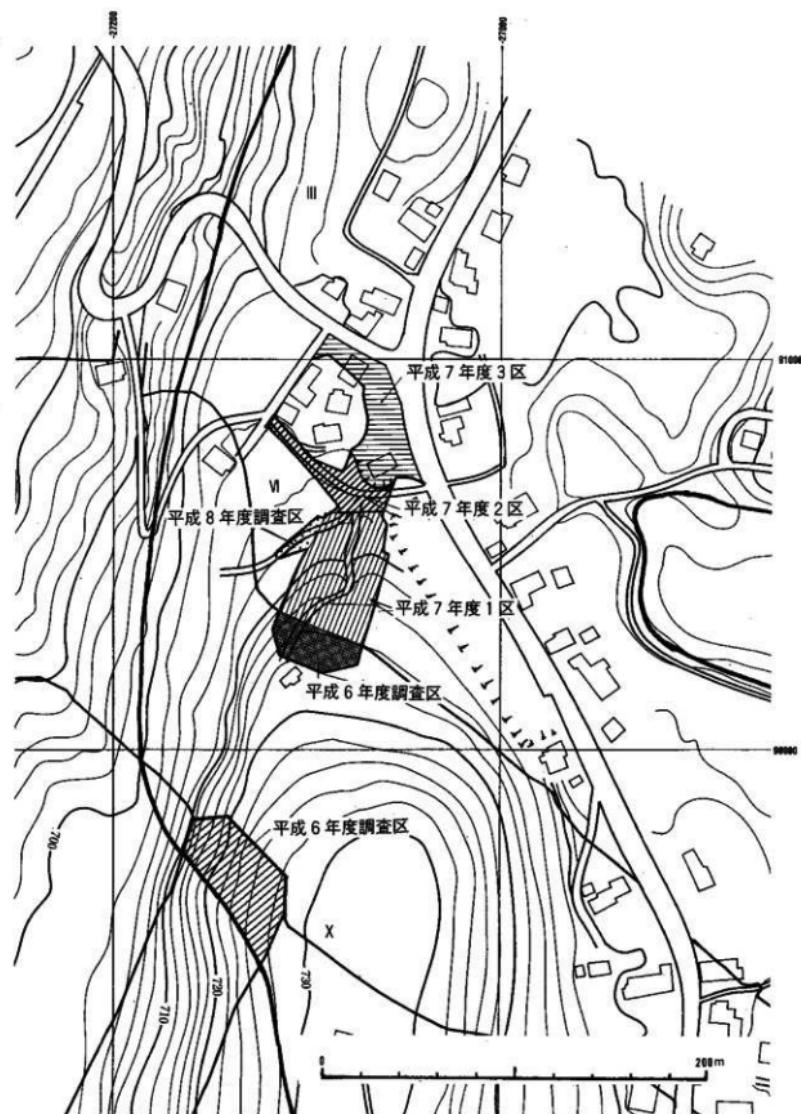
バイパス建設予定地で遺跡範囲にかかるのは、大々地区III・VI・Xの3区である。

III区においては、平成7年度、平成8年度にそれぞれ試掘をおこなったが、大規模な擾乱や低湿地にあたり、遺物はほとんど検出できず、トレンチによる試掘調査のみ実施した。本区は遺跡の中でも低湿地にあたり、遺物の稀薄な地域と考えられる。

X区は高速道用地にバイパス用地が台形状に食い込む地区（X-B・G・H・M区）にあたるが、傾斜がきつく、遺物が稀薄であった。遺物分布の中心はバイパス用地よりも東方の高速道用地内にある。ここで出土した若干の遺物については、高速道の報告書に含めることにした。また本地区のあたりに遺跡範囲の境界線がくるものと思われる。

VI区が調査対象地区的主体となり、3ヶ年にわたって断続的に調査をおこなった。平成6年度は、高速道用地とバイパス用地が接する部分であるVI-R・S区を高速道用地内の調査と並行しておこなった（平成6年度調査区）。

平成7年度は3年間の調査の中でももっとも調査面積があり、3つの地区に分けて調査をおこなった。1区は平成6年度調査区の北側で、大地区のVI-M・N・R・S区が相当し、北向きの緩斜面である。2区はVI-C・H・Iを中心とした比較的平坦な地形である。1・2区とともに周りの状況から遺物が全体的に包含されていることは予想がついたこと、また近くに切り通しがあり、土層の堆積状況も把握しやすか



第5図 貫ノ木遺跡調査区

ったことから、重機によりⅠ層・Ⅱ層を除去し、Ⅲ層より人力による精査をおこなった。ただし、2区の町道拡幅部分は一部Ⅱ層の堆積が厚かったため、繩文土器の包含層が検出され、その時点から手掘りに変更した個所もある。1・2区の中を排土処理の関係から、さらに分割して調査をおこない、遺物が出土しなくなるまで、人力で掘り下げ、完全に遺物が検出されなくなってから、重機を併用しだめ押しをおこない、調査終了とするのを繰り返した。

3区はVI-D区を中心として、2区よりもさらに1段低く、今回の調査範囲の中では一番低位に位置し、国道18号黒姫スキーリゾート入口交差点周辺で国道とほぼ同じ標高になる。現地形から、谷部の可能性が強く、遺物包含層の有無を確認するため重機により試掘トレンチを入れたところ、いくつかのトレンチで遺物の出土がみられた。そこで本地区の調査方法は、トレンチ調査をおこないながら、遺物の出土状況によって、順次トレンチを拡張し、面的調査に切り替えていく方式をとった。

平成8年度はバイパス本線にアクセスする私道の調査で、200mが調査の対象となった。大地区のVI-M区にあたり、すでに隣を前年度調査していることから、対象範囲の表土を重機により除去し、手掘りの精査をおこなった（平成8年度調査区）。

(2) 調査経過（調査日誌抄）

平成6年度

7月13日	平成6年度調査範囲（VI-R区）を重機による表土剥ぎ開始。	10月12日	調査区西端部で土坑6基を検出。
7月19日	Ⅲ・Ⅳ層の精査開始。	10月13日	調査区を北西から南東に走る断層をVa層上面で検出し、地形測量をおこなう。
7月31日	貫ノ木・日向林B・裏の山の3遺跡共同現地説明会	10月14日	土坑は深く、陥し穴であることが判明。陥し穴・旧石器時代遺物出土状況の空掻を実施。
8月8日	西岡A遺跡との境を確認するため、斜面部に重機によるトレンチ調査開始。	11月2日	陥し穴の垂直断面断ち割り調査
8月23日	重機によるトレンチ調査終了。	11月14日	現場事務所および駐車場への進入路で未調査部分について、進入路を既調査区を回して調査着手。
8月25日	空測・空撮を実施。	11月30日	平成6年度発掘調査終了。
9月9日	遺物の出土量多く、トータルステーションによる遺物の取り上げはVI-R区だけで547点にも及んだ。		

平成7年度

7月10日	1区重機による表土剥ぎ開始	し、面的調査をおこなうことにする。
7月18日	1区作業員による精査開始	9月12日 国道交差点付近のため、安全確保のため防護フェンスを設置する
7月28日	長野県遺跡指導委員会視察および現地指導	9月14日 四県会議現場視察
8月8日	1区南端の高速道との接合部の調査終了、引き渡し	9月25日 3区、作業員を入れて精査を始める
8月11日	砥石出土	10月3日 2区、町道拡幅部調査開始
9月6日	3区北端部の試掘に入る。遺物なし	10月16日 陥し穴群の調査終了、完掘写真撮影
9月7日	昨日の続きの試掘トレンチで遺物出土（繩文土器片）。盛り土及び黒色土が厚く、遺物包含層まで150cm以上ある。	11月15日 2区の調査を終了。3区のプレハブ下の調査をおこなうため、一時引き上げ。
9月8日	6日からのトレンチによる試掘調査の結果、遺物の出土したトレンチを拡張	11月20日 調査再開、プレハブ下の部分の調査をおこなう。
		11月30日 撤収、平成7年度契約分はすべて終了。

平成8年度

6月5日	バイパス本線へのアクセス道の調査開始、面積は約200m ² 。	7月10日	焼土層の記録、検討
6月7日	IV層まで掘り下げる。土器、槍先形尖頭器出土する。	7月12日	撤収作業
6月27日	Vb層の精査、遺物多数出土する。	10月28日	国道18号黒姫スキー入口交差点北の試掘調査。トレーンを入れるが、谷頭あたり、黒色土が厚く、また出水もあり、遺物の包含層は確認できなかった。
6月28日	礫群1基を検出。		
7月3日	調査区北壁にてVb層から焼土層？を確認。		

(3) 調査結果の概要

旧石器時代の遺物は調査範囲の全域にわたってひろがっていた。石器の分布には疎密があり、遺物集中部（ブロック）が30ヶ所以上確認された。主な遺物はナイフ形石器、台形様石器、斧形石器、槍先形尖頭器などと多様で、遺跡は約30,000年前～約12,000年前の上部旧石器時代の各時期にわたって形成されていったことがわかる。また、礫群も各時期にそれぞれ伴っていたようで、石器ブロックと礫群の関係を捉えることによって当時の居住様式が明確になる好資料といえる。

縄文時代は低地部において良好な包含層が残されていたため、早期橢円押型文土器、沈線文系土器、前期羽状縄文土器が検出された。特に沈線文系土器は県内でもまとまった資料といえよう。遺構としては、陥し穴が多数検出され、並んでいるものもあった。覆土の上層に特徴的な火山灰を含んでいることから、早期の所産と考えられ、これも当該期の好資料といえよう。

(4) 基本土層（第8図）

遺跡の地形は概略3つに区分される。一番標高がある、X区付近の丘陵頂上部、そこから1段下がったVI-R・S区の北向きの緩斜面、さらにVI-D区が中心となる低地部である。土層は低地部と台地上で違う。低地部ではII層の堆積が厚く細分される。基本土層を以下に示す。

I層：表土 黒色土（Hue7.5YR 1.7/1）白色粒子、黄色粒子を含む。搅乱層も含む。地表面でIIa層固くしまっている。

II層：黒色土（Hue7.5YR 1.7/1）柏原黒色火山灰層。低地部では厚く堆積しており、以下のように細分される。

IIa1層：黒色土（Hue7.5YR 1.7/1）マトリックスはI層と同じ。ただ白色、黄色粒子をほとんど含まない。I層に比べ柔らかい。

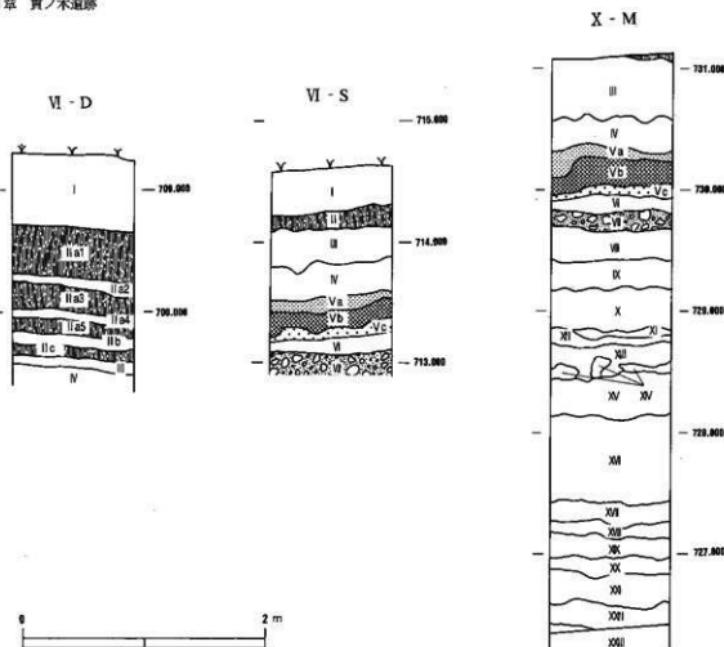
IIa2層：黒色土（Hue7.5YR 2/1）マトリックスは色調が若干褐色味をおびる他はIIa1層と変わらない。白色粒子が目立つ。

IIa3層：黒色土（Hue7.5YR 1.7/1）IIa1層とほとんど同じ。ただ白色粒子がIIa2層ほどではないにしろ若干含まれる。

IIa4層：黒褐色土（Hue7.5YR 2/2）白色粒子、黄褐色火山灰粒子（小ブロックといった方がよいかもしれない。径2～5mm）をよく含む。妙高の火山灰を含む層か。

IIa5層：黒褐色土（Hue7.5YR 2/2）マトリックスは基本的にIIa1・IIa2層と同様。白色粒子はほとんど含まない。

IIb層：明赤褐色土（Hue5YR 5/8）マトリックスはIIa5層になると考えられるが、ごく限られた範



第6図 貫ノ木遺跡基本土層

間に本層があらわれる。調査区全面にはみられず、低位面方向に分布した。粘性の強い、一見焼土のような土である。また赤味の強弱があり、平面的にはまだら状になる。径50~60cmの赤味の強い部分が点々とあり、周りに弱い赤味の部分がある。

IIc層：黒褐色土（Hue7.5YR 3/1）マトリックスはIIa5層と同じ。遺物包含層となる。やや団粒状にみえるところがある。

低地部III層：灰褐色土（Hue7.5YR 4/2）II層とIV層の漸移層と考えられる。若干の赤褐色粒子を含む。粘性に富み、固い。

低地部IV層：黄褐色水付ローム層（Hue10YR 5/8）赤色スコリアを若干含む。粘性に富む。

III層：黒褐色土（Hue10YR 3/2）厚い層をなし、上層部ほど黒味が強い。下層部に黄色ロームを多く含む（20%）。粒子はやや粗く粘性は小さい。野尻湖発掘調査団（以下調査団と略す）のモヤ層に対比される。本層下部より旧石器時代の遺物包含層となる。

IV層：黄褐色土（Hue10YR 5/6）層の上部にIII層の黒色土の入り込みがみられる（5%）。層の下部に鈍い黄褐色の粘性のあるローム粒（1~3mm）がみられる（10%）。調査団の上部野尻ローム層IIに対比される。

Va層：褐色土（Hue10YR 4/4）灰黄褐色ローム粒（1~5mm）を含む（10%）。粒子がやや粗く、粘性が少しある。北側約1mに灰黄褐色土の集中部（40%）がみられる。高速道調査地点では本層の中位で始良丹沢火山灰（AT）がブロックで確認された。調査団の上部野尻ローム層II最下部に対比される。

Vb層：暗褐色土 (Hue10YR 3/4) 粒子の細かい密なローム塊で、粘性がかなりある。調査団の上部野尻ローム層II黒色帶上部に対比される。

Vc層：褐色土 (Hue10YR 4/6) Vb層をブロック状に含む。調査団の上部野尻ローム層II黒色帶下部に対比される。旧石器時代の遺物は上層に比べ激減する。

VI層：明褐色土 (Hue7.5YR 5/6) 同色のローム粒を多く含む (50%)。粘性が少しある。調査団の上部野尻ローム層Iに対比される。

VII層：赤褐色土 (Hue2.5YR 4/6) 固い塊状をなし、内部に黄色の粒子 (1~3mm) を多く含む (10%)。もろくはげやすい。調査団の中西部野尻ローム層(赤スコ)に対比される。本層より下部には1点の遺物も確認されなかった。

VIII層：黄褐色土 (Hue2.5Y 4/6) 固くしまった岩盤状をなす。粒子は細かく密である。粘性はない。(青ヒゲ)

IX層：明赤褐色土 (Hue5YR 5/6) 粒子が粗く小さな塊をつくる (3~5mm)。渴くと白黄色になり、表面はぼろぼろとなる。青白い小粒の火山礫を多く含む (3%)。

X層：黄褐色土 (Hue10YR 5/6) 粒子が細かく粘性をもつ。青白い小粒の火山礫を層の上部にわずかに含む (1%以下)。

X I層：オリーブ色土 (Hue5Y 5/4) 粒子が粗く砂状の塊を為す。(ドライカレー)

X II層：オリーブ褐色土 (Hue2.5Y 4/3) 粒子が細かく固くしまっている。間にX VII層を含んでいるところもある。粘りはない。(コナズキ)

X III層：にぶい黄橙色土 (Hue10YR 6/4) 粒子は細かく固くしまった層を為す。青白い火山礫 (1~10mm) を多く含む (5%~7%)。

X IV層：灰オリーブ色土 (Hue5Y 5/3) 細かい砂状の塊で固い岩盤を為す。(プレッチャーゾーン)

X V層：褐色土 (Hue10YR 4/6) 青白色の小粒 (1~3mm) の火山礫を多く含む (5~7%)。粒子が細かく粘りが少しある。赤スコリア粒 (1~2cm) をわずかに含む。

X VI層：三点セット 灰色土と明褐色土の互層が三回繰り返される。

X VII層：褐色土 (Hue10YR 4/4) 細かい粒子で密な層を為す。赤スコリア粒 (1~2cm) をわずかに含む。北端近くに灰ドロ (?) を少し含む。

X VIII層：黄褐色土 (Hue10YR 5/6) 粒子は細かい。層の堅さはX VIIより弱い。所々に黄ゴマ (粒子が粗い砂状の塊) を含む。粘性のある土である。

X IX層：にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5/4) 固い層を為し、青白い火山灰 (1mm以下) をかなり多く含む (7~10%)。

X X層：褐色土 (Hue10YR 4/6) 固くしまった層になっているが、赤スコリア粒 (1~3cm) を多量 (25%) に含む。粒子は細かく粘性が少しある。

X XI層：明黄褐色土 (Hue10YR 6/6) 粒子が細かく粘性が強い。水分を多く含む。黒いガラス状粒 (輝石) を多く含む (3%)。

X XII層：黄褐色土 (Hue10YR 5/6) 細かい粒子の土でしまった層を為す。青白い火山粒 (1mm以下) を少し含む (2%)。

X XIII層：黄褐色土 (Hue10YR 5/8) 粒子が細かく密である。黒いガラス状粒 (輝石 1mm以下) を若干含む。水につきやや脱色している。

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

1 概要

今回の調査で発見された旧石器時代の所産として認定した遺物は総数9382点で、内訳は石器類が7135点、礫が2247点であった。

主要な石器には、台形様石器、斧形石器、砥石、ナイフ形石器、槍先形尖頭器などがあり、約3万年前から、1万2千年前の上部旧石器時代（後期旧石器時代）の各時期に残された石器群であり、複数の文化層が存在していたとみていい。層位別の器種組成、石材組成、石材重量を第3表～第5表に示した。

遺物の集中（ブロック）は、大別して約30ヶ所、細別すれば50ヶ所以上になると思われる。本遺跡における旧石器時代の遺物包含層はIII層～Vc層であるが、その層厚は薄いところでは50cmほどしかなく、複数の文化層が同一平面に重複した場合、その分離が非常に困難となる。ブロックの認定に際しても、平面分布のみでおこなうことは危険である。そこで遺物の石材別個体の判別が必要になってくる。つまり個体判別を行なながら文化層の認定およびブロックの設定作業が行われることになる。さて、本報告のバイバス地区は、高速道の調査範囲と接していることから接合関係、個体別資料分類等今回の調査範囲だけでは完結しない。つまり個体分類も高速道調査範囲と調整するべきである。したがって、今回、個体分類も大きく行なったのである。

文化層の認定とブロックの切り分けは高速道調査部分を含めて、高速道の報告の中で最終決定をしたい。したがって、分布図は文化層ごと、ブロックごとに提示するのではなく、原則として第III層以下の層準から出土した石器を、大地区を4分割するようにして提示した。

器種	層位	II	III	IV一括	IV上	IV下	V一括	Va	Vb	Vc	攢乱	合計
ナイフ形石器			11	13	1	1	3	14	5			48
台形様石器	1	5	12			5	3	19	13			58
槍先形尖頭器	1	4	2	1								8
斧形石器		3	2				2	4	4			15
剝 器	4	20	24	5	2	2	27	14	1			99
彫 刀		4	5	2	2	2	13	1				29
彫 器	1	2					2					5
揉 雜 器		1					1	1				3
楔形石器	1	25	23	6	4	12	23	12	3	1		110
石 刃		9	11	1	3	1	4	16				45
折断片	1	6	3			2	3	2				17
2次加工のある剝片	5	64	48	7	8	9	42	27	4	3		217
微細剥離痕のある剝片	3	29	42	3			12	24	21	2	2	138
敲 石	1	10	11		1	7	13	17	2			62
砥 石		3	3		3			2				11
凹 石								1				1
台 石				1			2	3				6
礫 器			1									1
石 核	3	83	85	16	13	31	116	86	4	2		439
原 石		3	5			2	2	5	1			18
削 片		1	1		1			1				4
剝 片	53	912	879	177	152	544	785	495	97	20		4,112
碎 片	26	203	338	66	65	252	341	281	113	1		1,686
有茎尖頭器				1								1
合 計	100	1,399	1,508	286	260	886	1,436	1,004	227	29		7,135

第3表 貢ノ木遺跡旧石器時代器種組成

材質	層位	II	III	IV一括	IV上	IV下	V一括	Va	Vb	Vc	擾乱	合計
無斑晶質安山岩		45	778	885	186	188	550	833	495	17	20	3,997
チャート		12	223	213	57	23	118	189	169	148	2	1,154
黒耀石		7	136	131	26	27	104	182	143	23	4	783
珪質凝灰岩		18	89	108	5	3	38	52	66	4	2	385
珪質頁岩		1	41	36	6	3	19	29	21	29		185
玉髓		1	40	37	4	1	14	36	25			158
凝灰岩		1	20	27		5	9	38	36	1		137
鉄石英		11	23	21		1	18	18	12			104
砂岩		1	13	9	1	8	6	35	14	1		88
硬質頁岩		2	10	14				6	4	1	1	38
安山岩		1	4	8			4	4	6	1		28
蛇紋岩		8	5				4	5	5	1		28
頁岩		2	5	1			1	7	5			21
不明		9	3		1				1			14
緑色凝灰岩			4					1	1			6
下呂石		1	1					1		1		4
石英		1	1				1		1			4
ホルンフェルス			1									1

第4表 貢ノ木遺跡旧石器時代石材組成

材質	層位	II	III	IV一括	IV上	IV下	V一括	Va	Vb	Vc	擾乱	合計
無斑晶質安山岩	503.95	9,947.56	8,405.49	1,509.51	1,495.25	6,846.12	18,630.13	8,370.68	166.61	281.84	56,157.14	
砂岩	74.34	647.34	3,338.88		2.41	1,270.74	1,112.25	6,796.25	10,377.67	0.44		23,620.32
安山岩	294.15	1,075.50	3,001.37				3,982.92	9,920.00	4,705.06	169.13		23,148.13
チャート	35.66	2,997.28	2,933.16	629.86	349.64	942.40	2,069.19	1,165.35	736.07	8.61	11,867.22	
凝灰岩	40.87	641.19	1,219.33		51.16	754.36	2,462.05	3,465.79	31.70		8,666.45	
珪質凝灰岩	64.95	1,546.34	1,792.38	96.59	45.81	718.62	1,240.21	1,413.37	4.45	17.69	5,940.41	
黒耀石	31.38	747.94	763.10	92.27	148.15	493.24	1,007.08	693.83	26.52	42.49	4,045.98	
珪質頁岩	7.60	1,361.63	256.82	69.84	32.89	215.97	219.55	161.40	96.93		2,415.43	
玉髓	0.90	271.57	413.20	10.89	6.06	231.50	253.81	307.72			1,495.56	
鉄石英	14.66	372.08	184.15		30.29	324.45	239.08	67.67			1,223.39	
蛇紋岩		72.61	185.18				327.87	174.65	69.35	7.93		837.59
頁岩		155.88	138.89	6.81		45.54	203.51	44.94				595.48
ホルンフェルス		430.00										430.00
硬質頁岩	6.76	89.22	94.43					63.94	19.04	0.70	5.63	269.72
緑色凝灰岩				9.41				37.05	51.30			97.76
下呂石		20.03	8.42					29.51		5.17		63.13
石英		0.29	0.43				1.01		28.18			29.91
不明		304.66	291.79		20.46				1,210.00			1,826.31
合計	1,075.20	20,681.12	23,036.35	2,418.09	3,450.45	15,996.25	43,318.01	32,151.35	1,247.65	356.26	143,739.73	

第5表 貢ノ木遺跡旧石器時代石材別重量(g)

2 遺物の分布

貫ノ木遺跡旧石器時代石器の分布を第7図に示した。調査区のほぼ全面にわたって遺物の分布が見られたが、なかでも疎密のあることがみてとれる。それらをブロックとして認定すれば約30個所ほどの集中部にわけられる。

個別の詳細分布を第9図～第23図にかけて掲載した。いくつかの特徴的な分布状況について説明する。

第9図はVI C区の分布図である。遺物はIII・IV層からV a・V bの各層にわたって石器群が検出されている。2時期以上が考えられる。

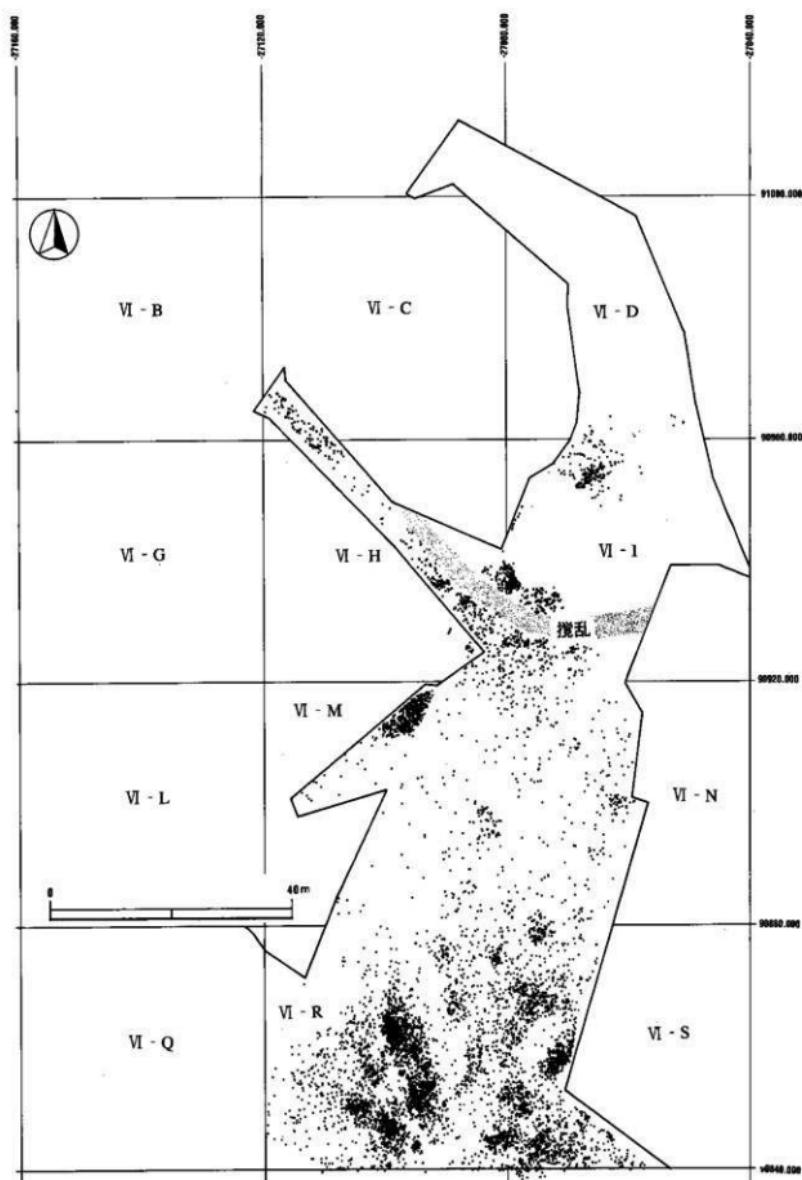
第10図は、IV層からV a・V b層の石器群が認められる。台形様石器(40)、斧形石器(68)をともない、石核・剥片・碎片の多いブロックと、その南側に台形様石器(31・43)、砥石(116)といった比較的道具類が集中するV b層のブロックがみられる。ただこのV b層のブロックには搔器(86・87)や槍先形尖頭器(60・61)が近接して出土しており、それらは出土層位もIII～V a層までで、別のブロックに分離されるものと思われる。

第12図の真中の空白部は搅乱によって遺物包含層が削られてしまっているが、この搅乱部分を境に分布状況に違いがみられる。搅乱の北側では、石核が密集する地点がある。これらの石核は無斑晶質安山岩製で打面転移の著しいものである。おそらくIV層を主体としたナイフ形石器文化の所産と考えられる。そしてより南半のブロックは斧形石器(63)や、台形様石器(29)などをもつことから、前者よりも古いブロックと考えられよう。

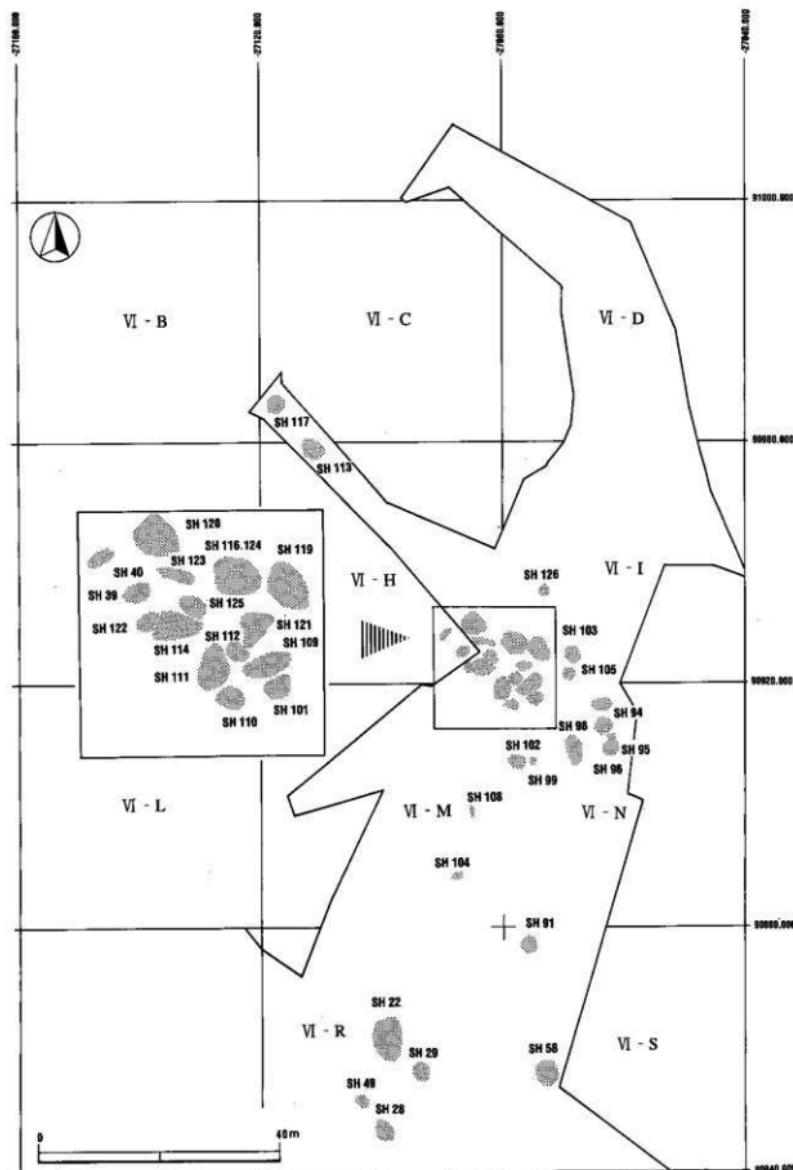
第14図(第13図までひろがる)は非常に特異な分布状況を示している。図の北西部に位置するブロックと、周辺部の遺物分布が希薄なゾーンとの境界が明瞭であった。通常、分布域の周辺部は散漫で、ブロックの境界線は引きにくい本例は違った状況を示している。垂直分布もV b～V c層にかけて集中し、あまり遺物が上下移動していない。さらにブロックのほぼ中央にあたる調査区の壁面V b層上面で赤変した土壤を確認した。ただ残念なことに平面的な広がりが調査範囲外にのびるために、ブロックとともにその規模・平面形状はとらえられなかった。しかしながら、何らかの掘り込みがあったことを想定させられる遺構である。遺物も今回の調査区ではあまりみられなかった形態の台形様石器(53・54)が伴っている。

第18図～第23図にかけてはVI-R・VI-S区の分布図を示した。この両区は遺物がもっとも密集して出土した地区で複数の文化層が想定されそれらが重複してブロックの切り分けが困難であった。南に展開する高速道調査区と密接な関係があるため、高速道の整理作業の進行に合わせないとブロックの切り分けは不可能であった。

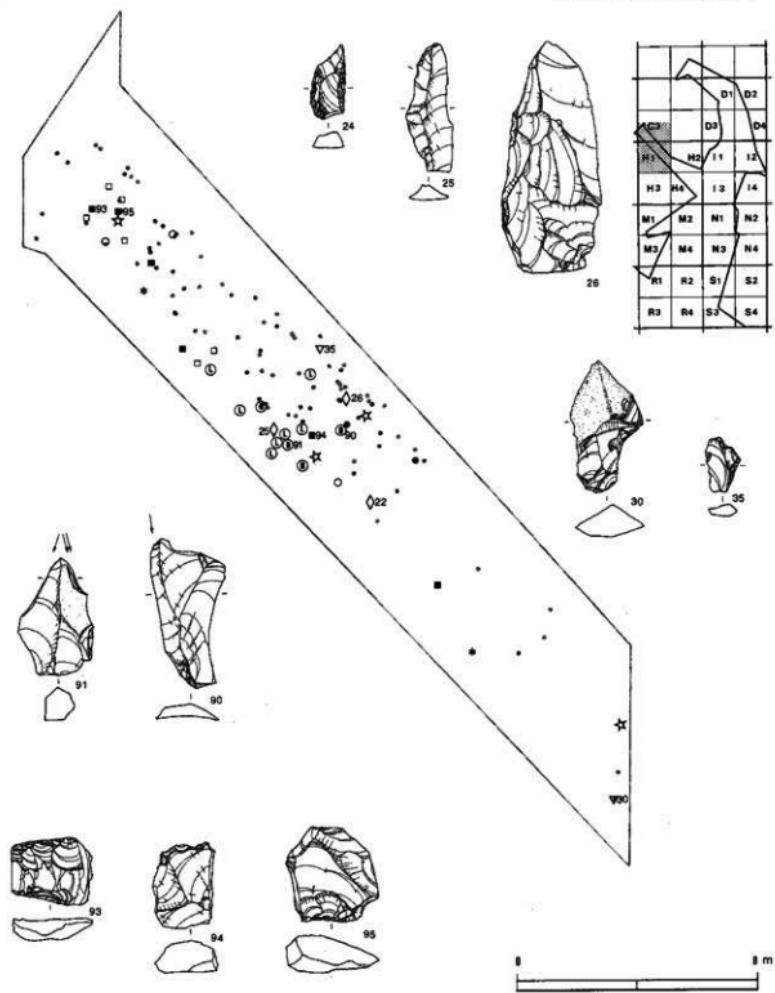
第24図～第27図には石材別の遺物分布全体図をしめした。

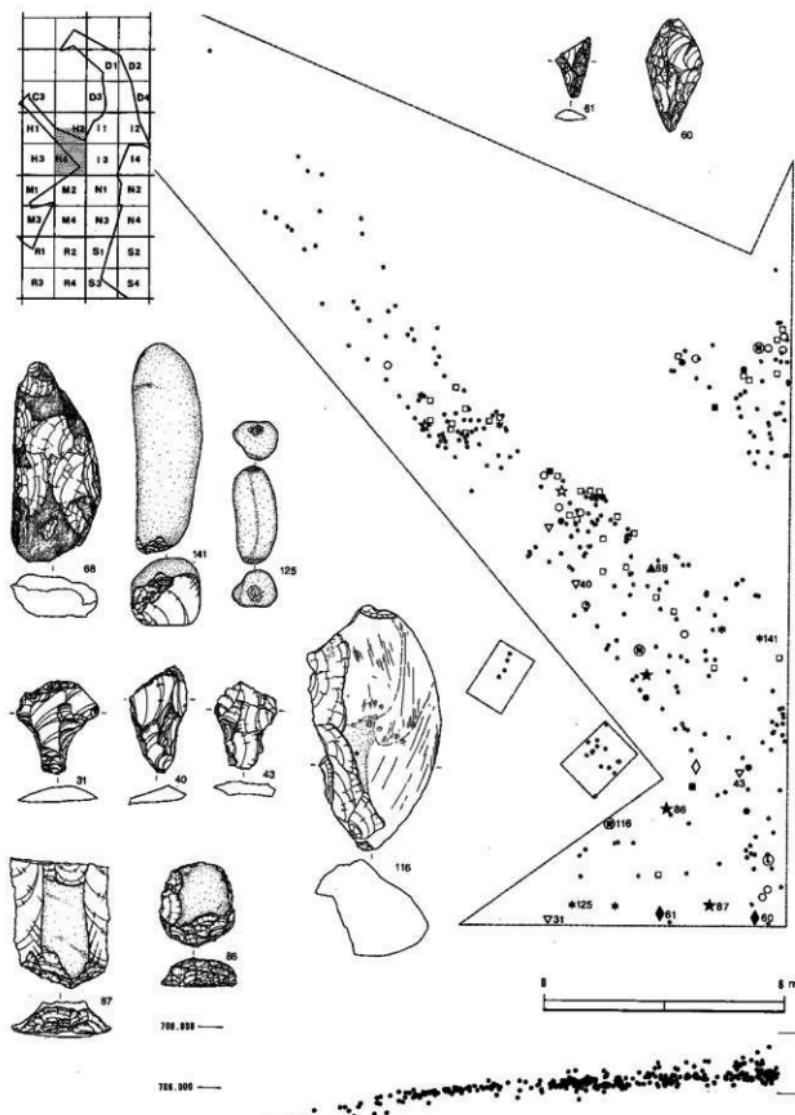


第7図 實ノ木遺跡旧石器時代石器分布図

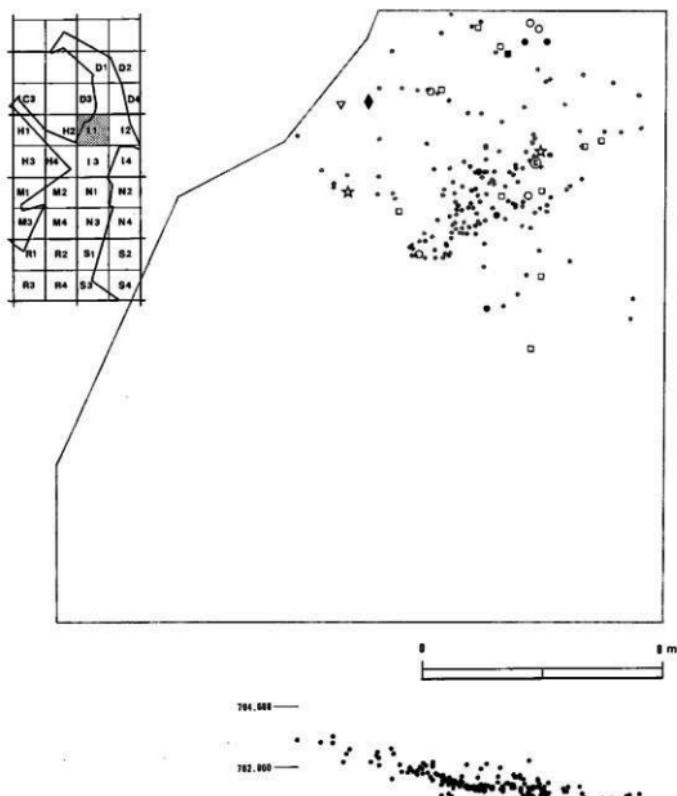


第8図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺跡群

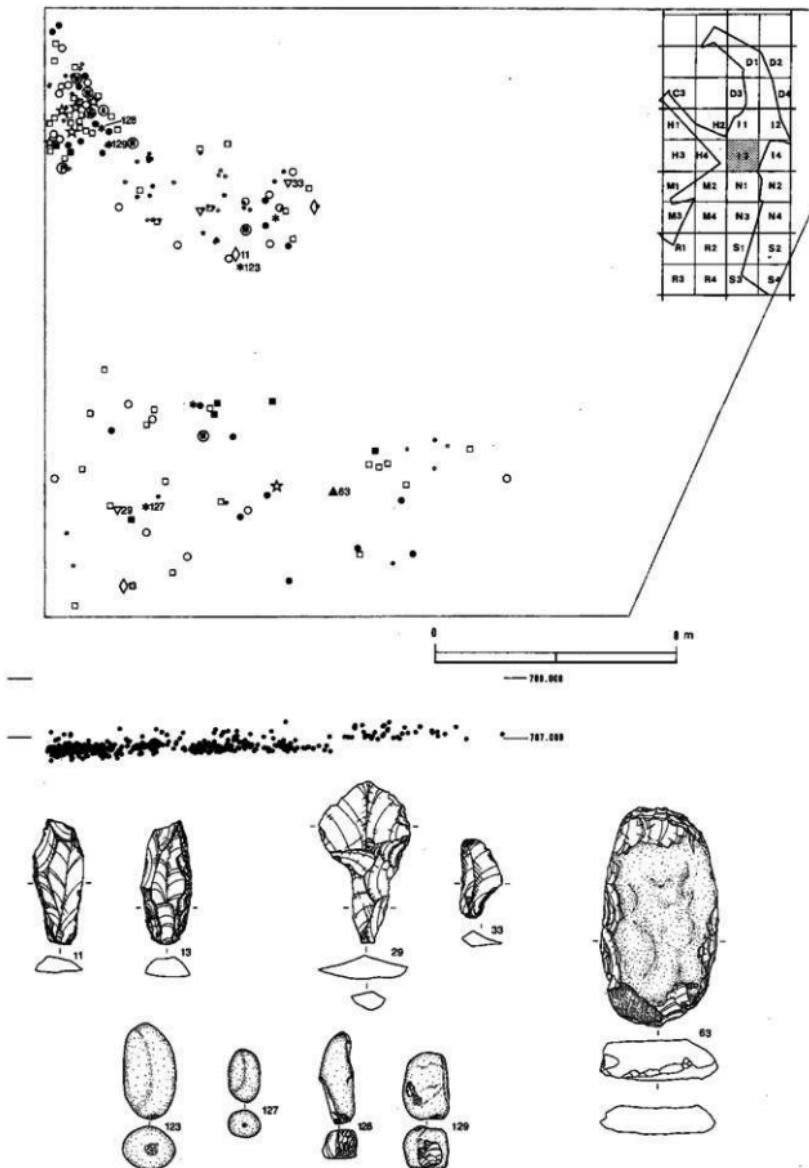




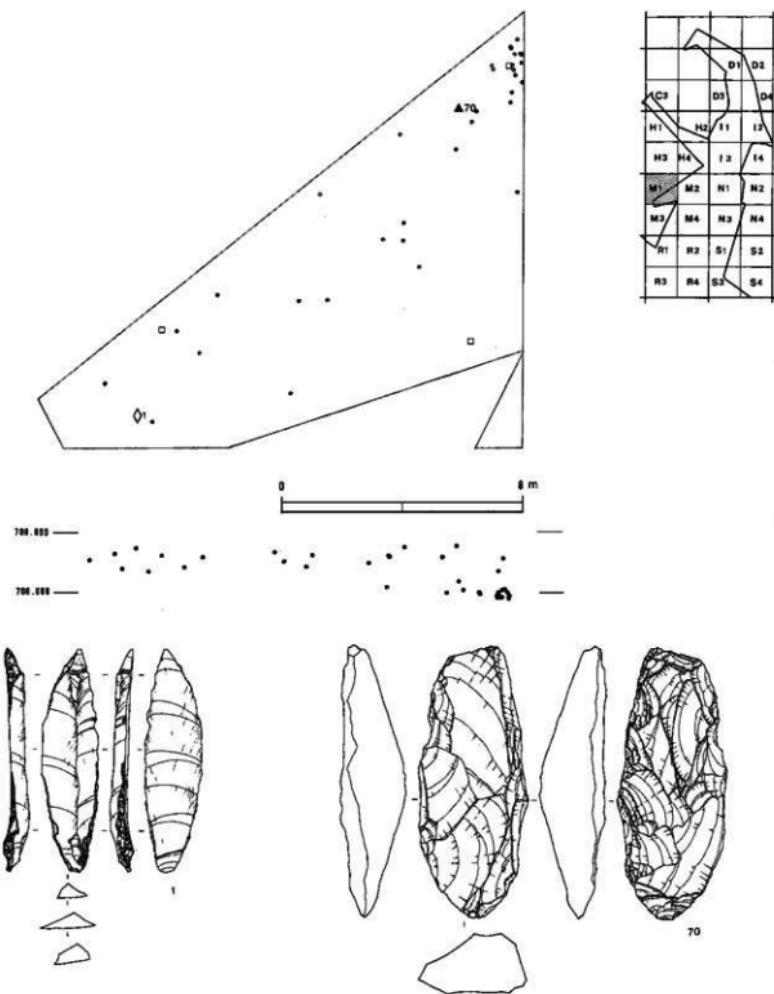
第10図 賀ノ木遺跡旧石器時代遺物分布 2



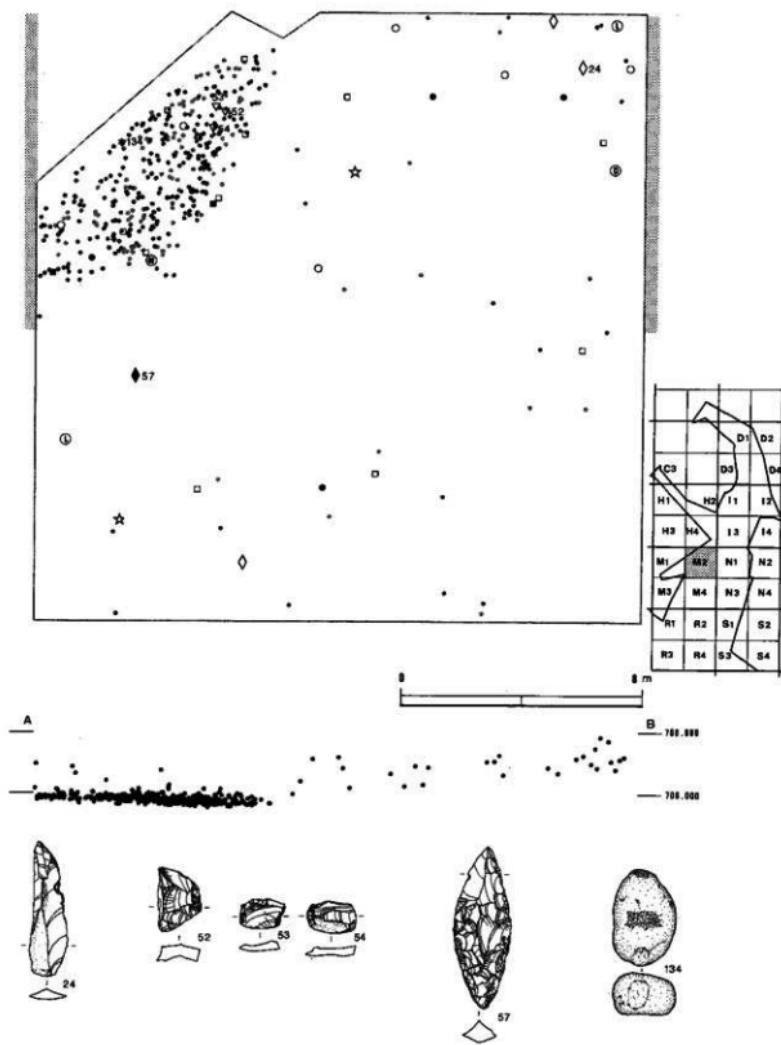
第11図 黒木遺跡旧石器時代遺物分布 3



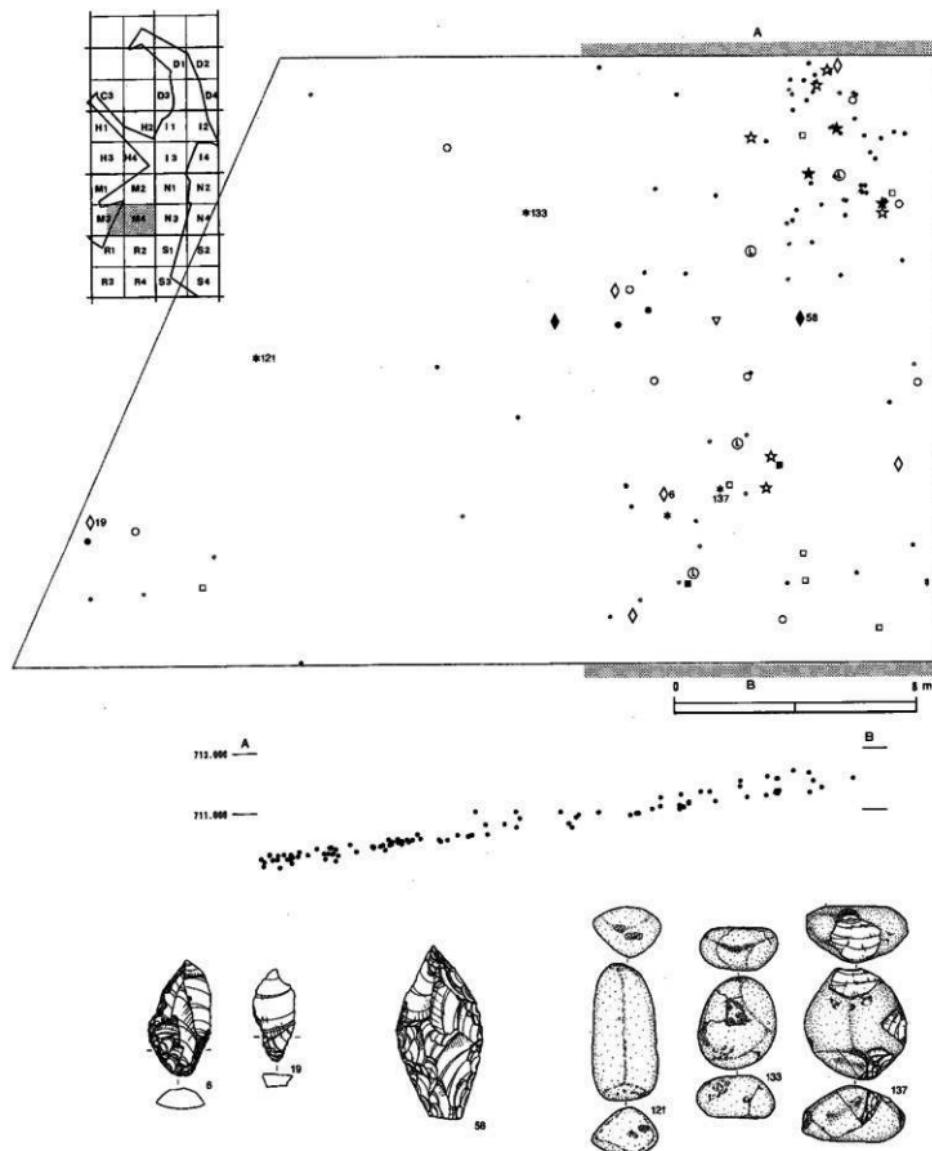
第12図 賢ノ木遺跡旧石器時代遺物分布 4



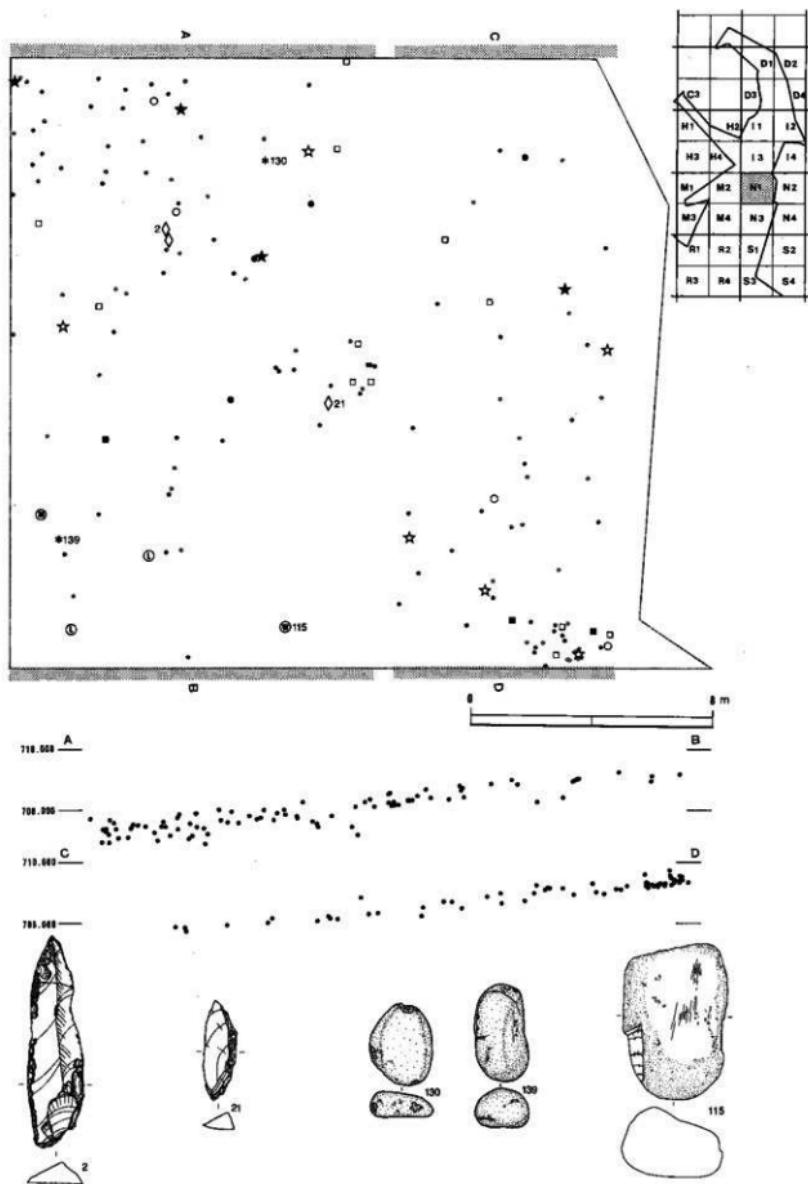
第13図 實ノ木遺跡旧石器時代遺物分布 5



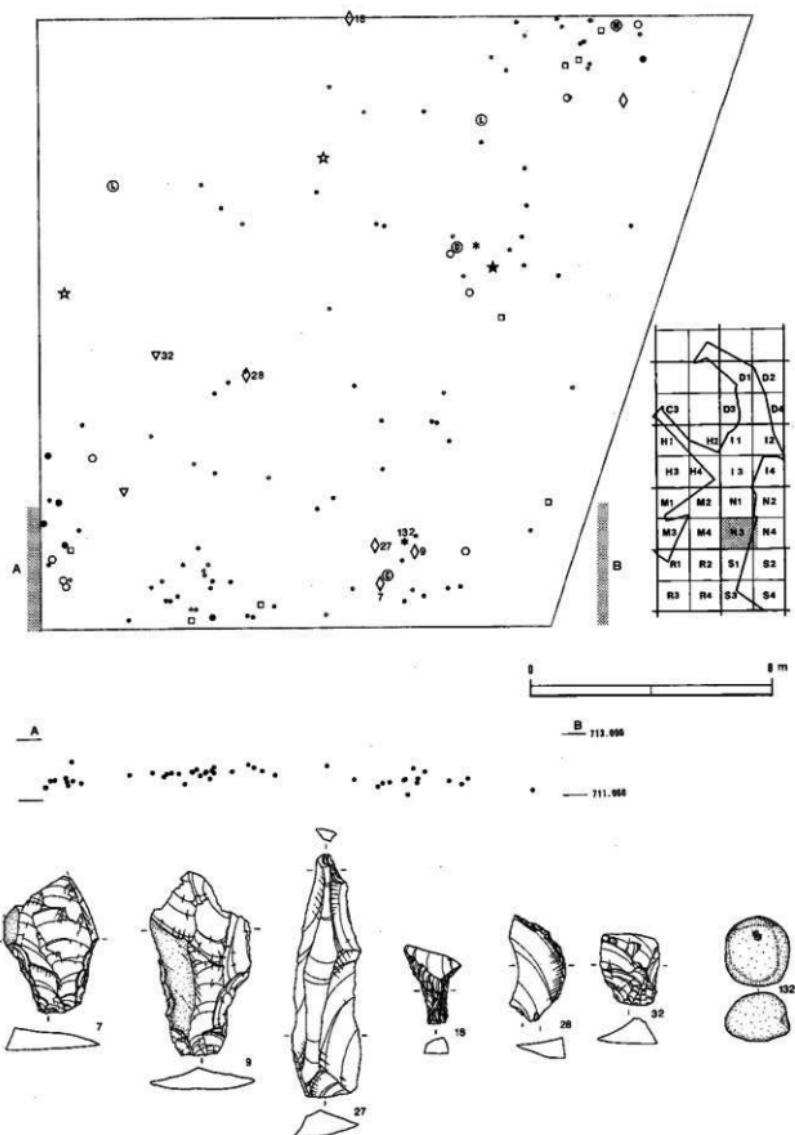
第14図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布 6



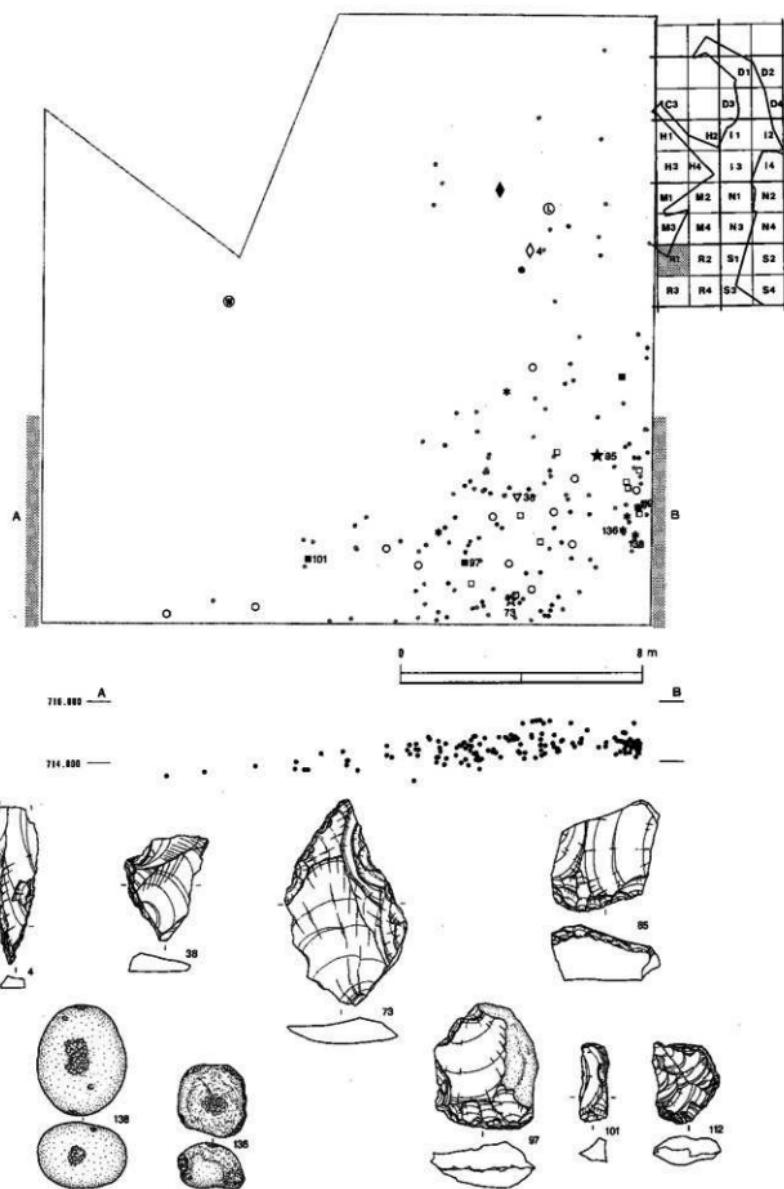
第15図 實ノ木遺跡旧石器時代遺物分布 7



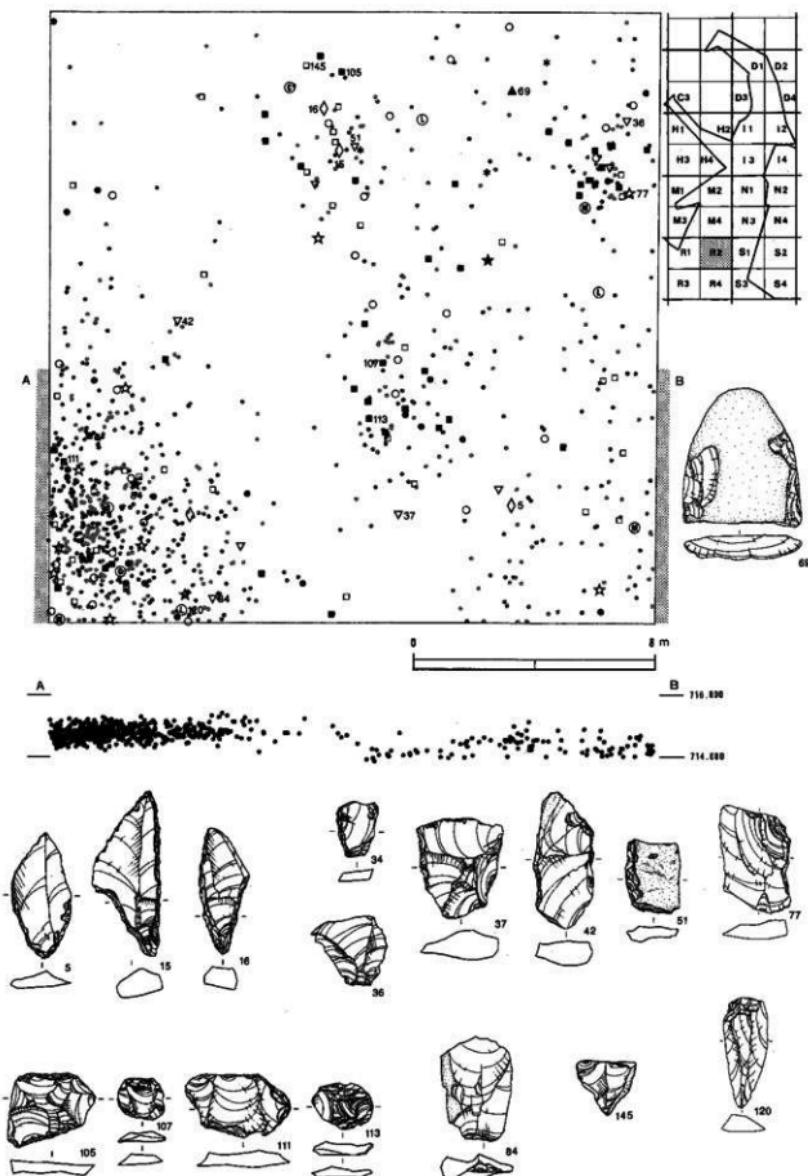
第16図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布 8



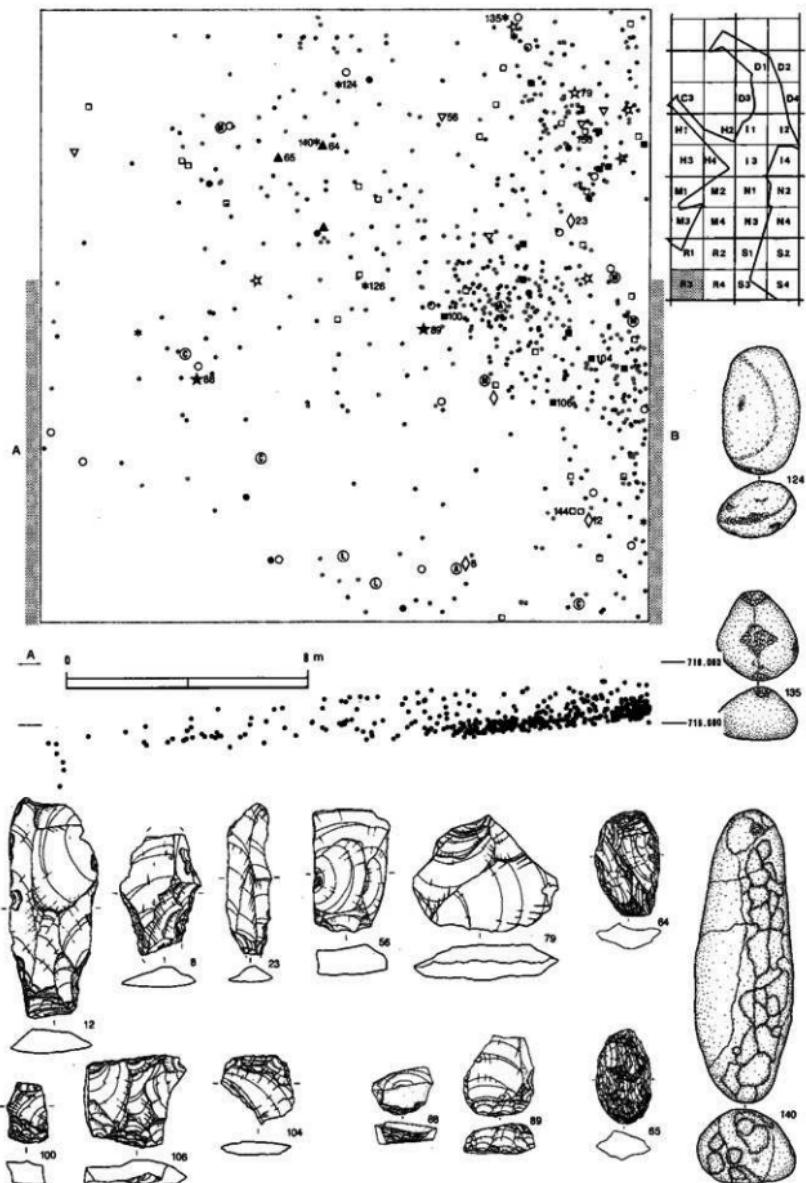
第17図 實ノ木遺跡旧石器時代遺物分布 9



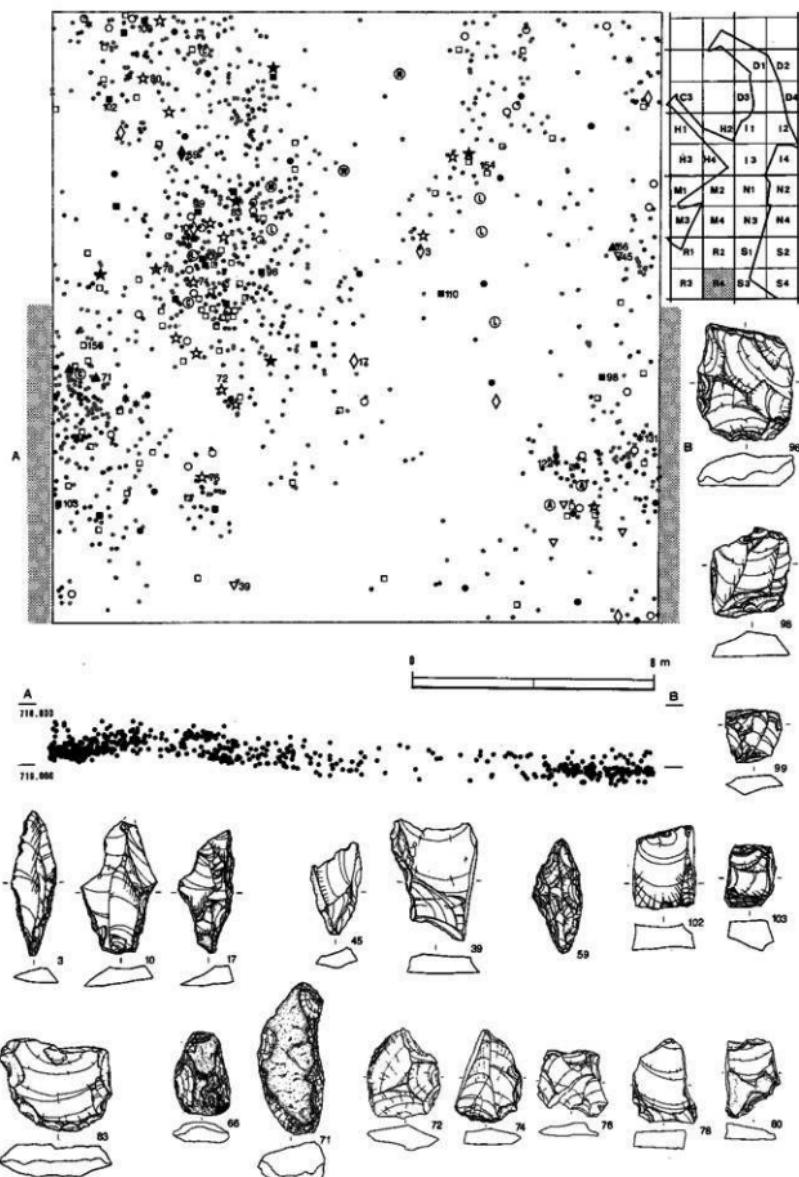
第18図 貨ノ木遺跡旧石器時代遺物分布 10



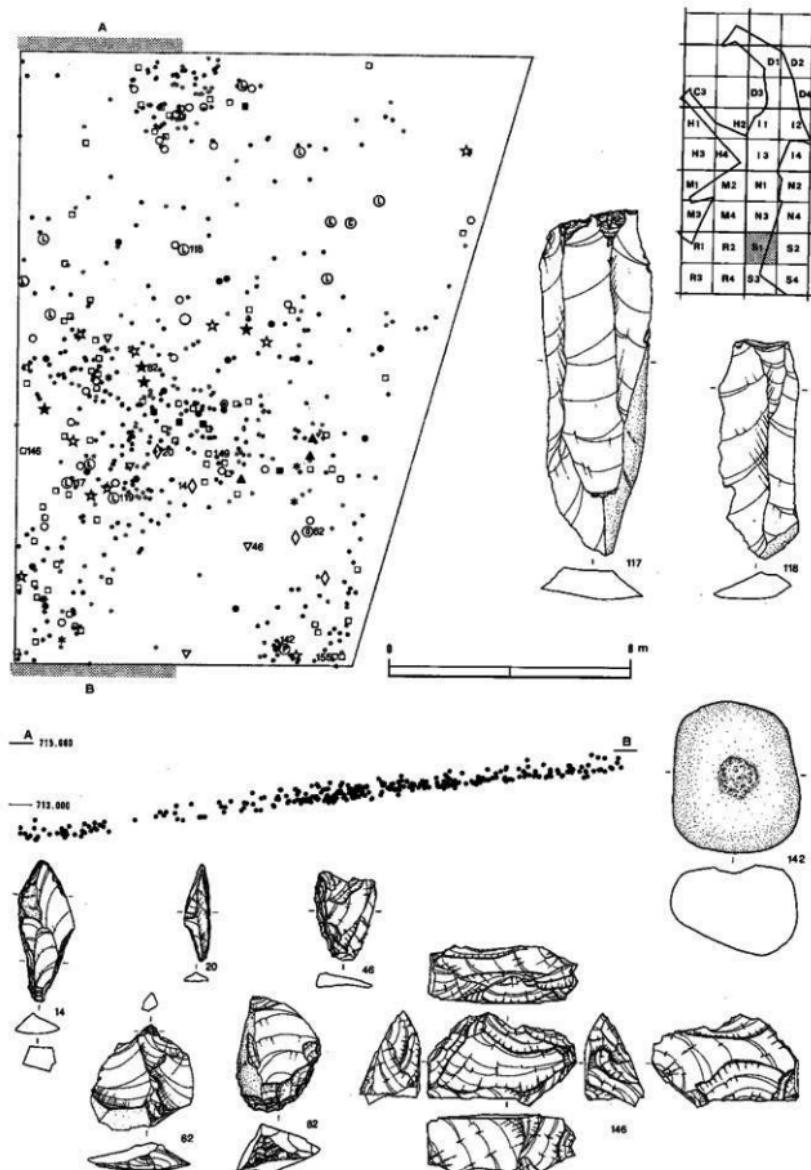
第19図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布 11



第20図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布 12



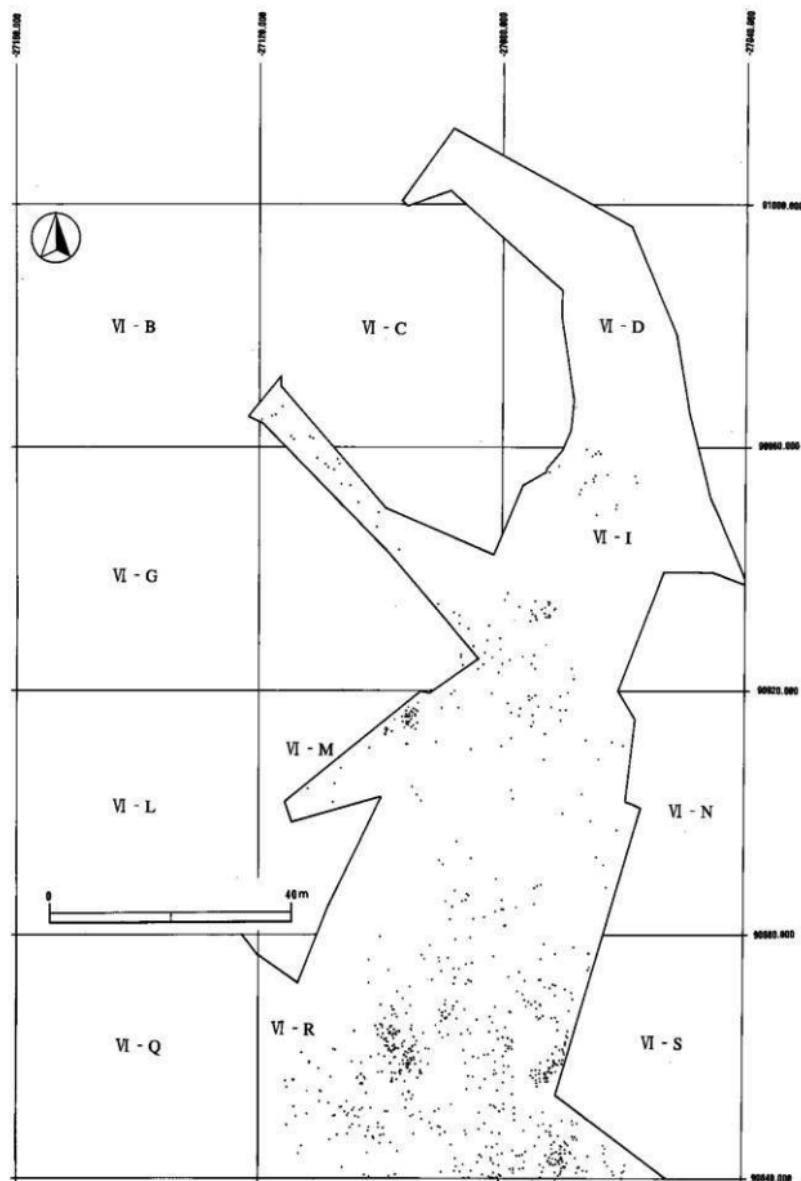
第21図 實ノ木遺跡旧石器時代遺物分布 13



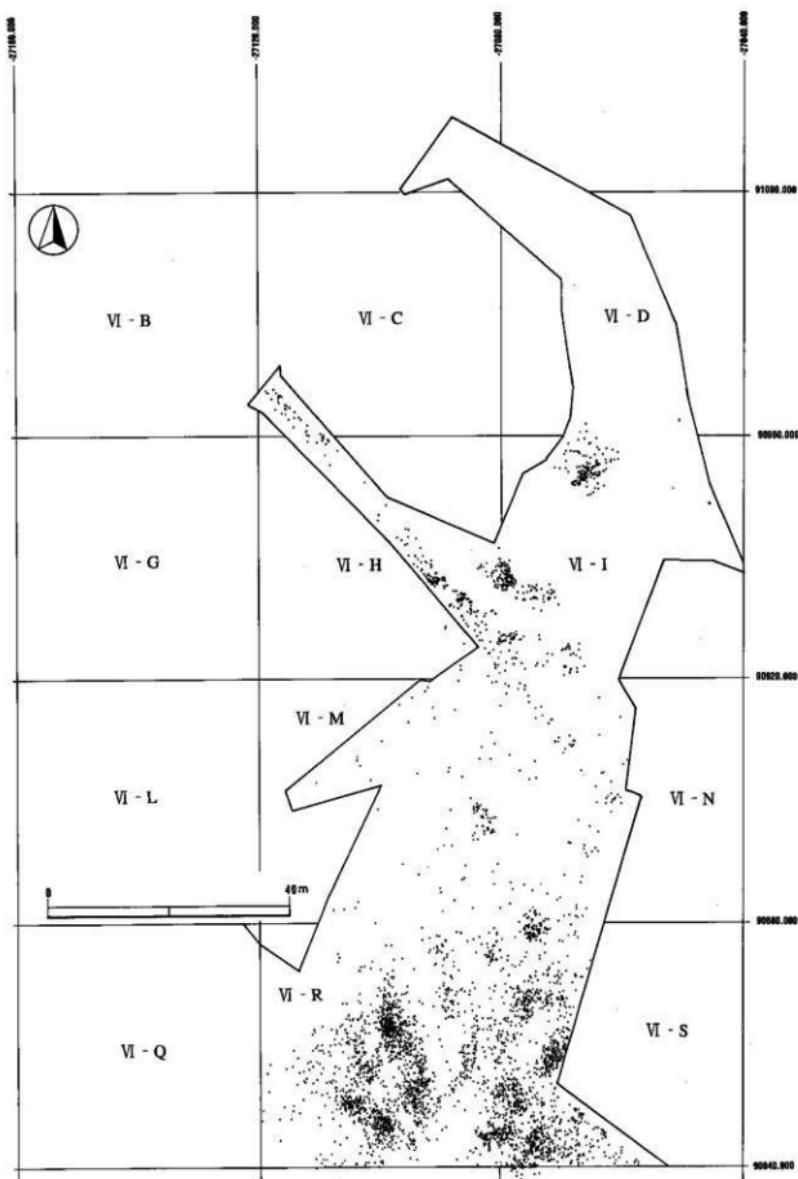
第22図 貢ノ木遺跡旧石器時代遺物分布 14



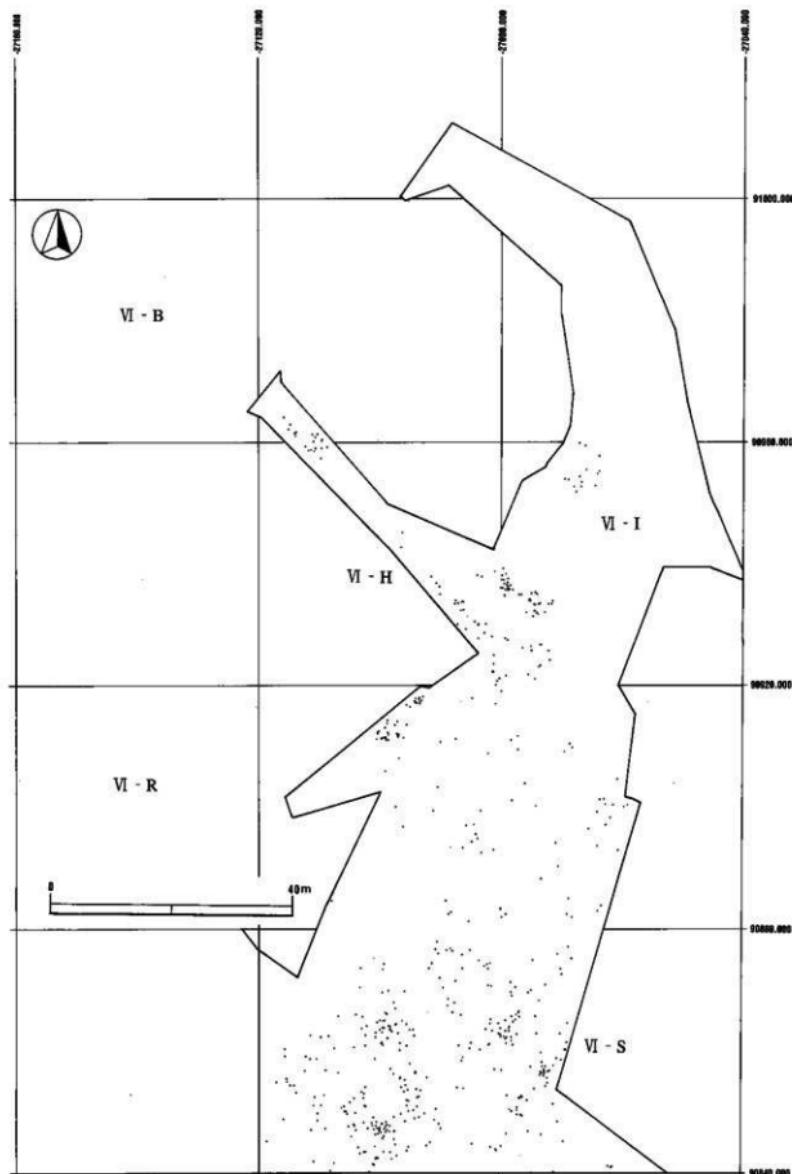
第23図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺物分布 15



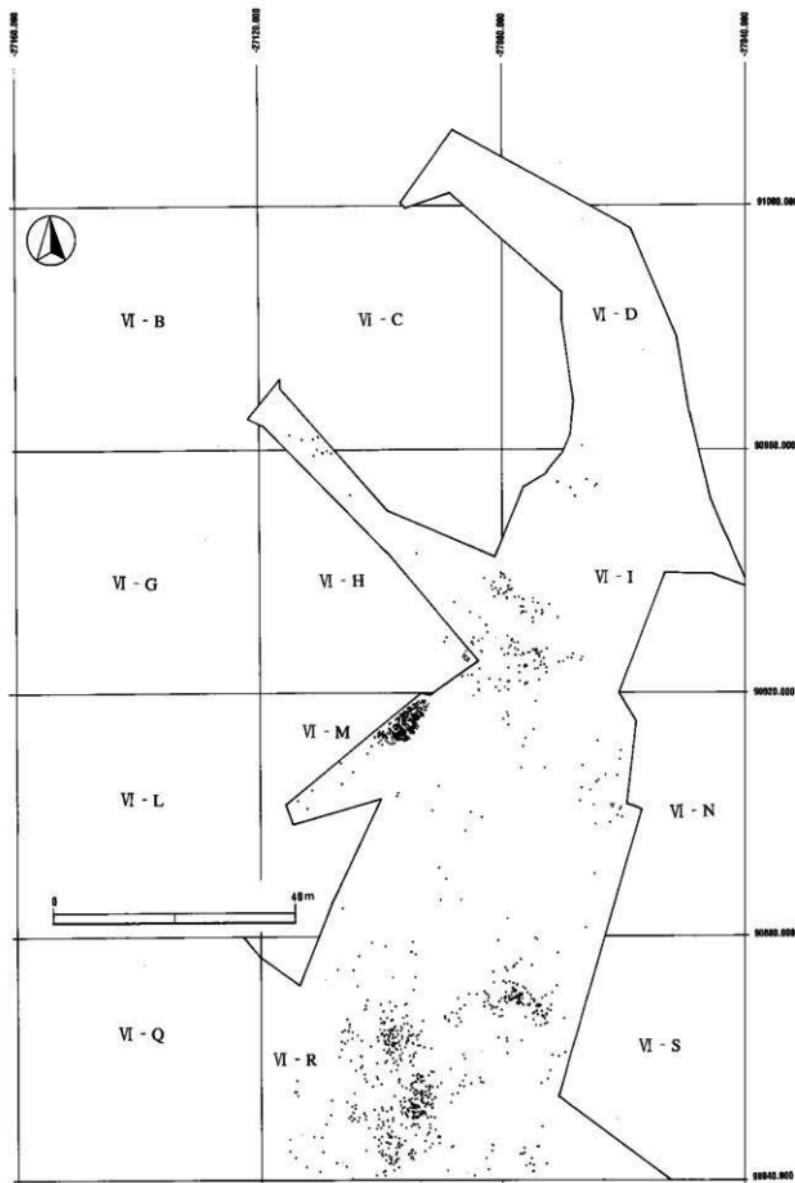
第24図 貫ノ木遺跡旧石器時代石材分布図 黒鏽石



第25図 黒ノ木遺跡旧石器時代石材分布図 安山岩



第26図 貫ノ木遺跡旧石器時代石材別分布図 珪質頁岩・珪質凝灰岩



第27図 貫ノ木遺跡旧石器時代石材分布図 チャート

3 磨群 (第28図～第35図)

磨群は総数35基確認された。III層からVb層まで各層から出土しており、いくつかの時期に分けられる。そこでこれらの磨群を、主体となる出土層位と構成磨の個数、重量、遺存度をあらわしたのが、第6表である。これによって本遺跡の磨群は大きく4類に分類される。

I類：磨の平均重量が300g～500gで、遺存度は完形磨のほうがやや多い。平面的な広がりは比較的小規模である。出土層位はIII層が主体となる。SH108・104・94・95・126・49が相当するが、なかでも94・95は度どるに他の磨群と比べ平面的な広がりがやや広く、出土層位もIV層出土の個体があり、時期的な差があるかもしない。磨群間の分布は特に集中する地域はなく、点々と散在する。

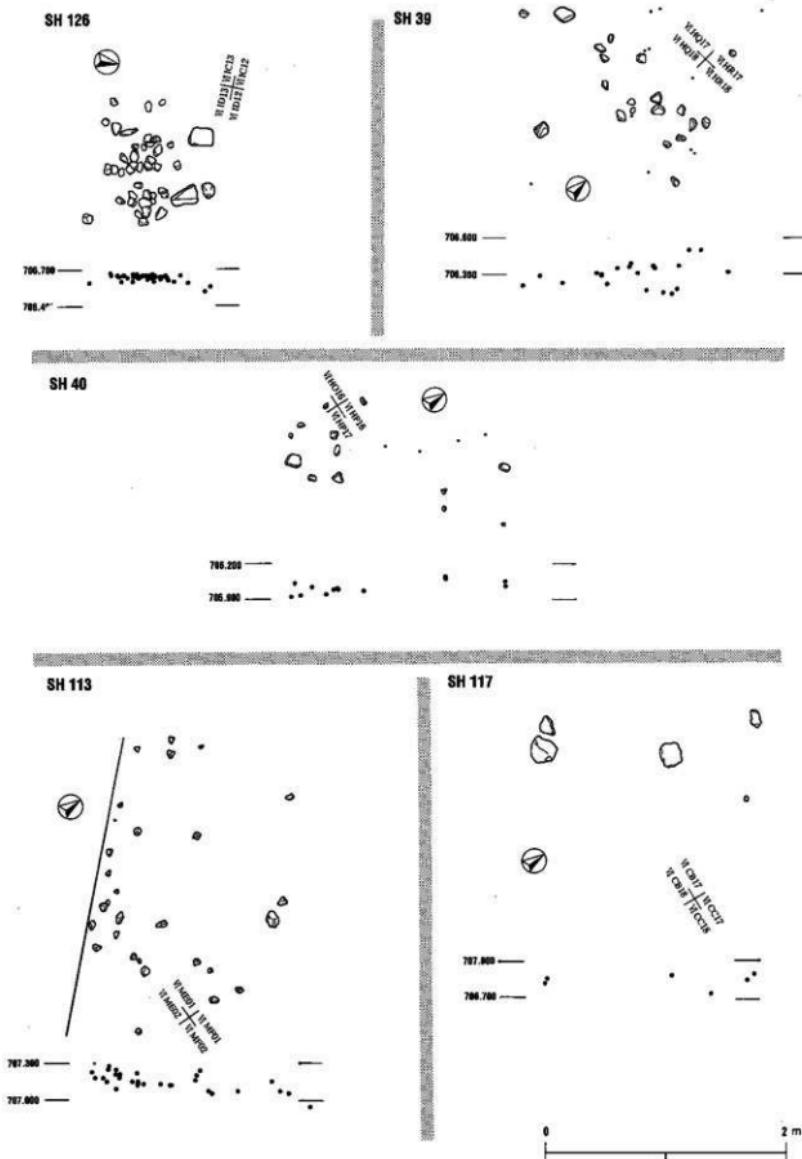
II類：磨の平均重量が80g～250gと軽量な磨が多い。遺存度も25%以下のものが多く、破損磨が主体となる。平面的な広がりは大きい。出土層位はIV～Va層が主体となる。SH39・40・96・98・99・101・109・111・112・113・114・116・120・122が相当する。

III類：磨の平均重量が700g～4kgと大形で、構成磨数は10個以内で散漫な分布を示す。この形態を、旧石器時代の場合「配石」と呼んできた。ほとんどのが完形に近い磨で構成される。出土層位はVa～Vb層に限られる。SH22・28・29・58・91・102・102・103・105・110・117・119・121・123が相当する。

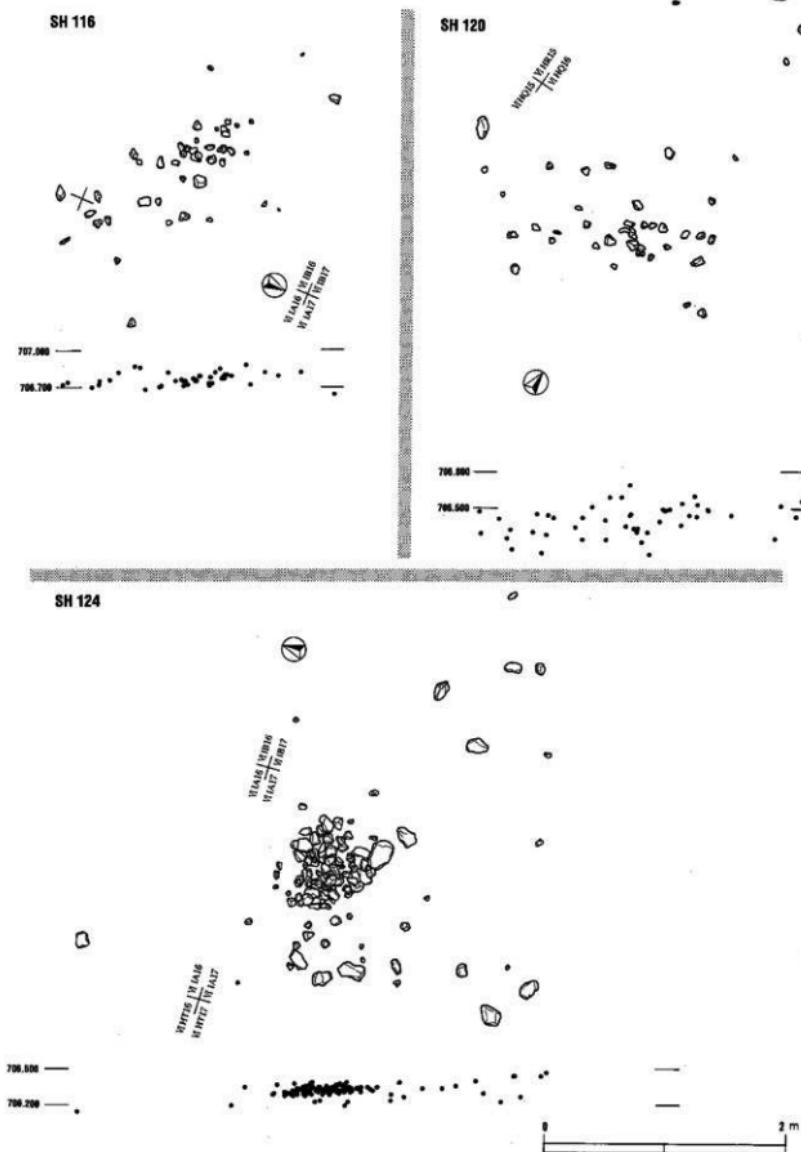
IV類：磨の平均重量が280g～400gとI類とII類の中間の重量をもつ。出土層位はVb層に限られIII類との関係が興味深い。いわゆる配石ではなく、赤化磨が密集している磨群としては野尻湖遺跡群の中でも最古のものといえよう。

遺構番号	磨数	主体となる出土層位	分類	重量gの平均	重量gの合計	遺存度%				
						不明	25	50	75	100
SH 49	6	III	I	328	1,970	5				1
SH 94	17	III V	I	388	6,600	2	2	4	9	
SH 95	15	(III) IV	I	360	5,400	4	2	2	7	
SH 104	17	III	I	455	7,730	1		1	15	
SH 108	5	III	I	530	2,650	1	2	1	1	
SH 126	44	III	I	352	15,480	2	2	4	36	
SH 39	20	V (Va)	II	241	4,820	3	4	10	3	
SH 40	13	V	II	142	1,850	6	2	1	4	
SH 96	27	V (Va)	II	244	6,579	7	2	3	15	
SH 98	42	V (Va)	II	199	8,351	8	9	7	18	
SH 99	15	Va	II	185	2,780	3	5		7	
SH 101	21	V	II	86	1,800	15	4	1	1	
SH 109	82	V	II	165	13,500	45	5	11	21	
SH 111	43	V	II	141	6,060	19	9	5	10	
SH 112	65	V	II	183	11,870	37	13	4	11	
SH 113	30	V	II	143	4,300	10	5	2	13	
SH 114	102	IV Va	II	182	18,580	46	17	10	29	
SH 116	45	V (Va)	II	164	7,380	1	27	5	2	10
SH 120	48	V (Va)	II	191	9,150	28	9	4	7	
SH 122	17	Va	II	163	2,770	6	2	3	6	
SH 22	8	Va	III	1,558	12,460	1	2		5	
SH 28	6	Vb	III	2,165	12,990	1		1	4	
SH 29	8	Va	III	858	6,862	2	1	2	3	
SH 58	8	Vb	III	1,391	11,130	5	1	2	2	
SH 91	9	Vb	III	2,326	20,930	1	1	2	5	
SH 102	10	Va	III	747	7,470	2	2		6	
SH 103	13	Va	III	1,793	23,310		1	2	10	
SH 105	5	V	III	702	3,510				5	
SH 110	6	Vb	III	4,435	26,610		1	5		
SH 117	6	Vb	III	2,606	13,030	1			5	
SH 119	11	Vb	III	1,399	15,390		1	3	7	
SH 121	7	Vb	III	2,784	19,490	1		1	5	
SH 123	7	Vb	III	2,814	19,700	1	1	2	3	
SH 124	105	Vb	IV	383	40,190	28	9	4	64	
SH 125	18	Vb	IV	280	5,040	2	2	4	10	
合計	878				369,162					

第6表 貫ノ木遺跡磨群属性一覧

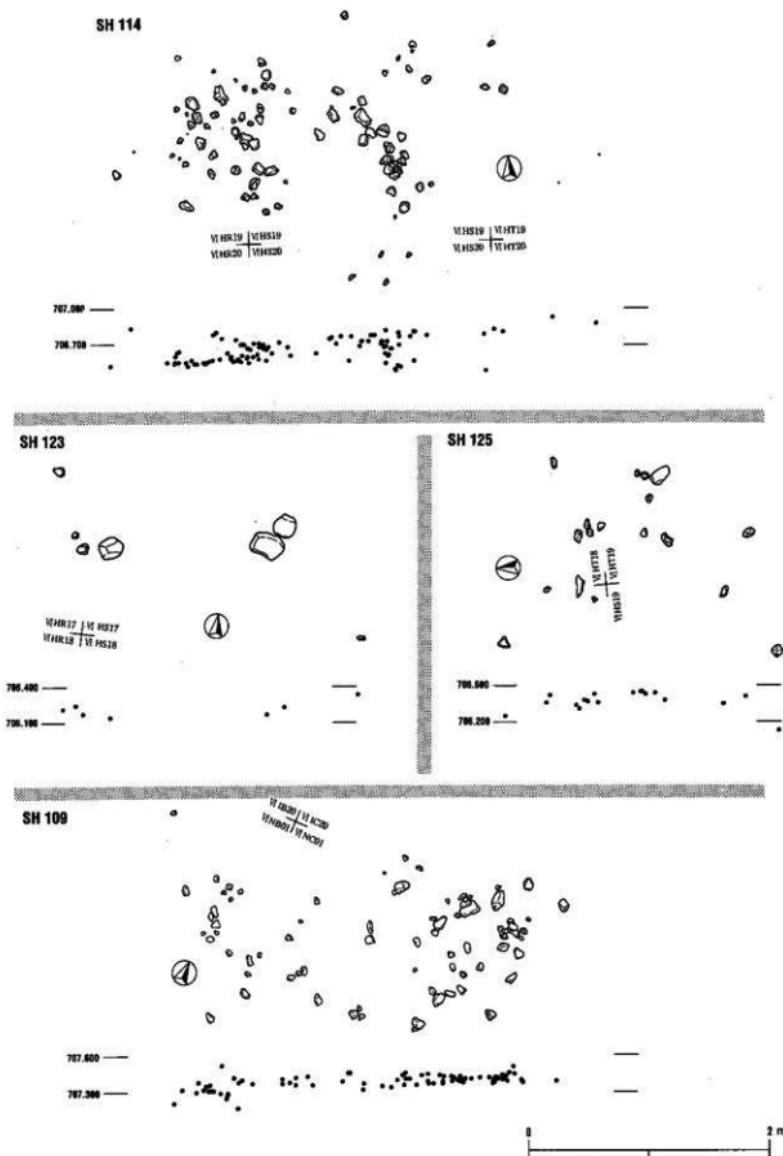


第28図 實ノ木遺跡旧石器時代遺群 1

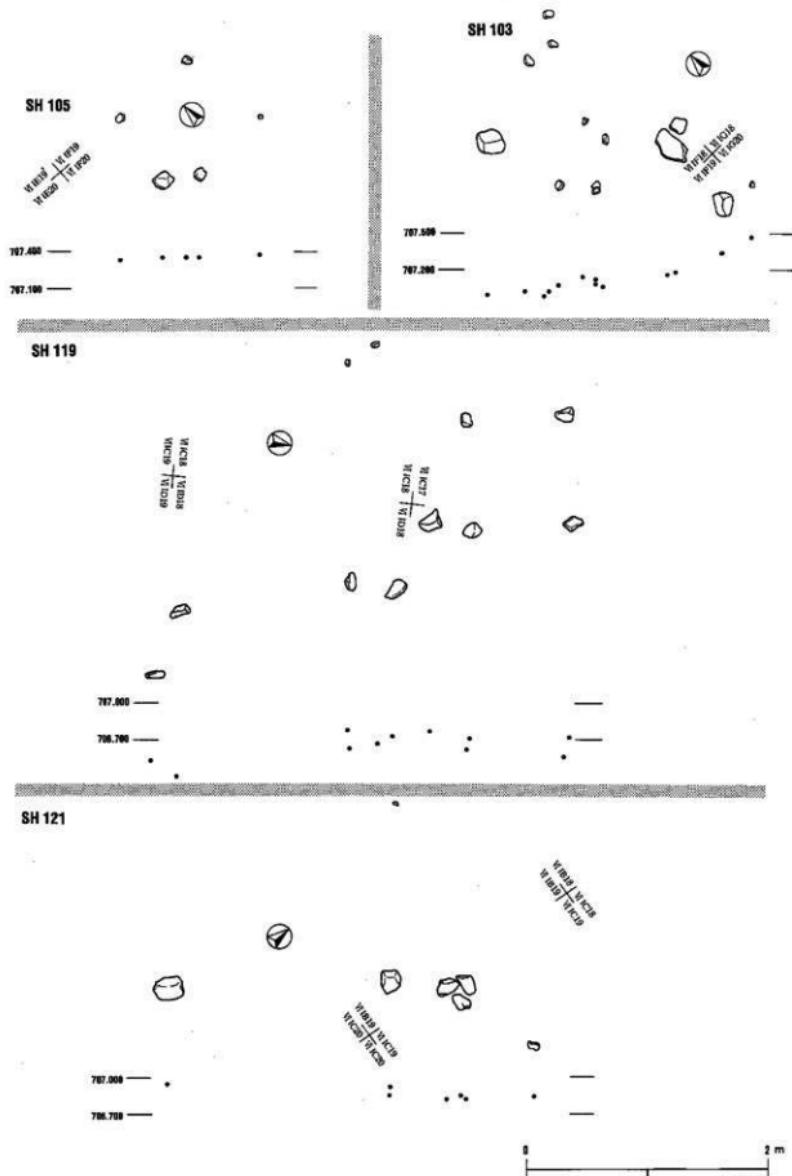


第29図 實ノ木遺跡旧石器時代遺群 2

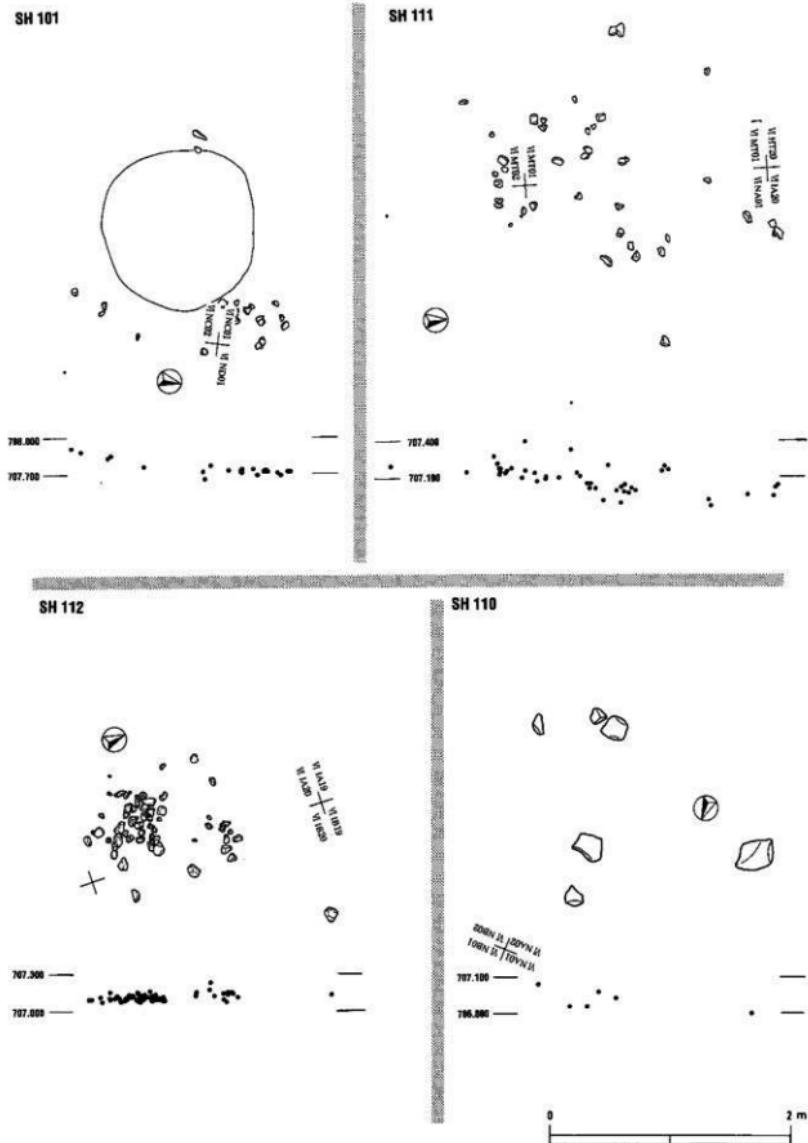
SH 114



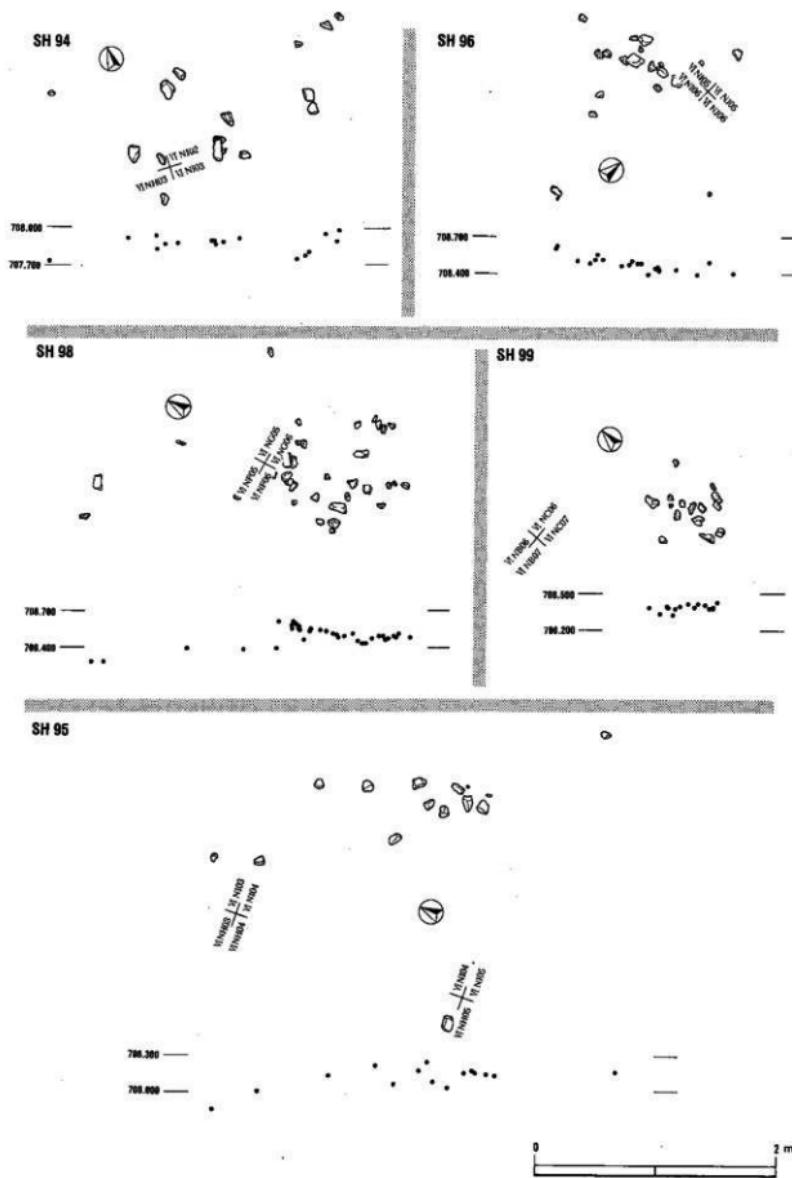
第30図 實ノ木遺跡旧石器時代遺群 3



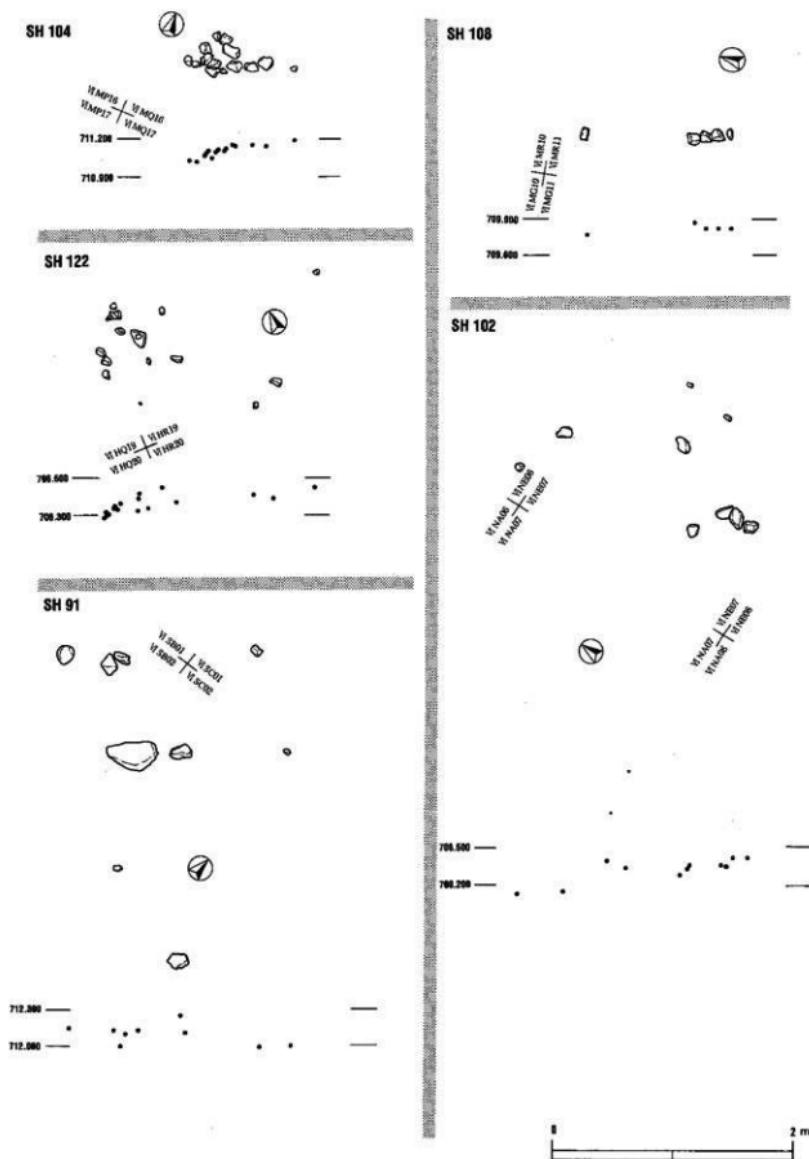
第31図 貫ノ木遺跡旧石器時代埋群 4



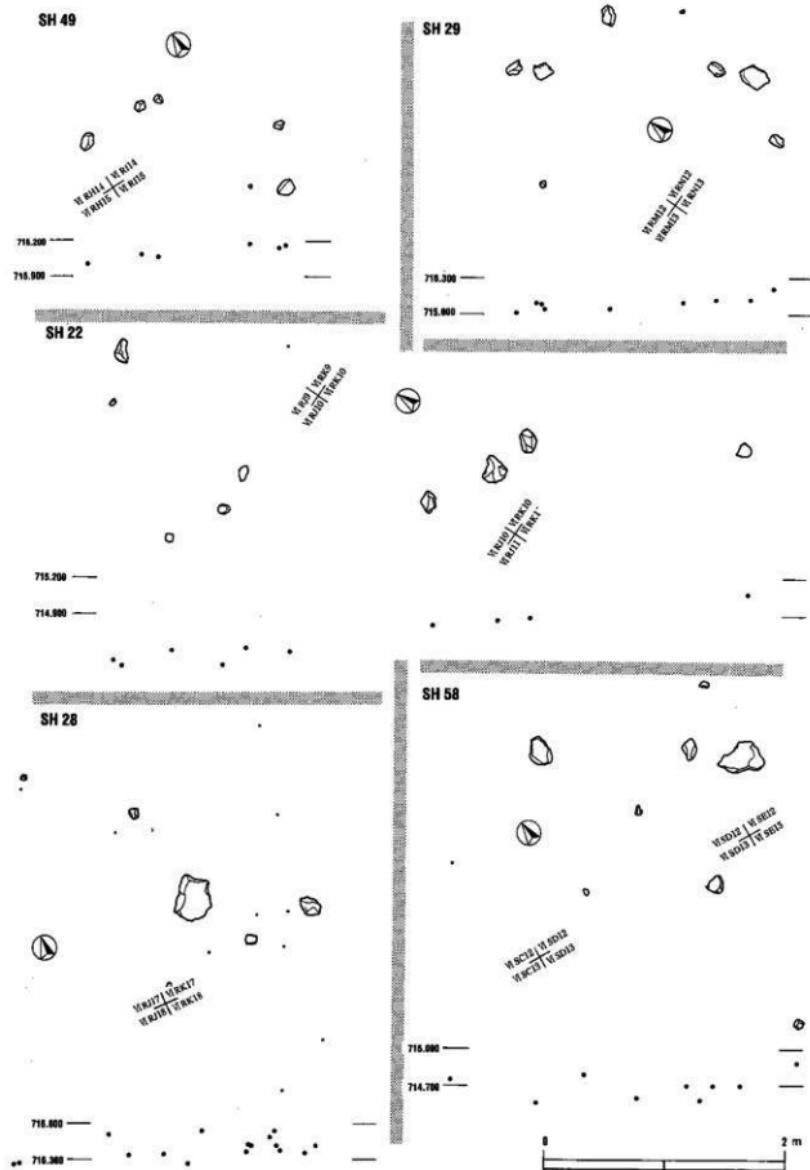
第32図 貫ノ木遺跡旧石器時代縄群 5



第33図 貫ノ木遺跡旧石器時代遺群 6



第34図 實ノ木遺跡旧石器時代遺群 7



第35図 貫ノ木遺跡旧石器時代礫群 8

4 出土遺物

ナイフ形石器（第36図～第39図）

ナイフ形石器は48点出土した。出土層位はIII・IV・Va層が多く、Vb層になると減少する。

第36図1～6は、基部および先端部に細部加工が認められ、打面が残らないものを示した。素材は縦長剝片であるが、5・6がやや寸詰まりである。剝片の背面構成は、4を除き同方向もしくは180°反対方向からの剝離面で構成される。細部加工は1・3・4が比較的急斜で剝離の大きさも一定した加工が施されている。2の左側縁は器表面沿うような剝離で、基部右側縁は大小の剝離が観察される。5は、基部両側縁に不規則な小剝離がみられる。6は厚手の剝片を素材として、左側縁、基部右側縁に丁寧に加工が施されている。出土層位は、4・5がIII層、2がIV層、1・3・6がVa層で、細部加工が一定して、素材の剝片剝離が比較的規格性の強いものが下層から出土している。

第37図7～13は、原則として基部側に打面を残し、基部を中心に細部加工が施されている。7～10は欠損のため全体的な平面形状が不明確なところも一部あるが、基部両側縁を急斜な剝離で加工している。平面形状が菱形もしくはベン先形を呈する。

第38図14～22は二側縁に急斜な細部加工を施した一群である。刃部を有する側縁を抉り込むように調整を施すものが特徴的である（14～18）。

第39図23～28は剝片の一部に細部加工が施されている一群である。23～25は比較的薄い縦長剝片を素材としている。細部加工は弱い。23は基部及び先端部に加工が認められる点、第一図に示したものと加工は共通するが、打面を原則として残している。すべてIII層の出土で、ナイフ形石器の終焉の一様相を示すものではないだろうか。26・27はそれとは対照的に、大形の縦長剝片を素材としている。背面の剝離構成は多方向からの剝離痕が見られる。出土層位はともにVb層で、初期的なナイフ形石器の特徴としてとらえておきたい。

台形様石器（第40図～第42図）

台形様石器として認定した石器は総数58点出土した。調整加工に原則として平坦加工を施し、形状を台形・菱形（ベン先形）に整えたものを認定の基準とした。出土層位はV層が主体であるが、IV・III層出土のものもかなりみられた。石器の認定に問題があるのかもしれない。ただ、斧形石器も出土層位に同様な傾向がみられることから、認定の再検討を要するものが、そう多くあるとは思えない。使用石材は黒曜石が圧倒的に多い。

第40図29～36は基部側に打面を設けた例である。先端部にバラエティーが認められる。29・30は尖りベン先形を呈す。31外湾する先端をもつ。32・34・36は平らな刃部を形成している。33・36は斜刃。第41・42図は打面を側縁部に設けている。側縁の加工にはバラエティーが認められる。39・47・56のように折断面のみで細部加工が施されない例もある。細部加工にもバラエティーがあり、平坦加工だけでなく、37～39・42・46の一部側縁には刃剥し加工状のやや急斜な加工もみられる。

槍先形尖頭器（第43図）

槍先形尖頭器は8点出土した。全体の形態は不明確な例を除く5点を図示した。それらは二つに分けられる。ファシットを有する57・58と、肩をはる59～61の尖頭器である。これには、片面調整と両面調整のものがある。

揉錐器（第43図）

揉錐器は3点出土した。図示した62はVb層出土である。先端部は背面からの加工による。

斧形石器（第44図～第47図）

斧形石器は15点出土した。うち神子柴型石斧と考えられる片刃の石斧が1点あるので、約3万年前の斧形石器は組成表上では14点出土したことになる。しかしながら、小破片で形態的特徴が不明確なものが2点あり、個体数として確実な数字は12点になる。うち9点を図示した。

63は片面に自然面を残す。刃部中央から右側縁にかけて裏面からの衝撃による剝離痕（刃こぼれ）が顕著である。66も片面に自然面を残す。表面より刃部は再生している。刃部は表裏研磨された後表面よりの衝撃で裏面刃部が大きく欠損し（第45図66刃部稜線が大きく表面側に屈曲している）、その後裏面側を再度研磨している、そのため実測図では明瞭に表現できなかったが、裏面側の研磨範囲は稜線が認められ、いくつかの面を形成し、線状痕もやや方向が違うものが見られる。68は研磨痕が器体全体におよぶ。69は欠損品であるがもし完形品であったとしたら、かなり大形になるものと思われる。70・71は未製品であろうか。

削器・搔器（第48図～第52図）

削器・搔器は総計128点出土した。うち削器が99点、搔器と認定したものは29点であった。使用石材は安山岩が多く、次に削器では黒耀石が使われている。出土層位は搔器がVa層に集中する傾向にある。

彫器（第52・53図）

彫器は5点出土した。出土層位はIII層とVa層にみられた。硬質頁岩、黒耀石が使われている。各個体ともファシットの入り方にはバラエティーがある。

楔形石器（第53図～第55図）

楔形石器は111点とかなりの量出土した。III層～Vb層（Vc層）の各層から出土しているが、Va層のあたりに集中しそうである。石材としては安山岩・黒耀石・チャート・玉髓が多い。形態的にはバラエティーに富んでいる。

砥石（第56・57図）

組成表上は11点出土しているが、接合関係をもつ資料があるため、個体数としては8点になる。大形のしっかりしたもの3点を図示した。他の5点は小破片であった。出土層位をみると図示した資料はIV下1点、Vb層2点と、1点のIV下の資料は再検討の余地を残すものの、AT（姶良・丹沢火山灰）下位の石器群に帰属すると考えてよい。他の小破片については、III・IV層出土なので、前者とは異なる時期、場合によっては縄文時代のものも含まれている可能性があるが、時期等の決定は控えた。図示した3点の特徴を以下に記す。

114は裏面に剝離面がみられるが磨耗しており、出土したこの状態で長く使われていたようであるが、原形はさらに大きかったものと考えられる。両側面ともに研磨面がみられ、特に右側面はまだ剝離面を残している。研磨面は横断面・縦断面とともに中央部がくぼむ凹形状をなしている。

115は表裏2面に研磨面が認められる。114と同様、断面形は凹形状を呈すが

116は欠損しており原形はかなり大形であったと考えられるが、欠損後も使用したと考えられる研磨痕が、

裏面の欠損部に若干ではあるがみられる。研磨面にみられる線状痕は基本的には実測図の上下方向で、上端と下端の減りが著しい縦断面がレンズ状をなしている。研磨面は切り合っており表裏面とともに3ないし4つの面を形成している。それぞれの面は横断面が凹形状をなし、縦断面が凸形状をなし、先の2個の資料と縦断面形が大きく違う。使用形態の違いをあらわしているものかもしれない。

石 刃（第58図）

45点出土した。出土層位をみるとⅢ～Ⅳ層とⅤb層に2つのピークがみられる。45点中38点で打面が観察できたが、それによると単剥離打面例はⅤb層が多く11点、一方調整打面もしくは複数打面例はⅢ～Ⅳ層が多く、11点認められ、対照的な在り方を示している。使用石材も硬質頁岩はⅢ～Ⅳ層に限ってみられ、他の石材については、偏在性は認められなかった。比較的大形の石刃4点を図示した。

敲 石（第59図～第61図）

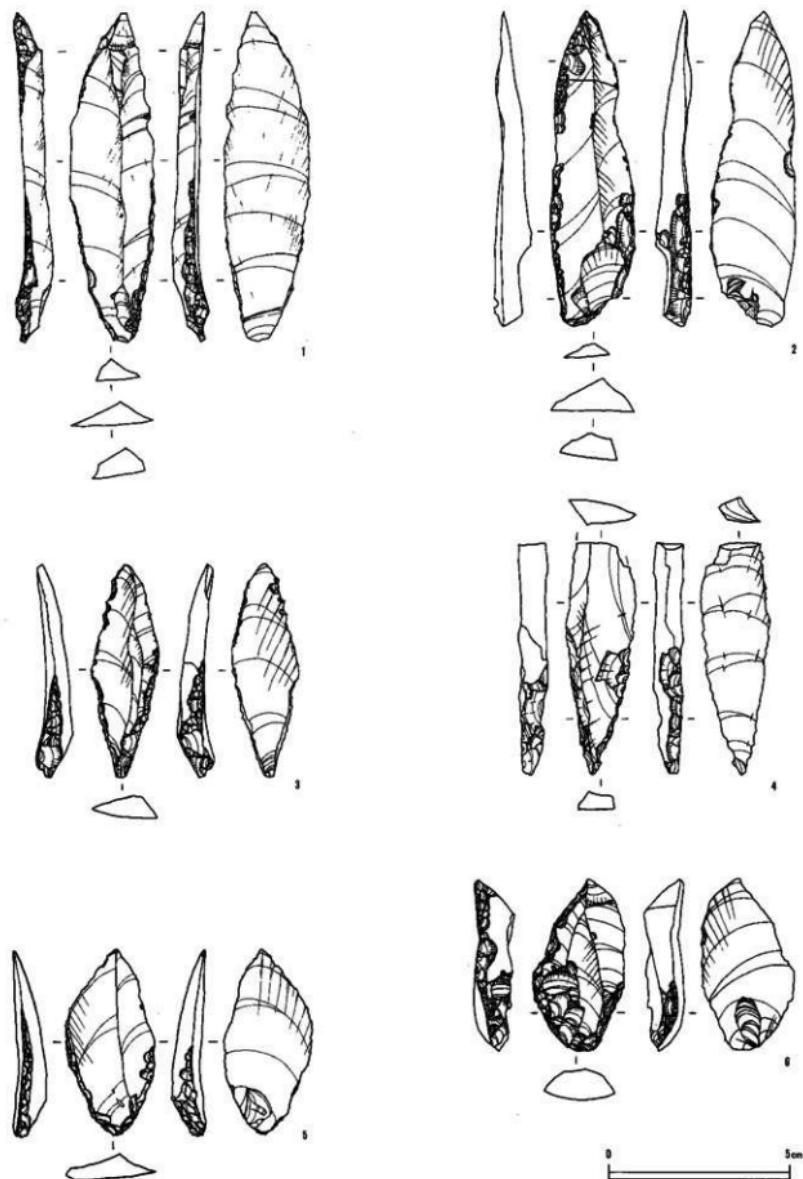
60点出土した。砂岩が24点、普通輝石安山岩が24点と主体をなす。出土層位もⅢ～Ⅴb層まで特に偏在することなく出土する。他に凝灰岩製の敲石が9点みられるが、これらはⅤb層を中心に出土するという特徴がある。

凹 石（第61図142）

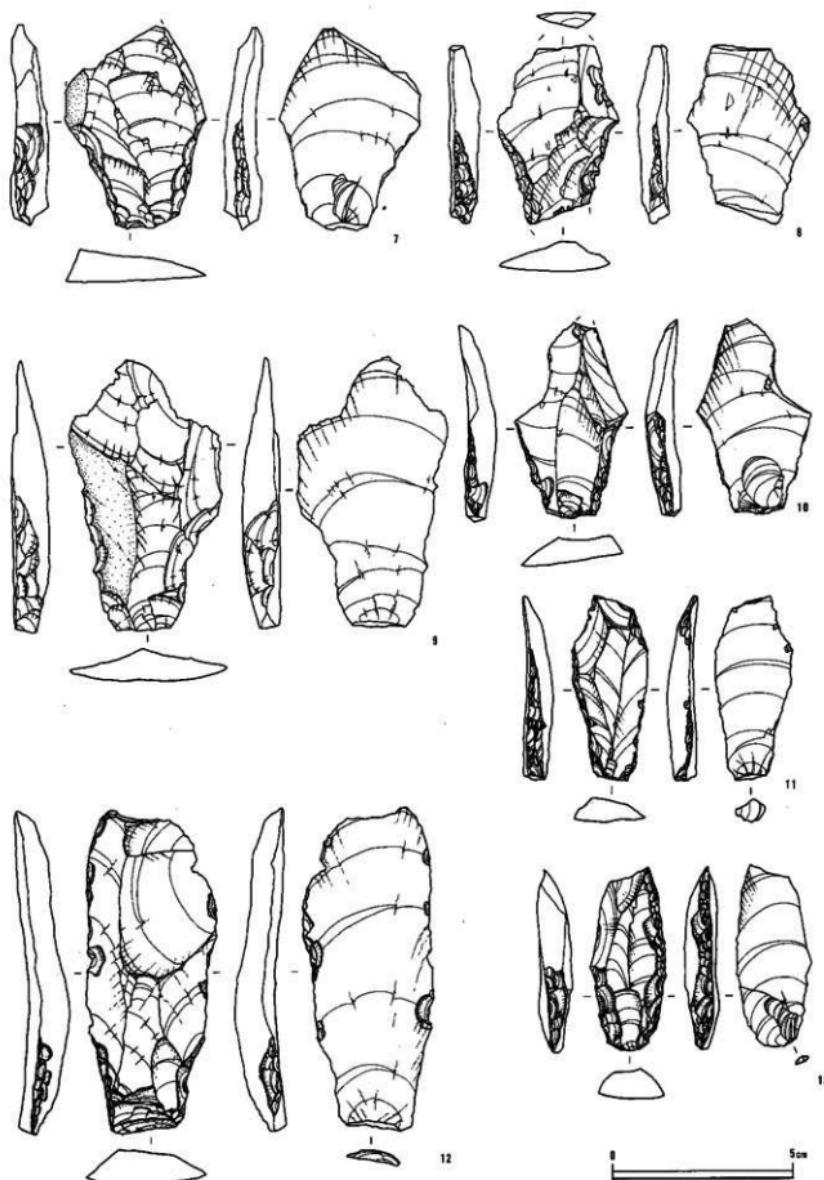
Ⅴb層から1点出土した。表裏に1ヶ所ずつ凹部をもつ。凹部は敲打により、半球状を呈している。上端にやや平坦な面が看取される。敲打によるものではないと思われるが、研磨面ともいえない。

石 槓（第62図～第64図）

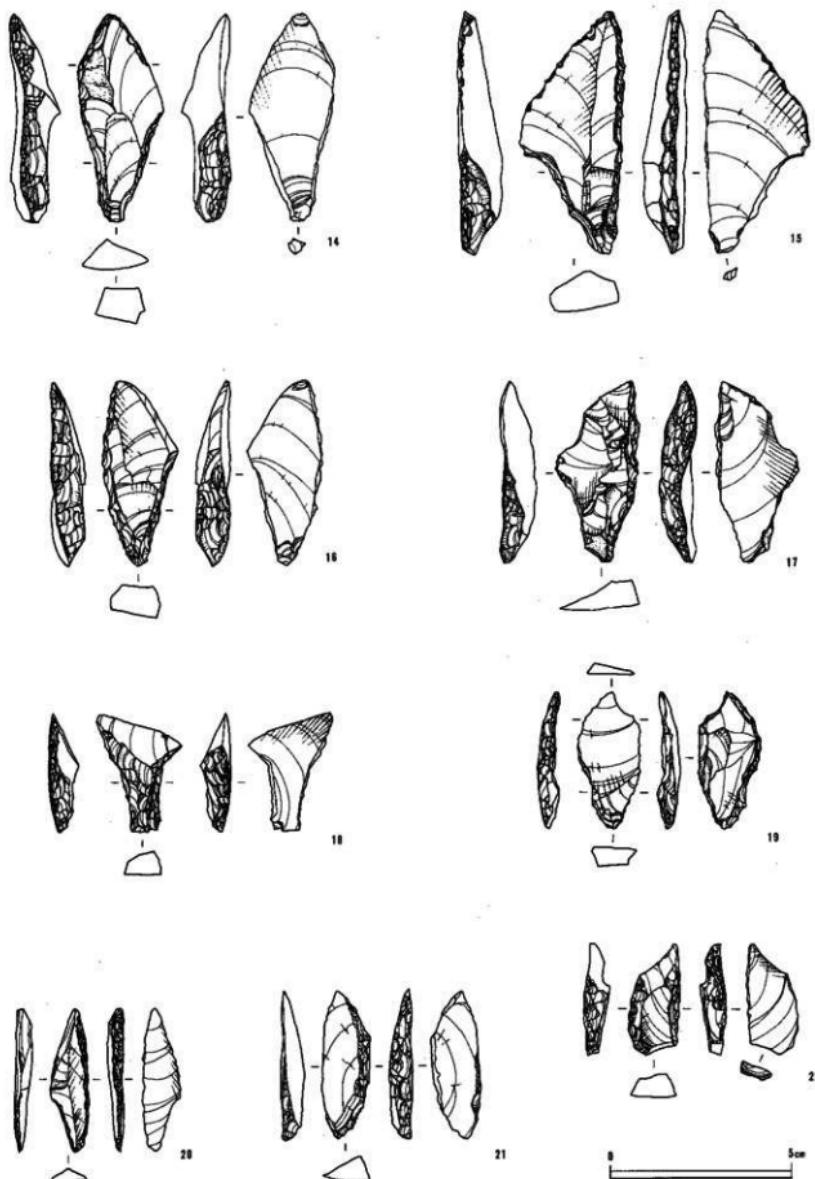
439点と大量に出土している。Ⅲ層～Ⅴb層（VC層）の各層から出土している。石材としては安山岩・黒耀石・チャートが多い。打面転移をしているものがほとんどで、打面を固定して石刃状の縦長剥片を剝離しているのは143の例のように非常に少ない。



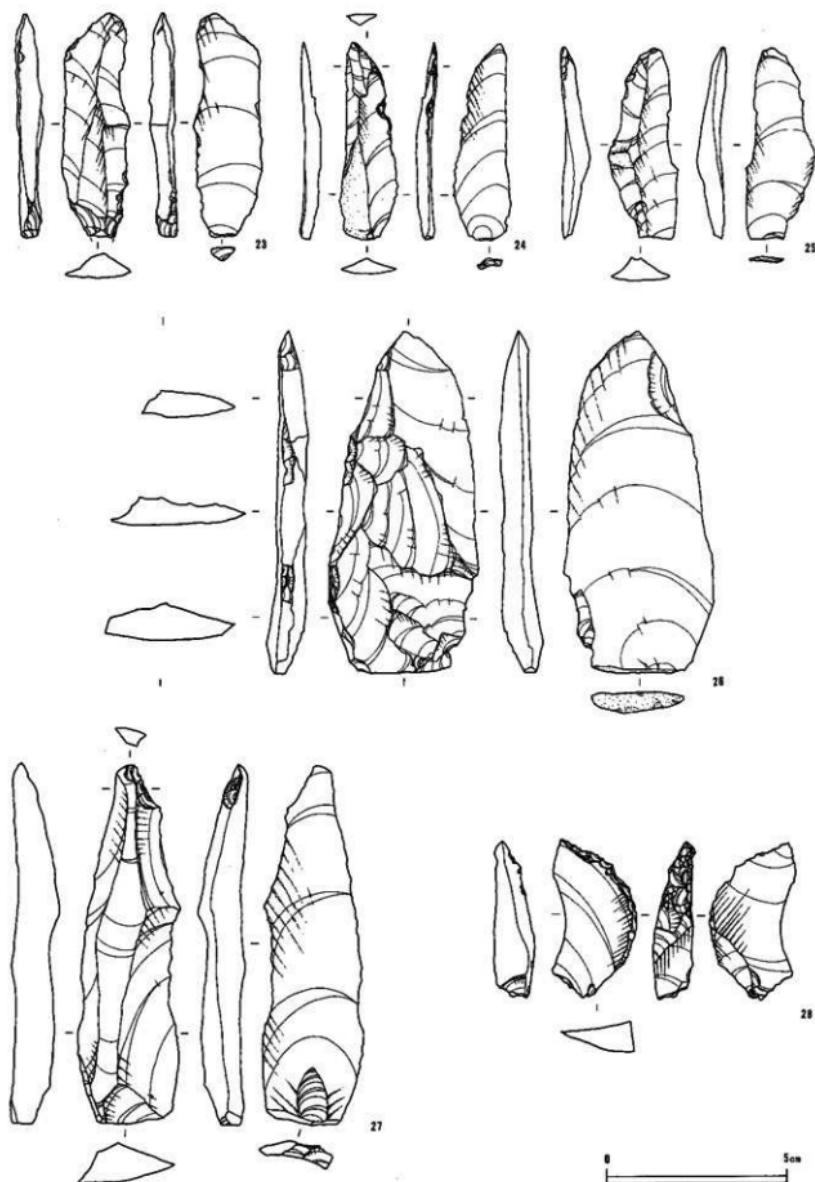
第36図 貢ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 1



第37図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 2



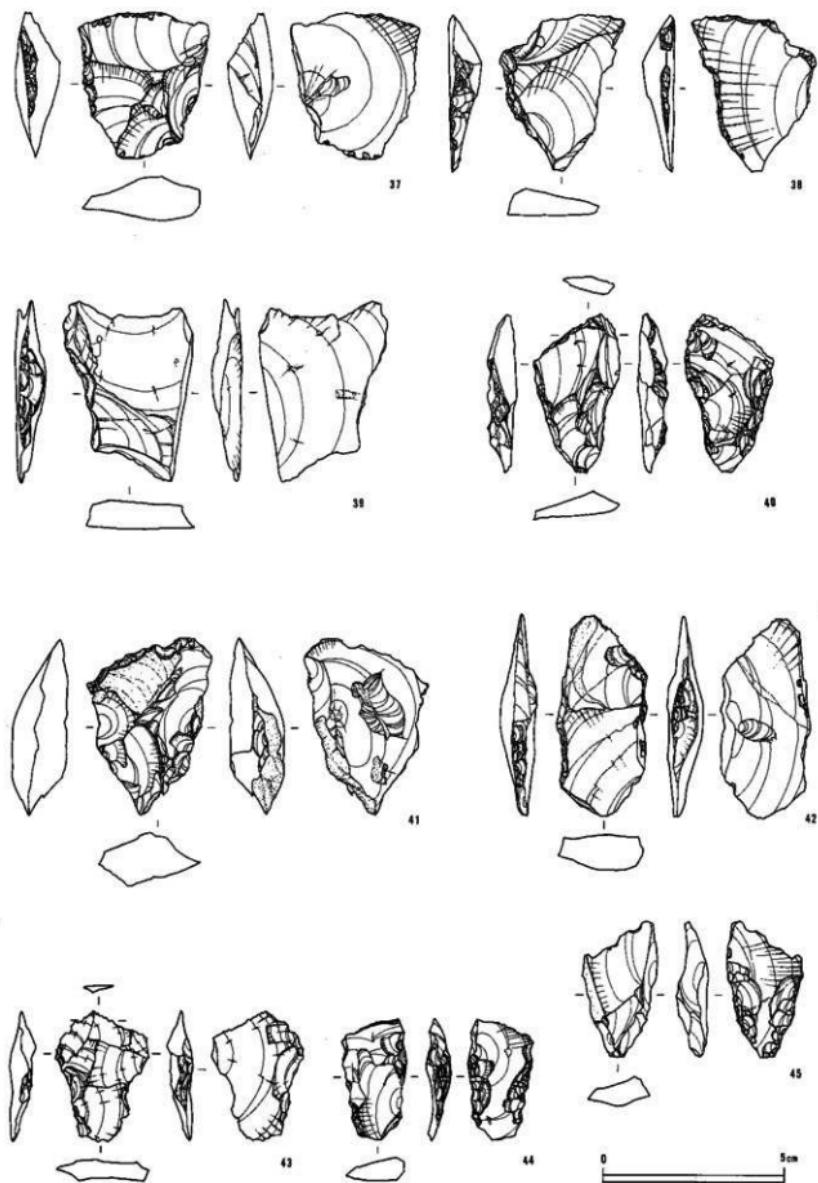
第38図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 3



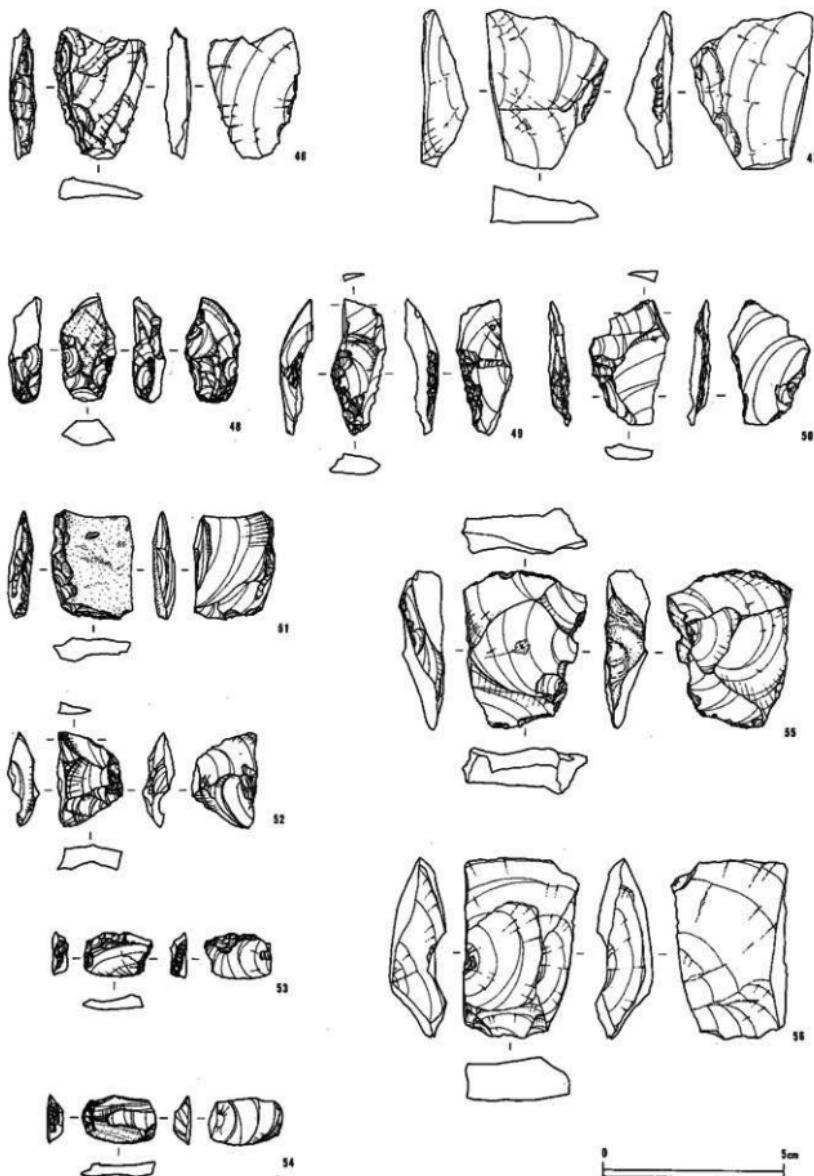
第39図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 4



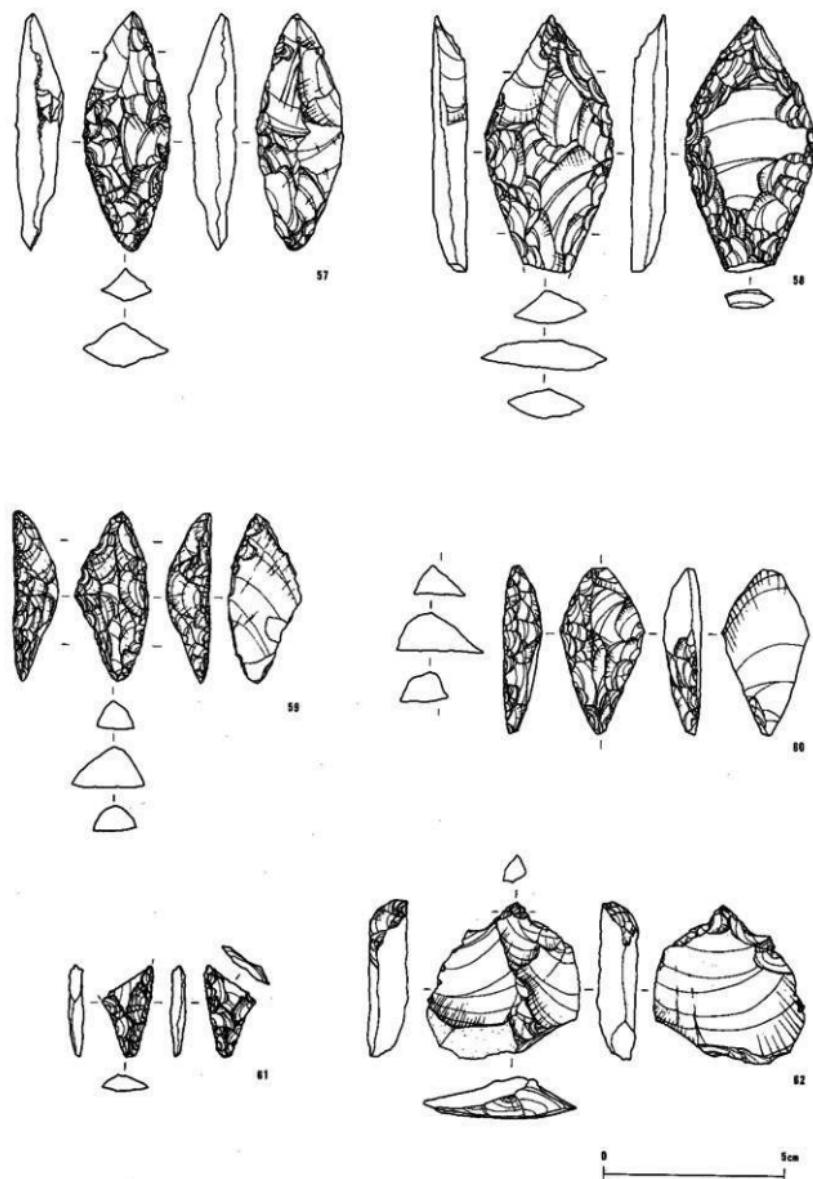
第40図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 5



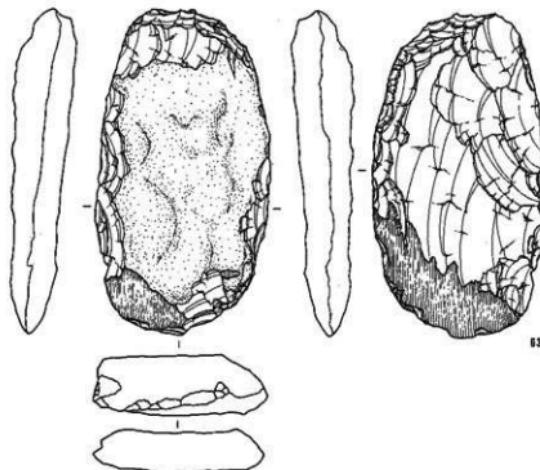
第41図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 6



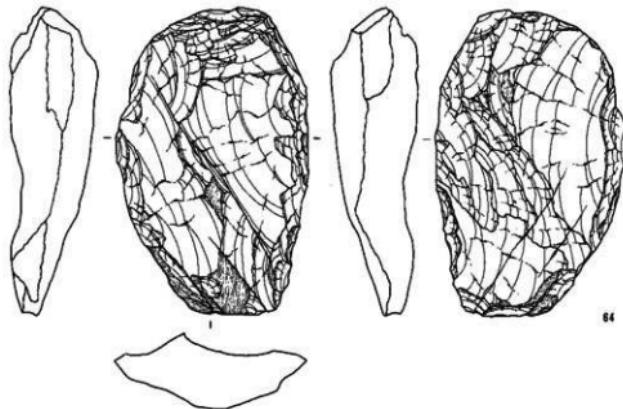
第42図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 7



第43図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 8



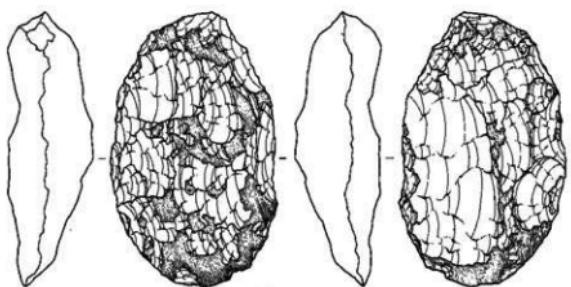
63



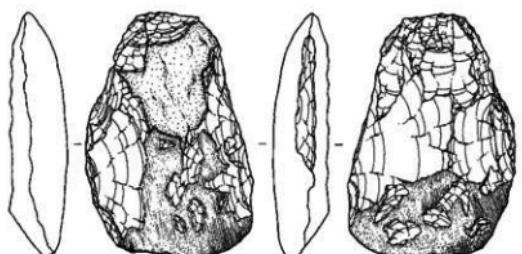
64



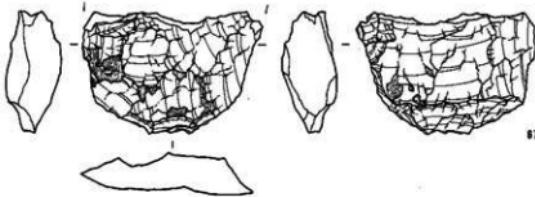
第44図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 9



65



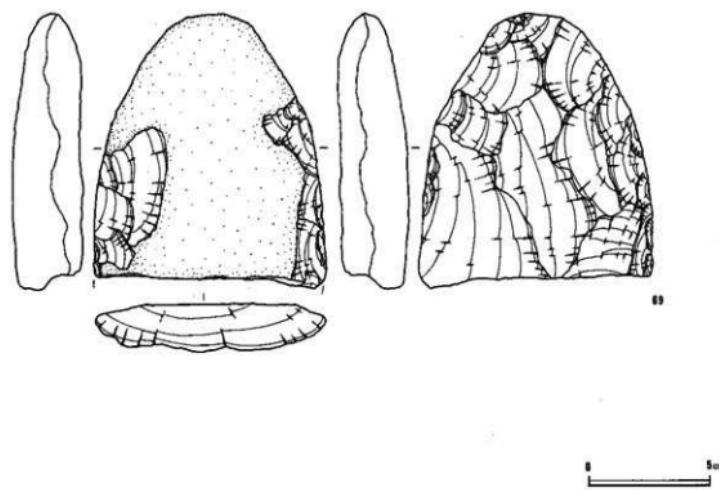
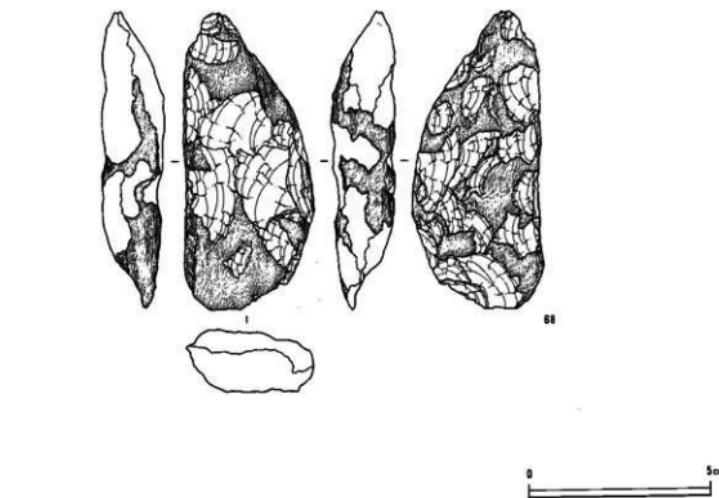
66



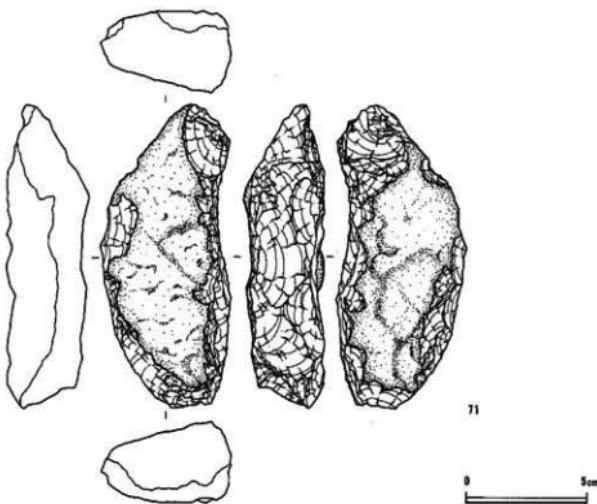
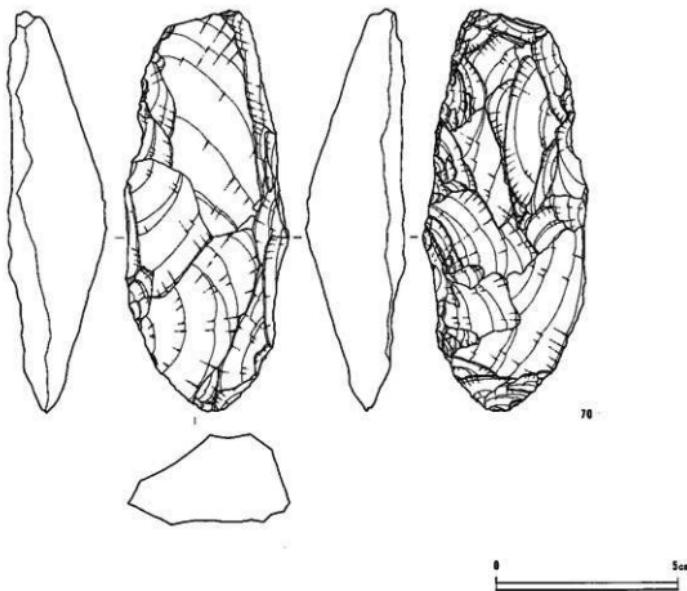
67



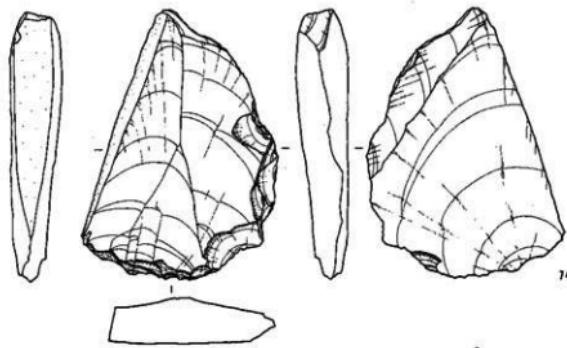
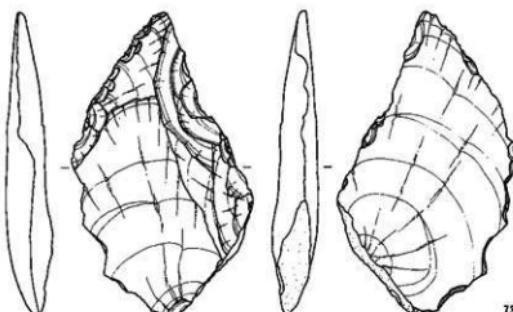
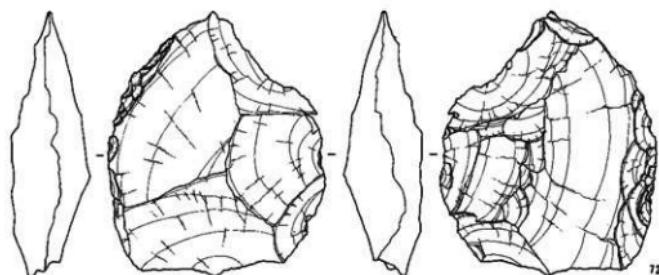
第45図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 10



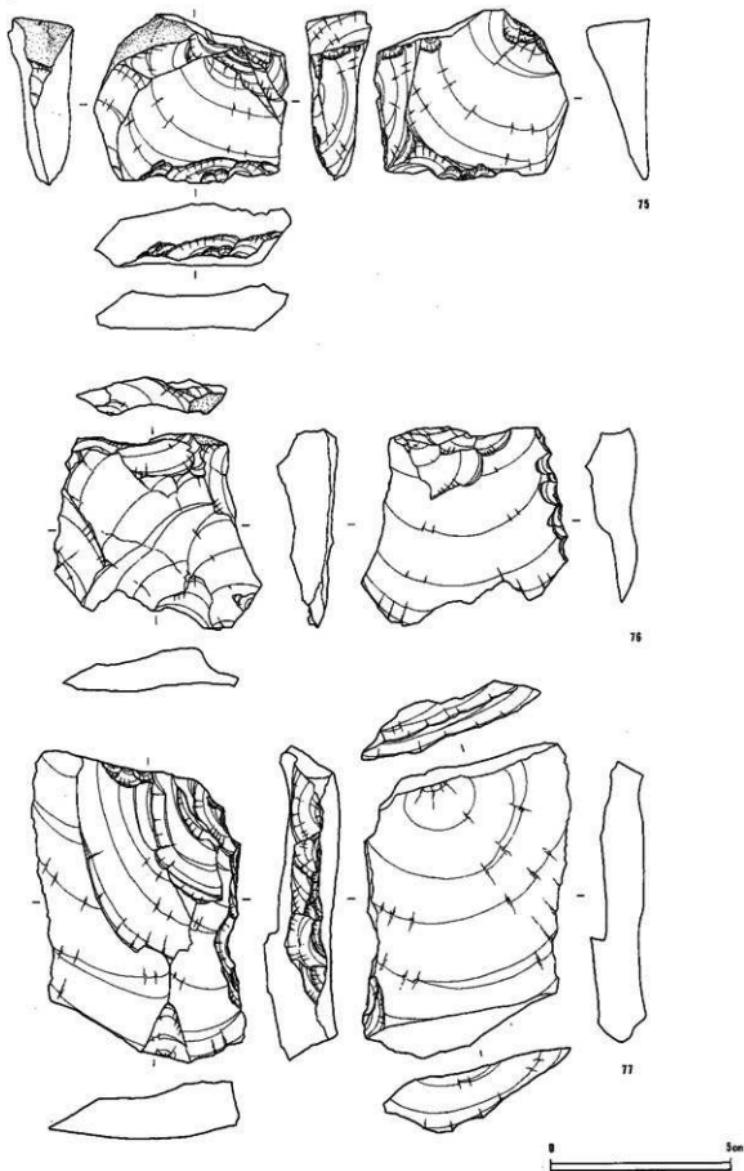
第46図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 11



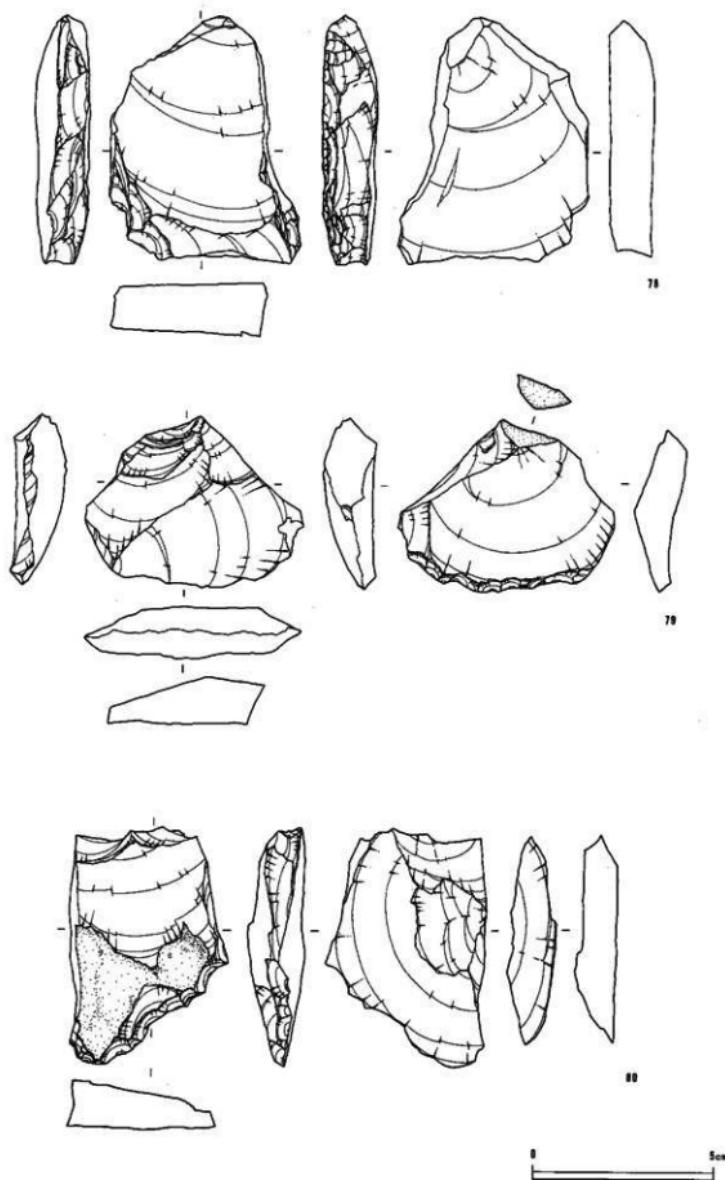
第47図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 12



第48図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 13



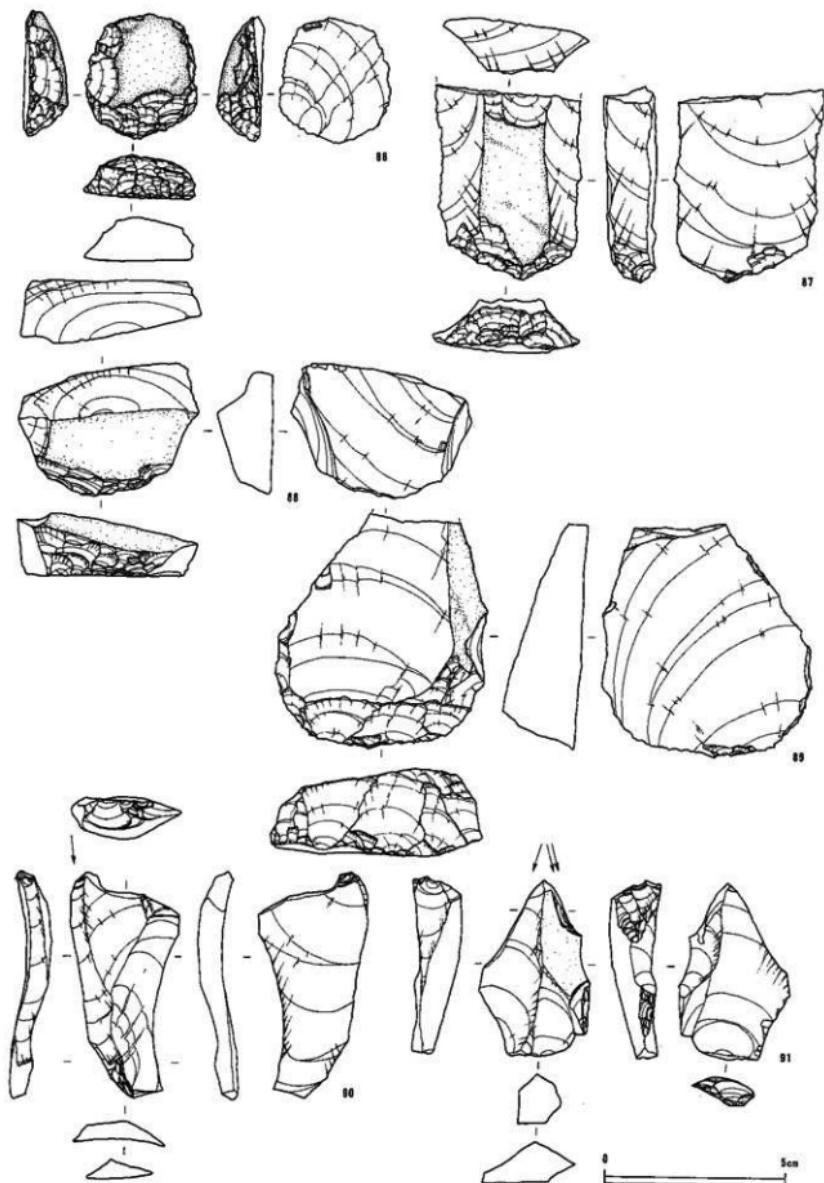
第49図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 14



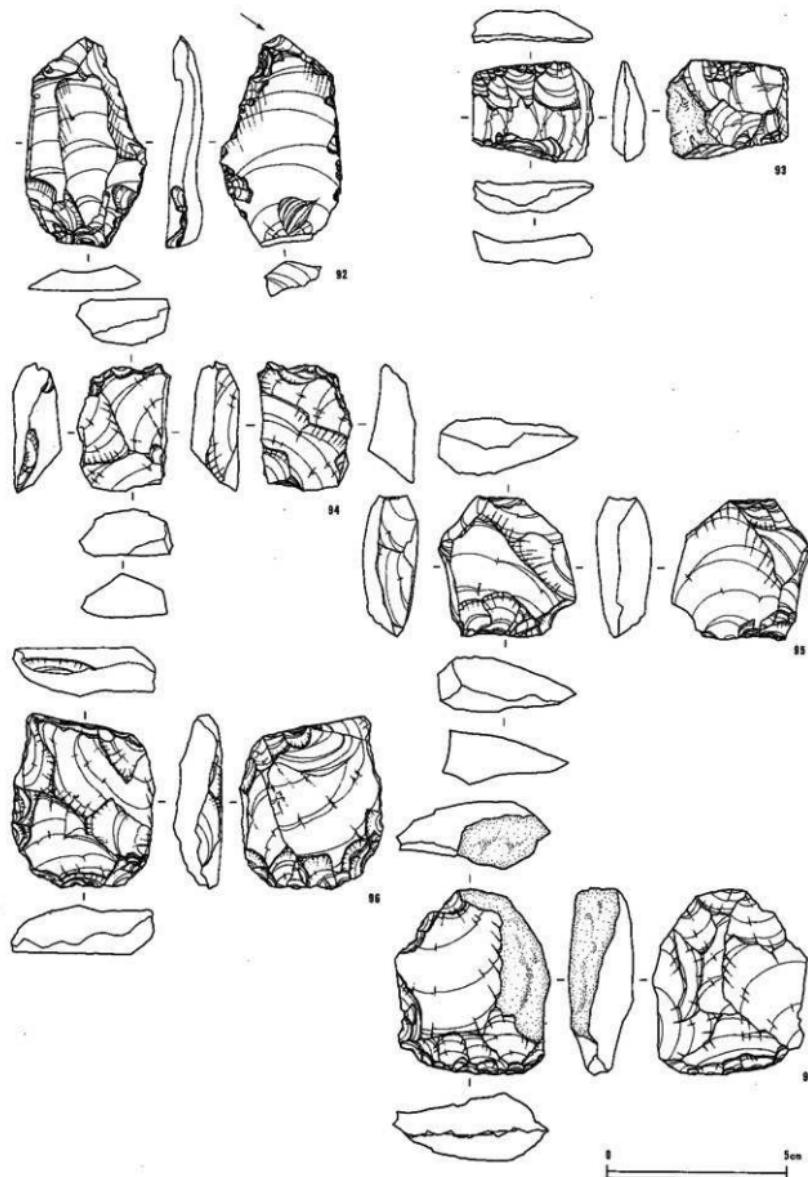
第50図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 15



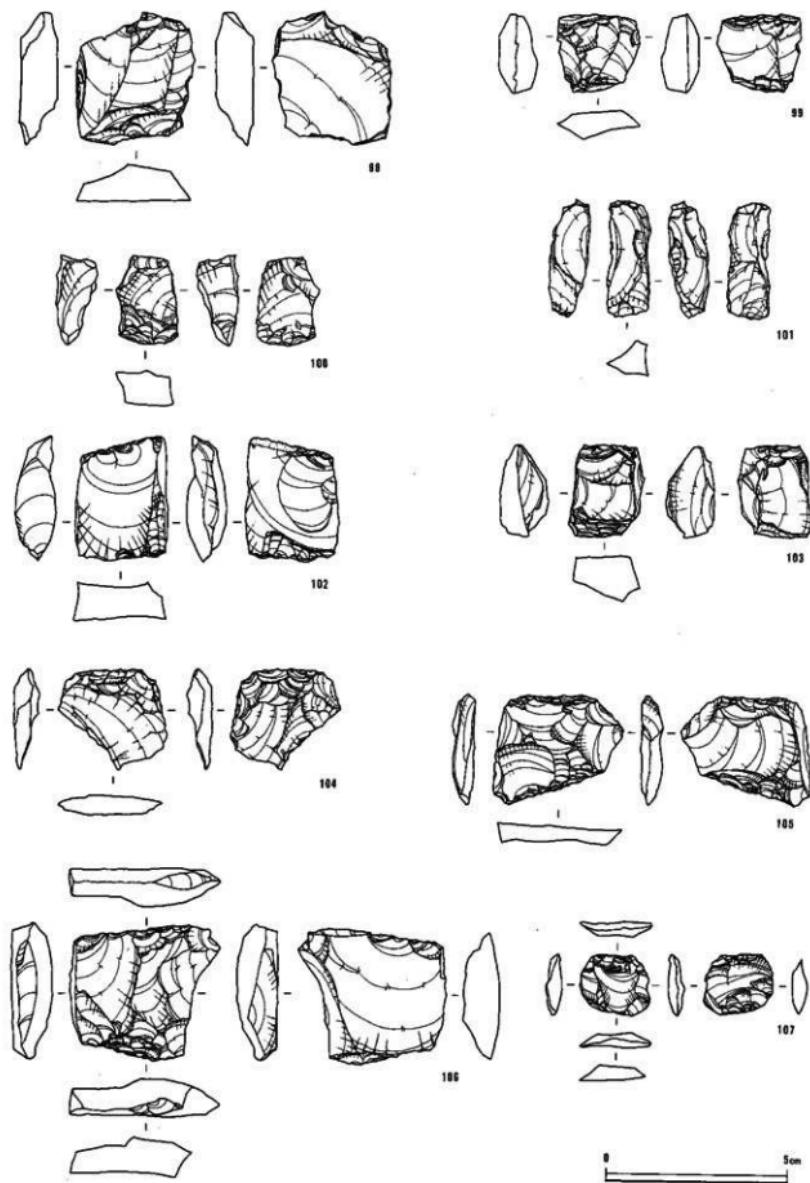
第51図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 16



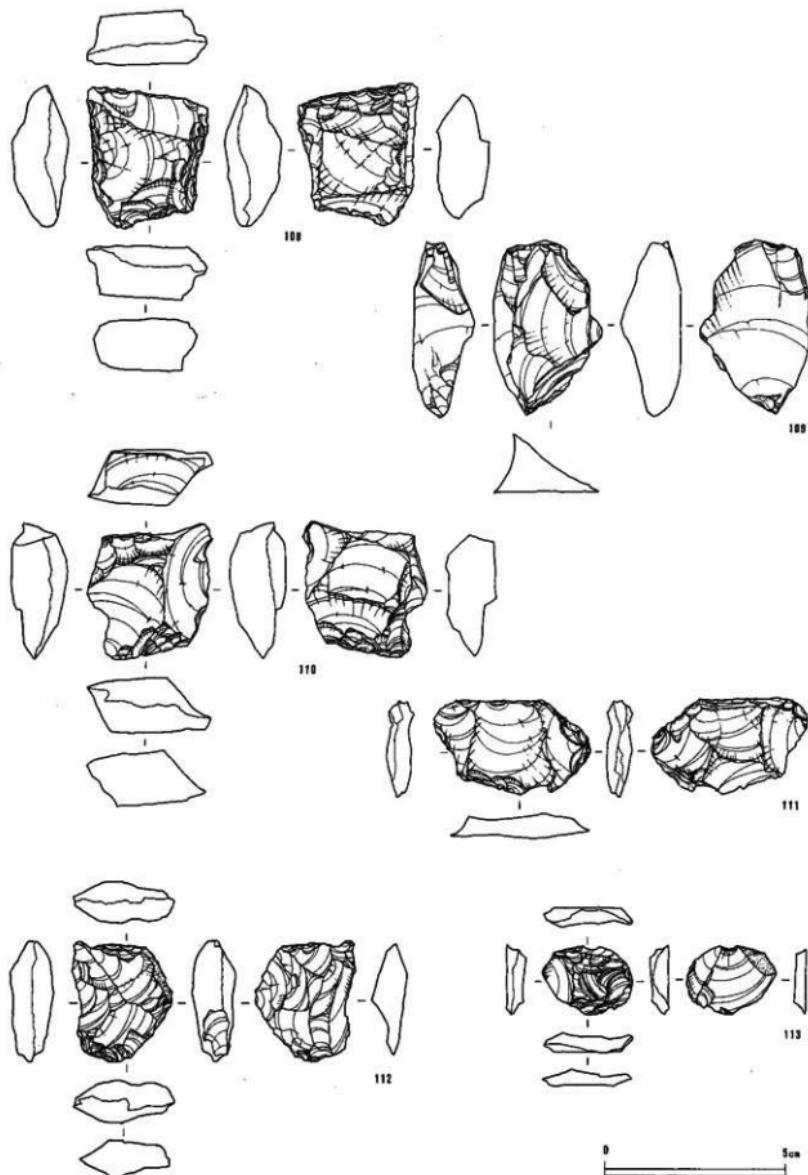
第52図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 17



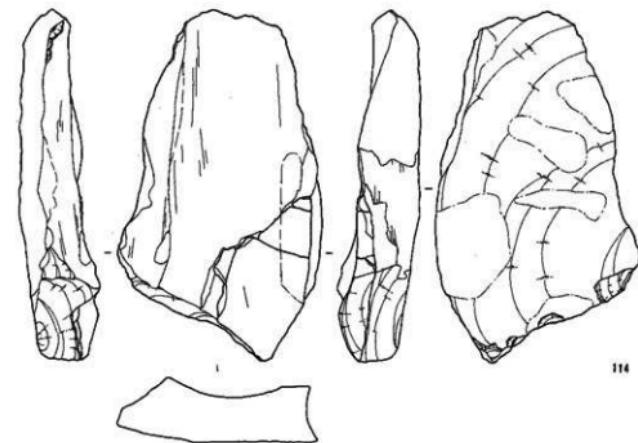
第53図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 18



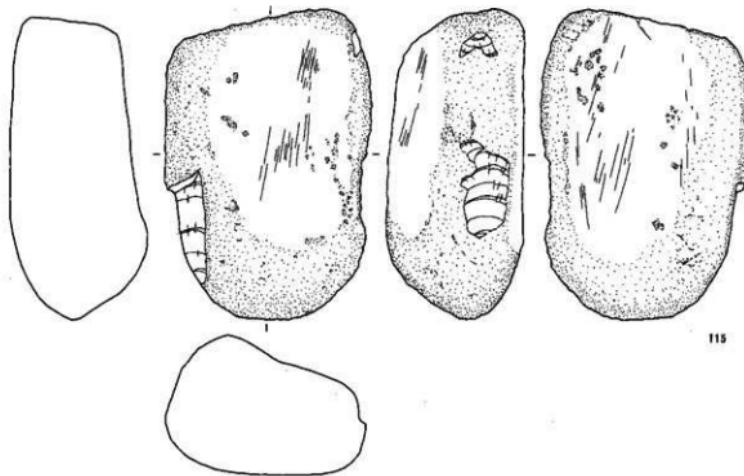
第54図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 19



第55図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 20



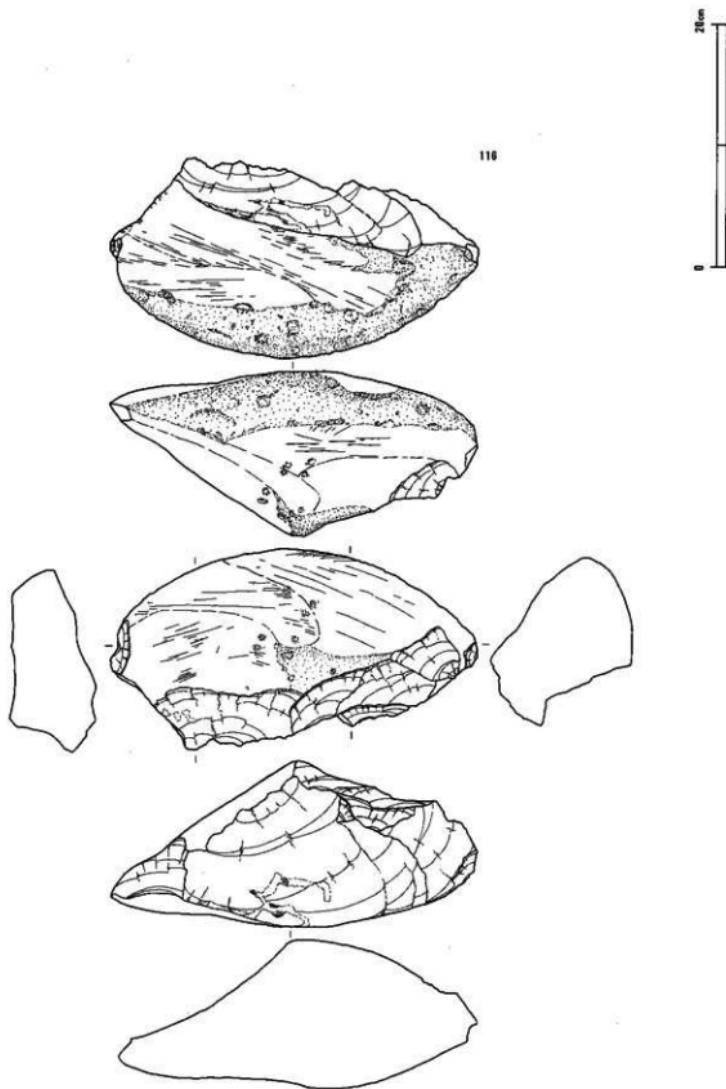
114



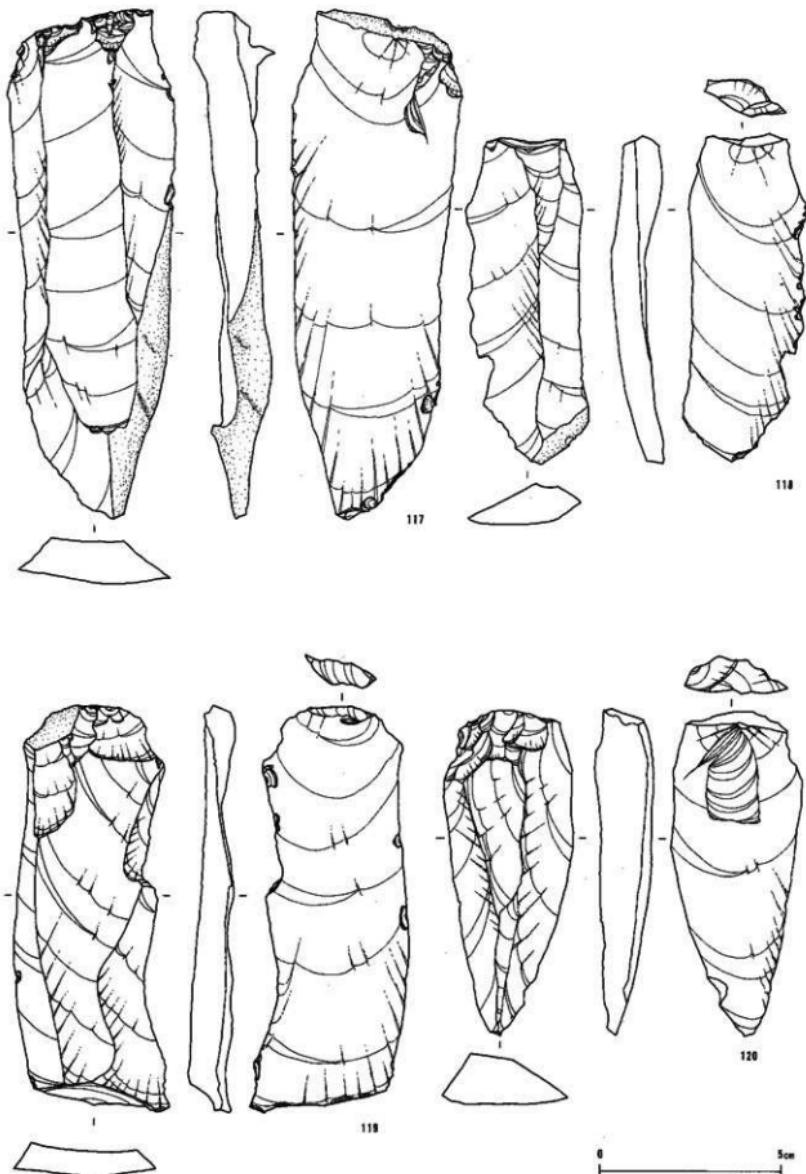
115



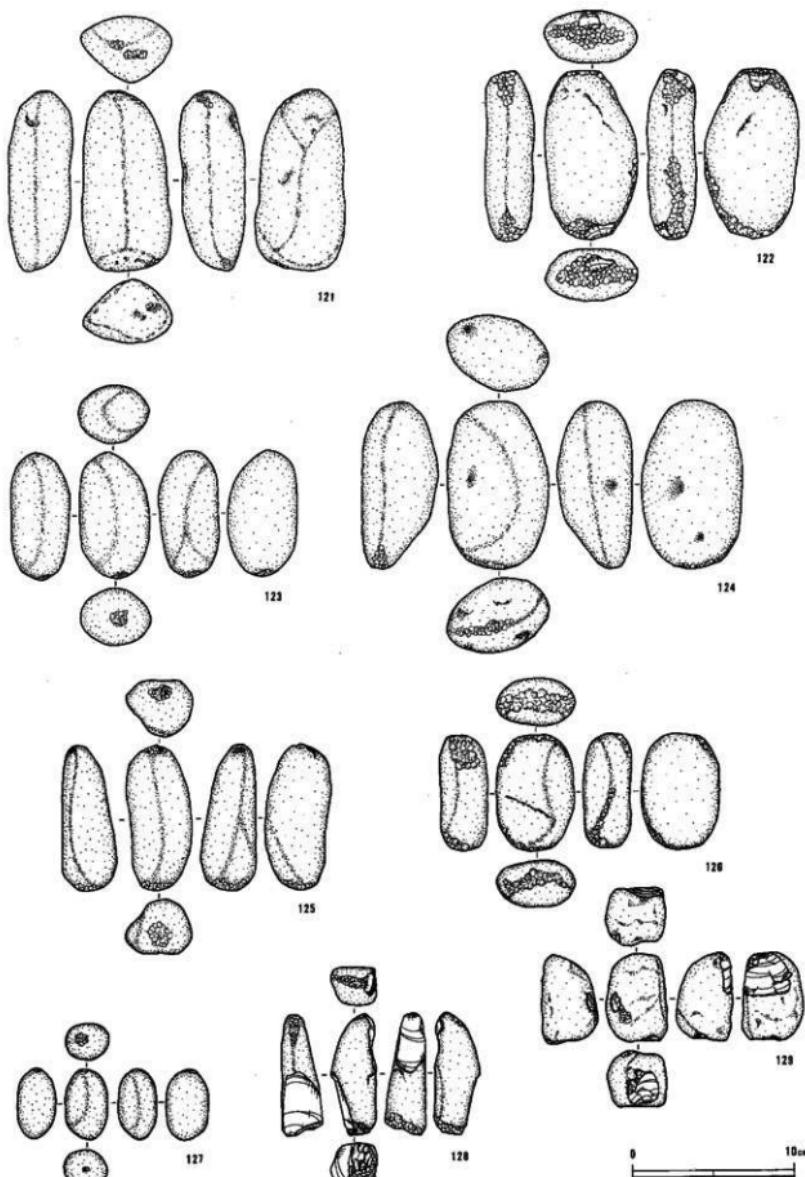
第56図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 21



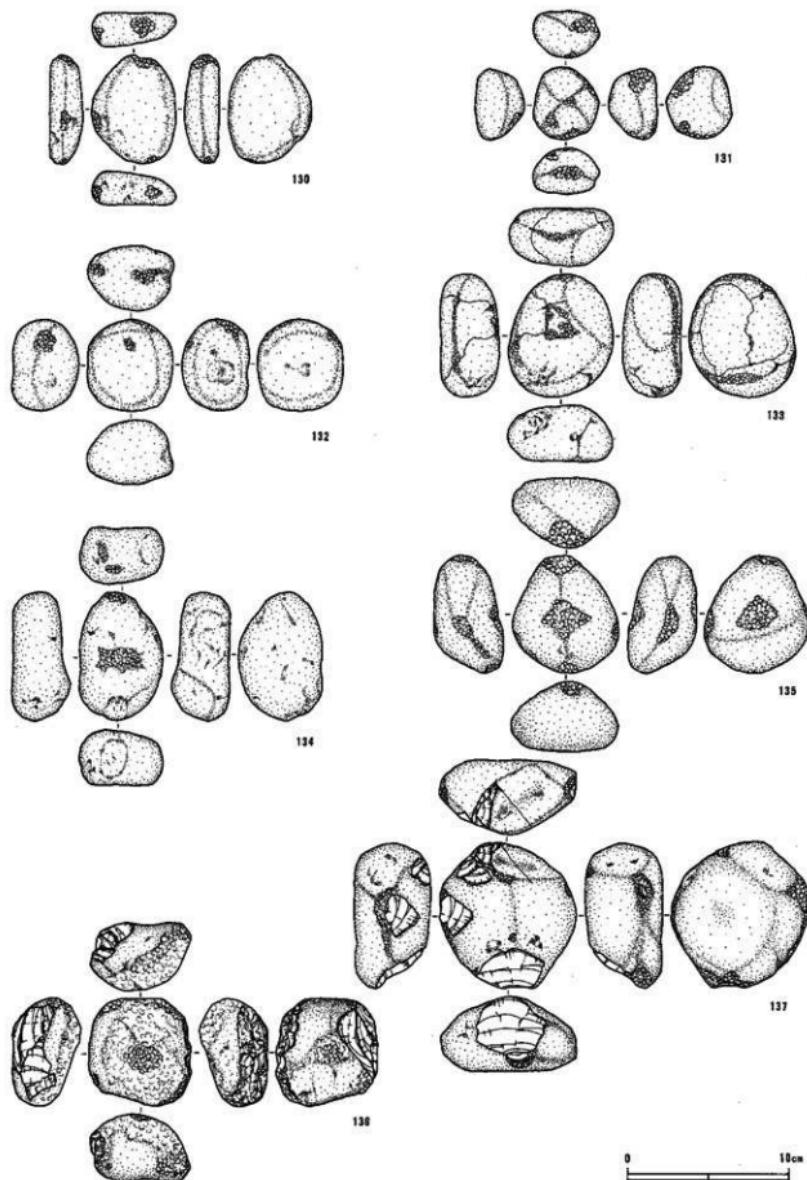
第57図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 22



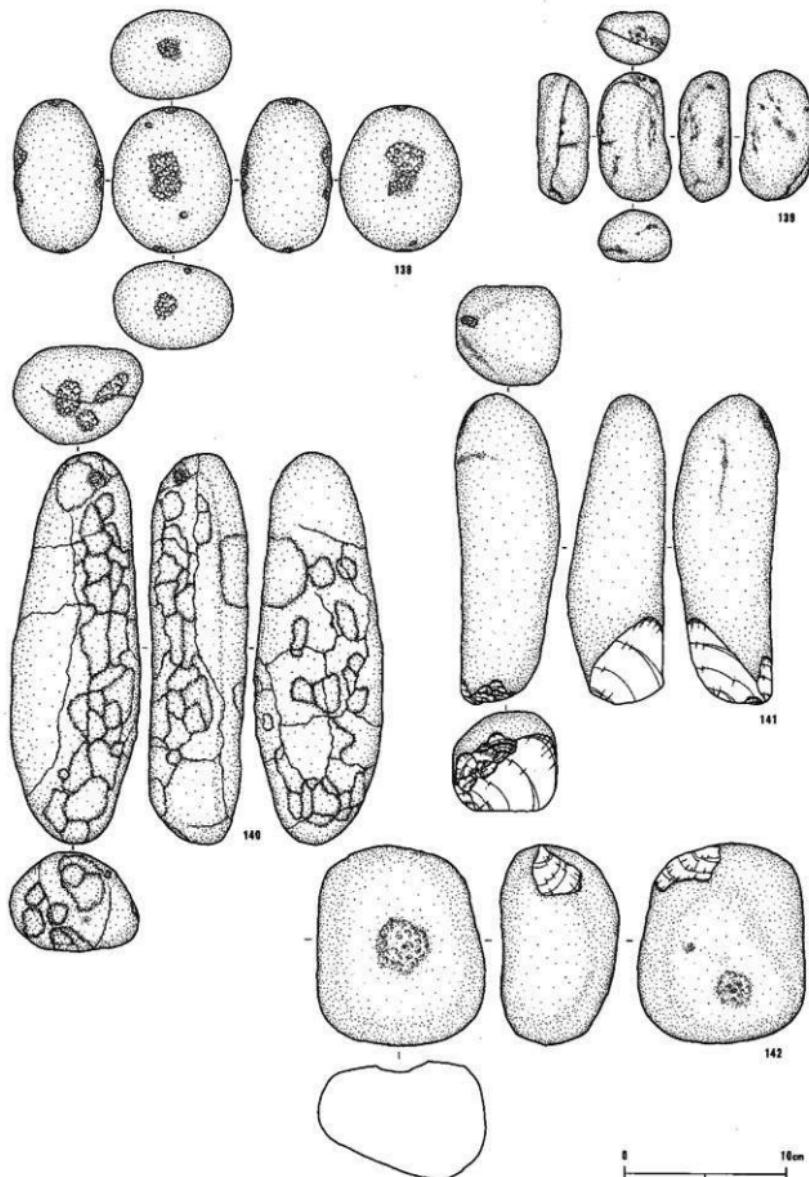
第58図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 23



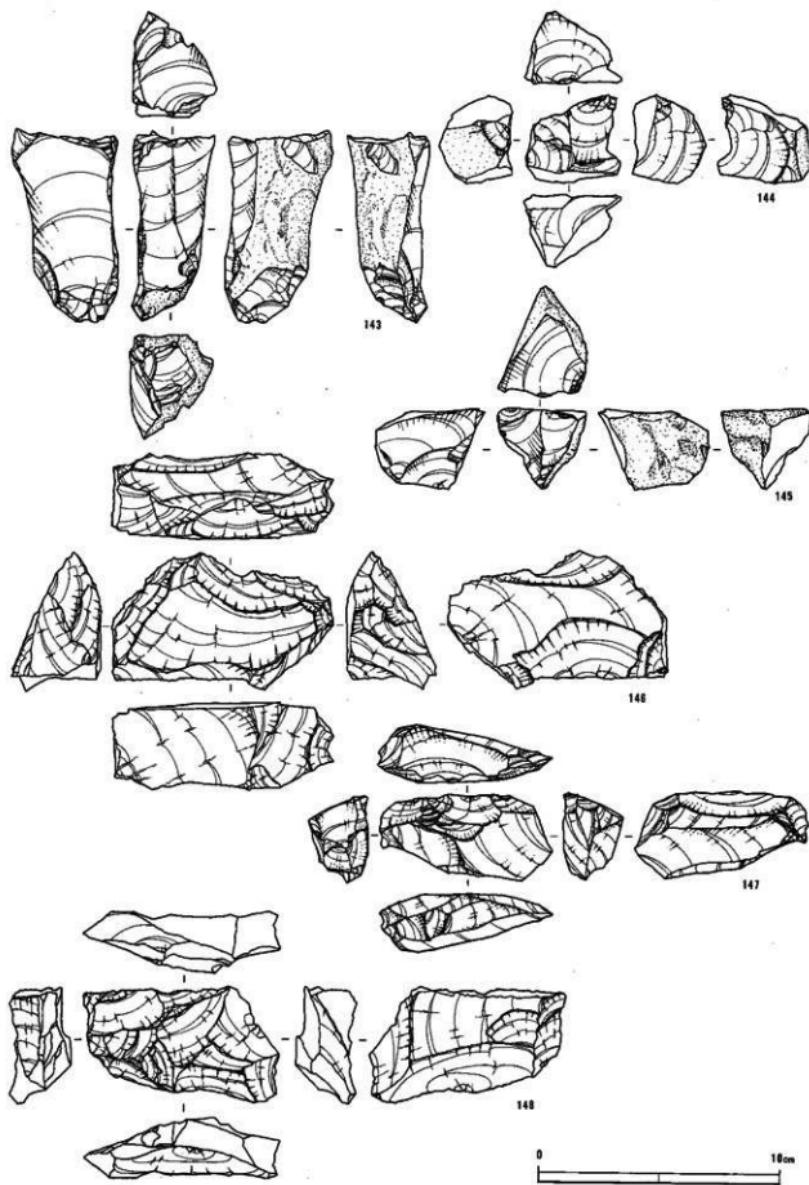
第59図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 24



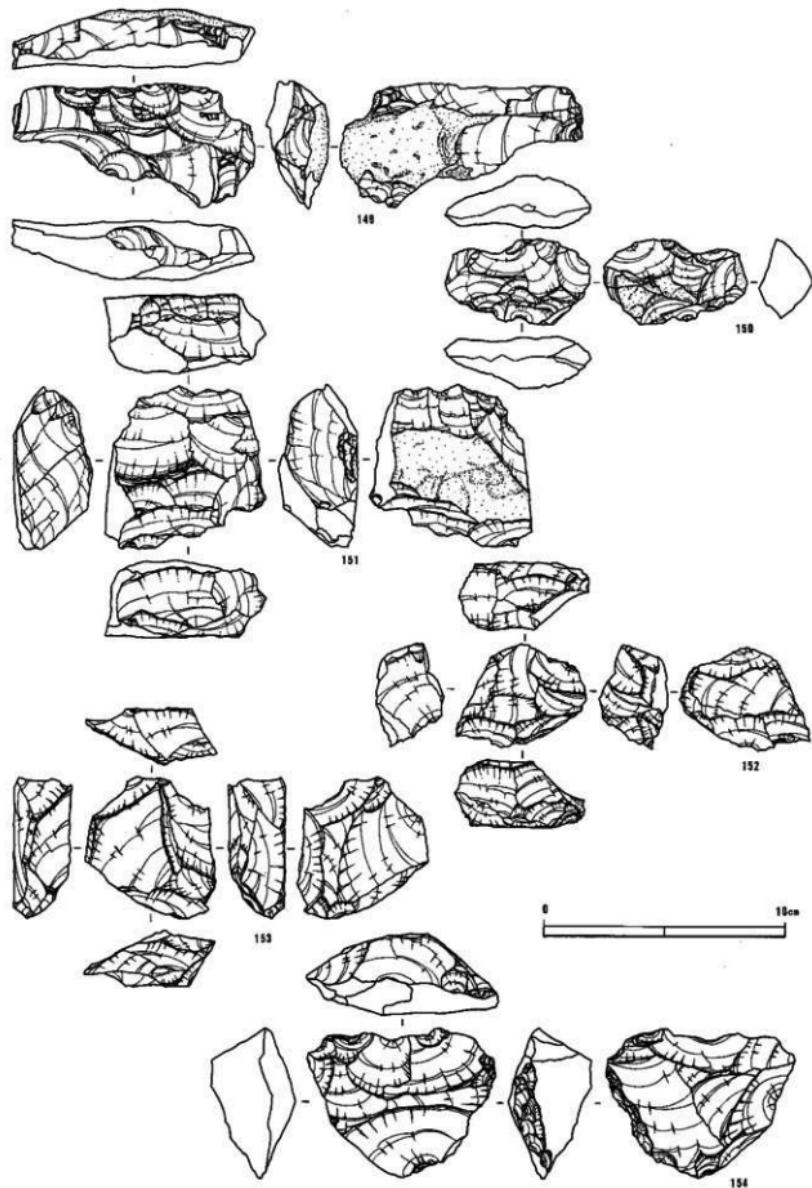
第60図 實ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 25



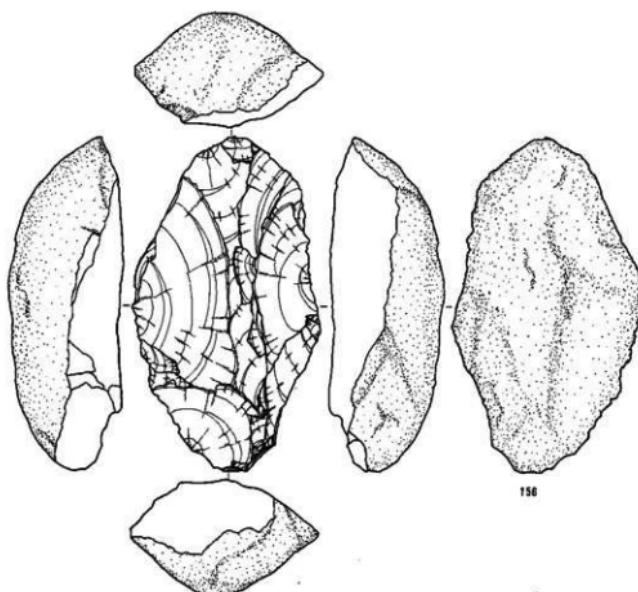
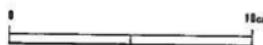
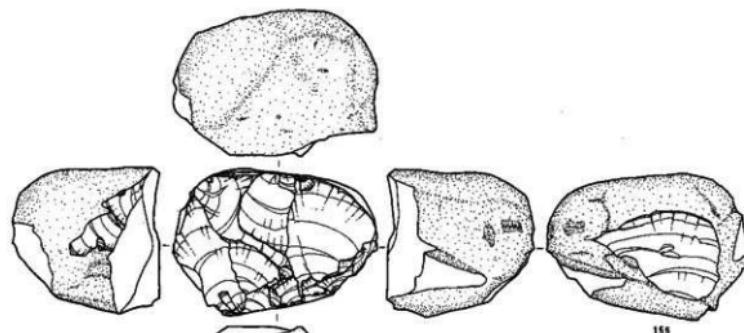
第61図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 26



第62図 實ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 27



第63図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 28



第64図 實ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 29

器種凡例 Kn:ナイフ形石器、Tr:台様石器、Po:捨形尖頭器、Dr:採鍬器、Ax:斧形石器、Se:削器、Es:搔器、Gr:彫器、Pe:楔形石器、Wh:砸石、Bl:石刃、Ha:敲石、Co:石核、Ps:凹石
材質凡例 An:無斑晶質安山岩、Ob:黒曜石、Ch:チャート、Sh:頁岩、HS:硬質頁岩、Tu:凝灰岩、SS:珪質頁岩、ST:珪質凝灰岩、Ag:玉髓、Ja:鈦石英、Ge:下呂石、Se:蛇紋岩、安山岩:普通輝石安山岩、Sa:砂岩

器種 番号	器種 番号	材質	大地区	遺物 番号	出土 層位	標高 mm	高さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量g	器種 番号	器種 番号	材質	大地区	遺物 番号	出土 層位	標高 mm	高さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量g
35 1	Kn	HS	Vi-M	765	Va	706,815	90	23	8	34.89	50 79	Sc	An	Vi-R	1125	III	715,44	46	58	13	31.89
36 2	Kn	Ob	Vi-N	305	W	707,71	86	22	9	13.2	50 80	Sc	An	Vi-R	1104	W	715,34	50	63	15	41.97
36 3	Kn	Ob	Vi-R	562	Va	715,5	58	19	8	5.54	51 91	ES	An	Vi-S	697	W	715,93	37	28	7	2.7
36 4	Kn	An	Vi-R	3331	III	713,14	63	19	7	9.55	51 92	ES	Tu	Vi-S	1707	V	713,29	47	25	20	29.16
36 5	Kn	Ob	Vi-R	3242	Va	714,85	59	24	8	6.12	51 93	ES	An	Vi-R	1149	III	715,15	40	40	10	10.89
36 6	Kn	Ob	Vi-M	2069	Va	711,29	42	25	9	1.97	51 94	ES	St	Vi-R	1766	V	715,48	42	28	7	8.85
37 1	Kn	Ob	Vi-M	2069	Va	711,29	42	25	9	1.97	51 95	ES	An	Vi-R	505	III	714,51	49	26	22	34.03
37 2	Kn	Ob	Vi-R	3052	V	715,59	45	34	8	10.66	52 86	ES	Ch	Vi-H	162	Va	706,56	54	31	12	35.75
37 3	Kn	Ob	Vi-R	311	W	711,46	74	49	9	39.11	52 87	ES	An	Vi-H	49	W	707,05	52	40	14	38.61
37 10	Kn	Ob	Vi-R	763	W	715,22	64	31	6	9.22	52 88	ES	An	Vi-R	2229	W	715,67	30	48	17	28.53
37 11	Kn	St	Vi-L	546	Va	706,45	20	21	7	6.67	52 89	ES	An	Vi-R	2087	V	715,6	66	58	24	87.36
37 12	Kn	An	Vi-R	3047	V	716,62	88	36	10	31.74	52 90	St	Vi-H	42	II	703,13	62	30	12	11.50	
37 13	Kn	Ge	Vi-I	95	Va	707,34	60	21	8	8.42	52 91	Gr	HS	Vi-H	56	III	702,03	49	20	13	12.53
38 14	Kn	St	Vi-S	1409	Va	715,45	37	24	11	10.8	52 92	Gr	Ob	Vi-S	472	Va	715,71	67	32	9	34.18
38 15	Kn	Ag	Vi-S	3658	Va	712,46	66	29	12	14.28	53 93	Pc	Ja	Vi-C	72	V	703	27	33	7	7.9
38 16	Kn	Ag	Vi-R	3079	W	712,78	51	21	9	8.15	53 94	Pc	An	Vi-H	71	W	702,9	34	24	13	11.14
38 17	Kn	Ob	Vi-C	2515	Va	715,36	50	22	9	6.77	53 95	Pc	An	Vi-C	71	V	703,55	39	35	16	21.75
38 18	Kn	Ob	Vi-N	98	Va	709,49	32	22	7	2.73	53 96	Pc	An	Vi-R	409	W	715,95	48	38	13	27.55
38 19	Kn	St	Vi-M	160	W	709,55	38	17	6	3.23	53 97	Pc	An	Vi-R	2174	W	714,47	52	48	18	49.32
38 20	Kn	HS	Vi-S	1369	Va	713,69	36	10	4	1.32	54 98	Pc	An	Vi-R	559	W	715,7	38	31	10	11.96
38 21	Kn	An	Vi-S	242	Va	708,41	46	13	6	2.93	54 99	Pc	An	Vi-R	197	III	716,06	22	22	9	4.66
38 22	Kn	Ob	Vi-H	77	Va	702,69	30	16	7	2.43	54 100	Pc	An	Vi-R	2084	V	715,87	24	17	12	5.1
39 23	Kn	St	Vi-R	745	III	716,03	61	20	7	7.01	54 101	Pc	An	Vi-R	2078	V	713,76	32	13	10	4.7
39 24	Kn	HS	Vi-M	335	III	707,14	54	16	5	3.31	54 102	Pc	SS	Vi-S	297	III	715,71	35	25	10	16.24
39 25	Kn	HS	Vi-H	63	III	706,05	52	19	5	3.6	54 103	Pc	An	Vi-R	957	III	716,33	26	18	12	6.86
39 26	Kn	An	Vi-C	104	Va	706,29	92	40	9	40.66	54 104	Pc	An	Vi-R	2008	V	716,17	28	7	5	5.05
39 27	Kn	St	Vi-N	256	Va	711,35	98	27	11	27.86	54 105	Pc	St	Vi-R	3579	III	712,6	29	34	6	7.16
39 28	Kn	Ob	Vi-N	17	Va	711,24	43	22	10	7.26	54 106	Pc	An	Vi-R	1998	V	715,27	36	40	10	15.56
40 29	Tz	An	Vi-I	176	Vb	706,82	15	37	12	16.24	54 107	Pc	Ob	Vi-S	3513	W	713,85	16	20	4	1.1
40 30	Tz	Ob	Vi-H	573	Va	703,95	52	30	13	11.51	55 108	Pc	An	Vi-R	1785	W	715,98	31	24	10	20.4
40 31	Tz	Ob	Vi-H	286	Vb	705,56	37	32	8	6.5	55 109	Pc	SS	Vi-S	375	W	715,8	47	29	16	17.34
40 32	Tz	Ag	Vi-N	15	Va	719,98	29	16	7	7.29	55 110	Pc	Ag	Vi-S	2569	V	715,58	34	31	11	3.03
40 33	Tz	Ob	Vi-N	1	Va	719,98	29	16	7	7.29	55 111	Pc	Ob	Vi-H	3639	V	714,4	27	42	6	6.74
40 34	Tz	Ob	Vi-C	2509	V	714,76	33	17	5	2.48	55 112	Pc	Ch	Vi-H	2631	V	714,54	32	30	10	8.61
40 35	Tz	Ob	Vi-C	103	Va	706,22	23	14	5	1.09	55 113	Pc	Ob	Vi-S	3464	V	713,96	19	23	4	1.91
40 36	Tz	Ob	Vi-W	3762	Va	712,36	28	36	8	4.25	56 114	Wh	Sa	Vi-S	28	N	715,94	25	120	50	919
41 37	Tz	Ob	Vi-R	1846	III	714,74	40	36	11	13.45	56 115	Wh	Sa	Vi-N	267	V	709,13	164	324	92	2000
41 38	Tz	Ob	Vi-S	1113	W	714,57	44	33	8	7.57	57 116	Wh	Sa	Vi-H	435	V	706	29	160	128	4520
41 39	Tz	Ob	Vi-S	3060	Va	715,54	48	36	6	10.99	57 117	Hi	Tz	Vi-S	1426	V	713,63	149	45	18	101.53
41 40	Tz	Ob	Vi-H	243	Va	706,27	43	28	7	5.62	58 118	Hi	Tz	Vi-S	1932	V	712,56	89	34	8	39.23
41 41	Tz	Ob	Vi-S	161	W	715,48	49	32	14	15.56	58 119	Hi	Tz	Vi-S	1332	V	713,85	109	44	15	56.97
41 42	Tz	St	Vi-S	3518	Vb	713,46	53	23	9	10.57	58 120	Hi	An	Vi-R	2872	W	714,66	99	37	13	42.19
41 43	Tz	An	Vi-H	4327	Vb	706,27	36	30	7	5.32	59 121	Hi	An	Vi-H	94	III	710,15	111	54	36	290.02
41 44	Tz	Ob	Vi-S	643	Vb	715,8	32	17	6	2.68	59 122	Hi	An	Vi-H	129	V	715,71	103	32	31	269.5
41 45	Tz	Ob	Vi-R	276	Va	715,34	38	20	8	4.02	59 123	Hi	An	Vi-H	1	IV	706,7	79	41	36	154.97
42 46	Tz	An	Vi-S	1221	W	714,05	36	23	6	5.21	59 124	Hi	An	Vi-R	3065	III	714,91	164	45	36	360
42 47	Tz	An	Vi-S	366	Va	716,97	42	34	12	13.57	59 125	Hi	An	Vi-H	286	V	706,7	80	40	34	148.64
42 48	Tz	Ob	Vi-S	816	Vb	715,21	29	14	8	2.74	59 126	Hi	Tz	Vi-R	2995	V	715,59	71	49	29	153.33
42 49	Tz	Ob	Vi-S	176	Va	716,03	38	13	6	3.21	59 127	Hi	An	Vi-H	1	IV	707,09	43	26	24	40.01
42 50	Tz	Ob	Vi-S	568	W	715,54	34	21	5	2.93	59 128	Hi	Sa	Vi-S	771	III	706,66	73	26	27	55.2
42 51	Tz	Ob	Vi-R	3589	Va	712,62	28	22	6	4.13	59 129	Hi	Ch	Vi-H	714	III	706,85	55	36	34	104.35
42 52	Tz	Ob	Vi-M	575	Vb	705,72	26	17	7	2.82	60 130	Hi	An	Vi-H	273	V	707,57	67	49	22	33
42 53	Tz	Ob	Vi-M	578	W	705,69	13	16	6	0.88	60 131	Hi	Sa	Vi-R	141	W	715,89	43	29	28	66.85
42 54	Tz	Ob	Vi-M	573	Vb	705,72	13	20	3	1.06	60 132	Hi	An	Vi-H	295	V	711,08	53	51	31	169.13
42 55	Tz	Ob	Vi-S	41	Va	715,92	49	29	11	11.58	60 133	Hi	An	Vi-H	117	III	710,07	77	70	22	225.57
42 56	Tz	St	Vi-S	3164	W	715,15	51	30	10	20	60 134	Hi	Tz	Vi-M	678	W	706,64	79	50	37	211.4
43 57	Pc	St	Vi-M	384	Va	707,61	65	23	12	14.67	60 135	Hi	Sa	Vi-S	953	V	714,89	74	61	42	233.91
43 58	Pc	Ge	Vi-M	47	Va	711,02	75	35	8	20.08	60 136	Hi	Sa	Vi-H	1589	V	714,8	50	37	23	20.81
43 59	Pc	St	Vi-R	746	Va	715,93	66	30	11	7.53	60 137	Hi	Sa	Vi-H	263	V	711,13	94	82	49	49.09
43 60	Pc	St	Vi-H	46	III	707,1	45	23	10	6	130	Hi	Sa	Vi-H	1628	V	714,69	89	70	53	509
43 61	Pc	Ch	Vi-H	58	Va	706,78	24	14	4	1.07	61 138	Hi	Sa	Vi-H	273	V	706,42	69	43	23	148.54
43 62	Pc	Ob	Vi-S	1399	Vb	713,7	44	40	10	13.67	61 139	Hi	Sa	Vi-H	137	V	706,46	190	60	41	165.0
43 63	Pc	Se	Vi-I	31	Va	707,08	88	47	17	33.75	61 140	Hi	Sa	Vi-H	1299	V	714,21	121	102	78	147.0
44 64	As	Sc	Vi-R	2814	Va	715,01	83	52	22	9.77	61 141	Co	St	Vi-S	354	V	715,9	76	33	42	160.4
45 65	As	Se	Vi-R	2300	Va	714,93	75	49	22	80.43	61 142	Co	St	Vi-R	3048	V	716,51	36	39	26	56.56
45 66	As	Se	Vi-R	2664	Vb	715,17	67	45	13	56.54	61 143	Co	Ob	Vi-S	3654	V	712,21	34	37	45	35.99
45 67	As	Se	Vi-S	694	Va	715,58	35	49	13	26.26	61 144	Co	An	Vi-S	1312	V					

第3節 繩文時代の遺構と遺物

1 概要

繩文時代の遺構と遺物の検出状況はVI-I区を境にした台地上と低地部にわかれる。台地上は土坑と集石がみられたのに対し、低地部では明確な遺構はなく、土器集中が検出されたのみであった。

繩文時代の遺物包含層はII~IV層で、遺構の覆土もII・III層が起源であるため、その検出にあたっては、IV層の黄褐色ローム上面でおこなった。したがって、IV層まで掘り込まない遺構は検出ができなかった。低地部ではII層の堆積が厚く、土器集中も規模は小さく繩文時代の本格的な集落が営まれたとは考えられない。遺構全体図を第65図に示した。

2 遺構

1) 土坑(第66図~第69図・第8表)

土坑は26基が検出された。それらはその形態的特徴から3類に分けられる。

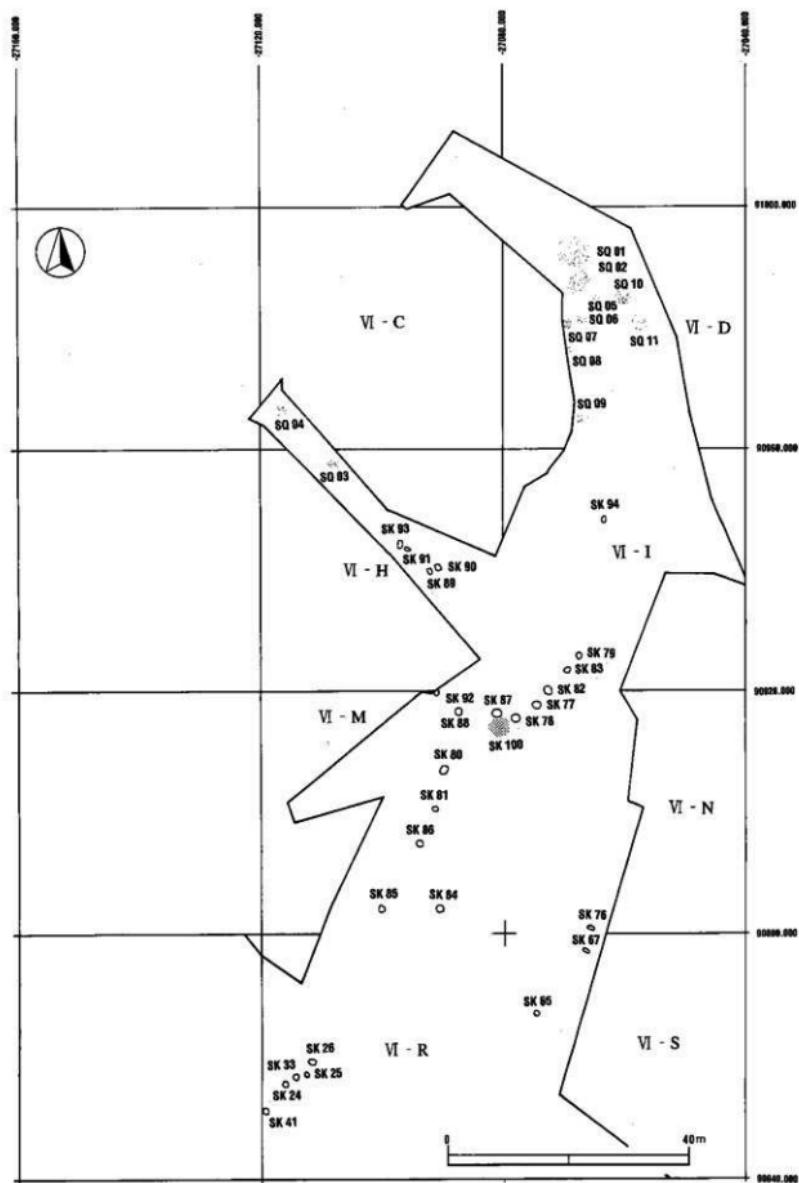
I類：平面形が方形（隅丸長方形）を呈し、底部のほぼ中央に1本の逆茂木痕をもち、陥穴と考えられる。SK67、76、89~91、93、94の7基が相当する。土坑からの出土遺物はないが、SK94の覆土上層から標準土層のIIa2層もしくはIIa4層とおもわれる妙高の火山灰を含む層が確認された。IIa2層だとすれば野尻湖調査団のキビダンゴII（約4,000年前降灰）、IIa4層だとすれば野尻湖調査団のキビダンゴI（約6,000年前降灰）が降ったときまだ土坑は埋まりきらなかつたことになる。したがって本類の特徴をもつ土坑が同時期に形成されたと考えれば、繩文時代の前期もしくは後期の所産となろう。また、SK90はIIb層を切って構築されている。IIb層は繩文時代早期前半期頃に降灰した火山灰と考えられ、前述のことを裏付ける。

II類：平面形が円形で検出面からの深さが、後述するIII類に比べ浅いという特徴を持つ。性格時期とともに不明である。SK65、80、84~86の5基が相当する。SK86は集石を伴う。SK84は断面形がフラスコ状を呈する。

III類：平面形はII類と同じ円形であるが非常に深く、検出面から180cmを測るものもある。逆茂木痕のある土坑が1基ある。SK24~26、33、41、77~79、81~83、87、88、92の14基が相当する。SK79・83・82・77・78やSK26・25・33・24・41のように等高線に直交するように並ぶ例がある。おそらく陥穴と考えられる。時期を決定できる出土遺物がほとんどないが、IIb層が覆土上層にはいるものがあり、このことからIIb層降灰頃に形成された土坑と考えられる。また、高速道地点において同形態の土坑覆土中の炭化物から放射性炭素年代測定を行ったところ、9,600年~10,260年B.P.の値が得られた。

2) 集石(第70図)

集石は2基検出された。SH100は表土下II層上半部で検出されおり、繩文時代でも後半期の可能性が高い、周辺から石礫1点と、土器片が3片出土しているが、時期を確定できる資料ではなかった。平面分布は約3mの範囲に広がるが、中心部に直径約1mの範囲の密集部があり、その周辺に散漫な分布域がある。礫は132個を数えるが、比較的小粒のものが多い。完形礫が多く、すべて赤化している。SH86は集石土坑である。III層上半部で土坑、礫とともに確認している。礫数は36個を数える。



第65図 貫ノ木遺跡縄文時代遺構全体図

① 土器集中

土器集中は12基確認されたが、分布の主体はVI-D区を中心に低地部であった。台地上で確認されたのはSQ03・04・12の3基のみである。

SQ01は、約400片の土器片が直径6mの範囲から発見された。出土層位はIIc層である。石器・剣類も併出している。沈線文系土器群が出土している。

SQ02は、50片の土器片からなる。SQ01に隣接して検出された。出土層位はIIc層である。

SQ03は、約40片の土器片からなり、散漫な分布を呈す。

SQ04は、約20片の土器片からなり、散漫な分布を呈す。垂直分布に上下差が激しく、出土土器も縄文時代早期と前期があることから、1時期に残されたものではないであろう。

SQ05は、16片の土器片からなる。最下底の遺物レベルより8cmほど下でIIa4層（キビダンゴI=約6,000年前降灰を含む）が検出された。土器も縄文前期である。

SQ06は、約130片の土器片からなる。そのほとんどが同一個体で、沈線文系土器が復元された（第76図131）。IIb層との関係は明確ではないが、最下底の遺物レベルより10cm下でIII層に移行する。

SQ07は、約220片の土器片からなる。縄文時代前期土器のほぼ同一個体で形成されている。最下底の遺物レベルより15cmほど下でIIb層が確認できた。

SQ08は、15片の土器片からなる。沈線文系の土器が主体をなす。直下にIIb層が確認された。

SQ09は、46片の土器片からなる。

SQ10は、約60片の土器片からなる。個体復元が可能な沈線文系の土器が主体をなす。SQ11は、約140片の土器片からなる。押型文土器の1個体分の破片が主で、復元された（第図125）が、他の土器片や石器類もある。調査区隅で検出されたため、その広がりは不明なところが多いが、SQ01・02と同様な分布状況を示す可能性が高い。

SQ12は、98点の土器片からなる。表裏縄文土器で構成される。出土層位はIII層である。

以上の出土状況から本遺跡で検出されたSQは以下のように分類整理されよう。

構成される土器から3つに分類される。

I類：ほぼ一個体の土器で構成される。時間的にも当然のことながら一時期である。SQ06・07

II類：個体数は不明であるが、土器型式の時期が比較的短時間に限られる。SQ01・02・05・08・09・
10・11・12

III類：土器型式の時期等にばらつきがあり、分布も散漫である。SQ03・04

出土層位からは3期に分けられる。

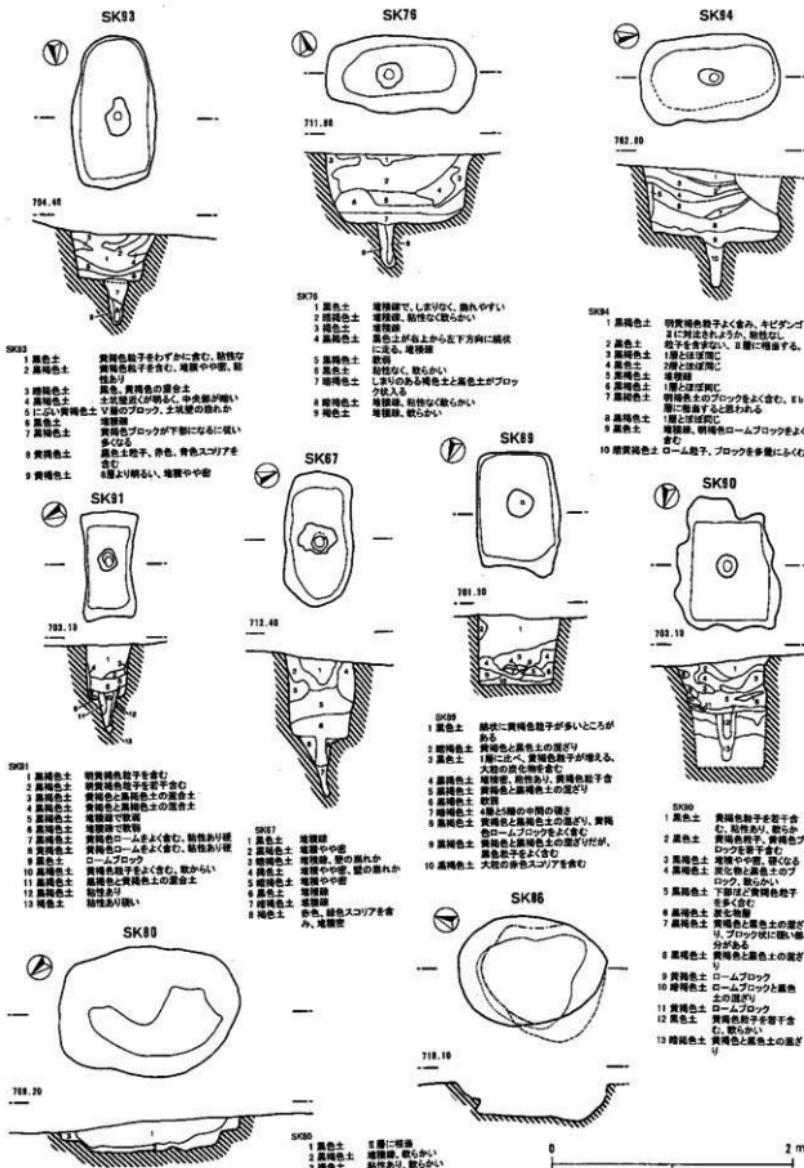
1期：III層で検出される。SQ12

2期：IIb層を挟んで直上、直下から検出される。1・3期以外のSQ

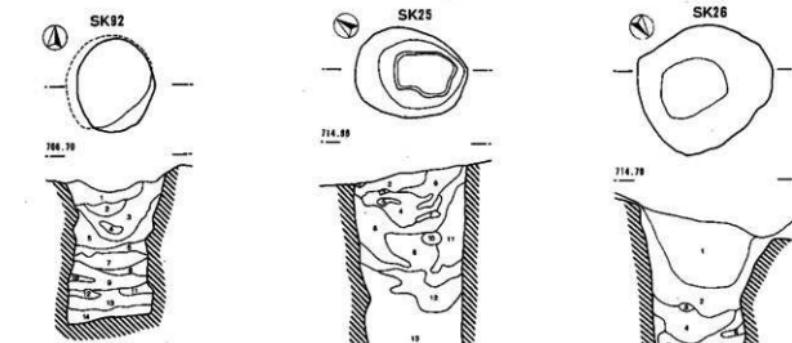
3期：IIb層より上層で検出される。SQ05・08

土坑名	規 模(m)	深 さ(cm)	方 向	分類	備 考
SK67	0.6×1.1	110~120	N-19°-E	1	逆木痕あり
SK76	1.2×0.65	93~94	N-69°-W	1	逆木痕あり
SK89	0.69×0.95	60~80	N-120°-W	1	逆木痕あり
SK90	0.78×1.05	42~80	N-120°-W	1	逆木痕あり
SK91	0.38×0.86	38~72	N-150°-W	1	逆木痕あり
SK93	0.7×1.25	77	N-90°-W	1	逆木痕あり
SK94	1.16×0.72	56~96	N-7°-E	1	逆木痕あり
SK65	1.1×1.0	18	N-62°-W	2	
SK80	1.5×1.1	25	N-40°-E	2	
SK84	1.28×1.32	40	N-89°-W	2	プラスコ状
SK85	0.88×1.12	16~24	N-9°-E	2	
SK86	1.1×0.9	40~50	N-26°-W	2	
SK24	1.1×0.9	140~160	N-25°-W	3	
SK25	0.9×0.75	155~170	N-38°-W	3	
SK26	1.1×1.04	150~180	N-50°-W	3	
SK33	1.05×0.9	145~165	N-35°-W	3	
SK41	0.9×1.05	150~165	N-38°-E	3	
SK77	1.25×1.32	148~166	N-23°-W	3	逆木痕あり
SK78	1.15×1.22	150	N-60°-E	3	
SK79	1.1×0.93	172	N-22°-W	3	
SK81	0.9×0.8	100	N-33°-W	3	
SK82	1.3×1.2	171~172	N-89°-E	3	
SK83	1.0×1.1	143~145	N-30°-E	3	
SK87	1.47×1.3	151	N-14°-W	3	
SK88	1.12×1.08	160	N-8°-W	3	
SK92	0.72×0.8	116~124	N-89°-W	3	

第8表 貢ノ木遺跡土坑一覧



第66図 貢ノ木遺跡 土坑 1



SK92

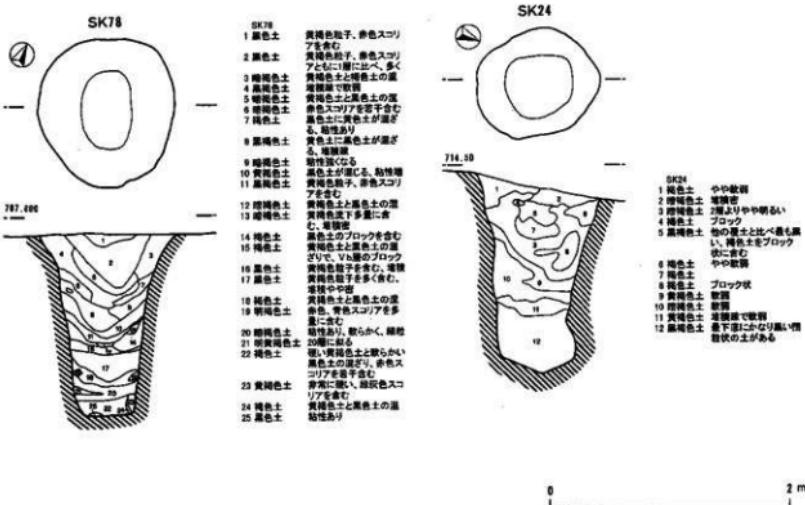
1 黒褐色土 黄褐色土を多く含む、粘性あり、粒状
2 黒褐色土 粘性、粘性なし、やや堅密
3 黑褐色土 疏通度でやや大きい、粘性ややあり、
4 にぶい黄褐色土 黄褐色子と黒色粒子の混合土、粘性
あり、堅密
5 黑褐色土 4層と見
6 黑褐色土 やや堅密、1層よりは無い、堅密で黄
褐色子がよくなる
7 黑褐色土 黄褐色土 黄褐色子を多く含む、粘性あ
り、やや堅密
8 にぶい黄褐色土 黄褐色土を多く含む、若干硬い
9 黑褐色土 黄褐色土を多く含む、若干硬い
10 にぶい黄褐色土 黄褐色土を多く含む、若干硬い
11 にぶい黄褐色土 黄褐色土を多く含む、若干硬い
12 にぶい黄褐色土 黄褐色土を多く含む、若干硬い
13 黑褐色土 黄褐色子を多く含む、黄褐色子を若干含む
14 にぶい黄褐色土 13層に比べ黄褐色土を多く含む

SK25

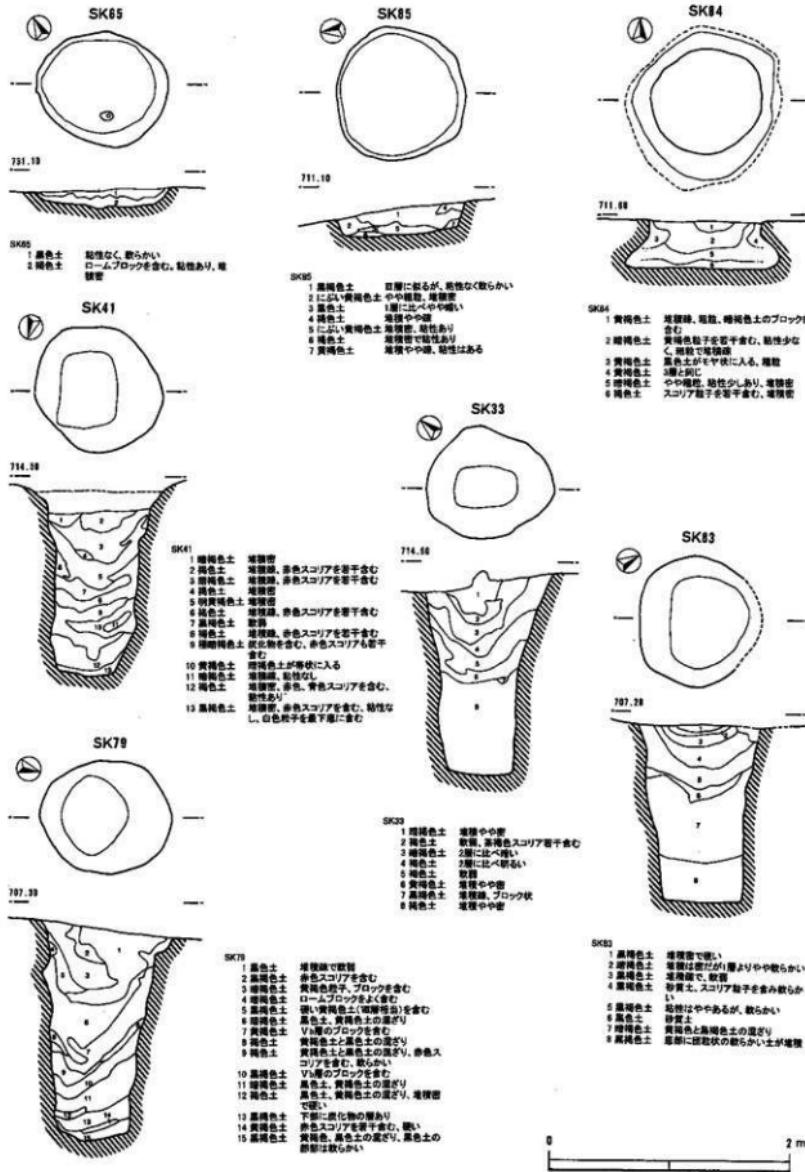
1 黑褐色土 黄褐色土を多く含む
2 黑褐色土 1層より黄褐色土を多く含む
3 黑褐色土 ブロック
4 黑褐色土 黄褐色土を多く含む、堅密
5 黑褐色土 黄褐色土を多く含む、堅密
6 黑褐色土 黄褐色土を多く含む、堅密
7 黑褐色土 黄褐色土を多く含む、堅密
8 黑褐色土 坚密度

SK26

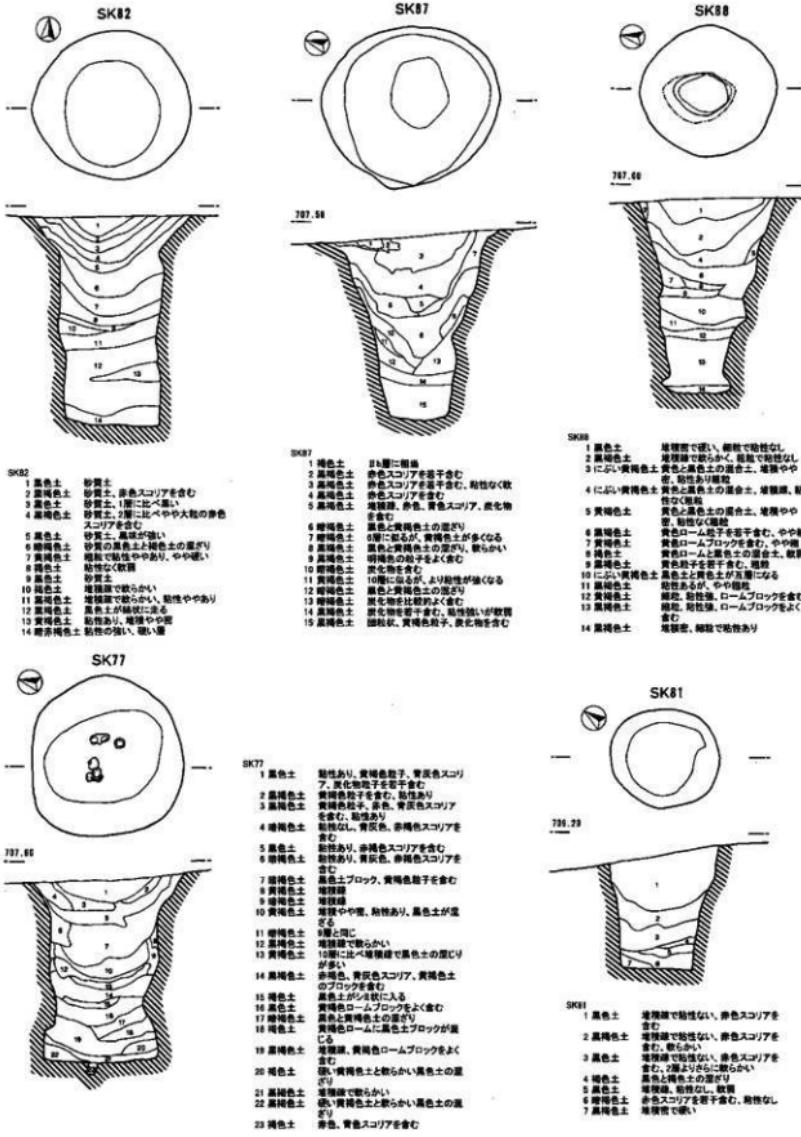
1 黑褐色土 黄褐色土を多く含む
2 黑褐色土 黄褐色土を多く含む
3 黑褐色土 ブロック
4 黑褐色土 黄褐色土を多く含む、堅密
5 黑褐色土 黄褐色土を多く含む、堅密
6 黑褐色土 黄褐色土を多く含む、堅密
7 黑褐色土 黄褐色土を多く含む、堅密
8 黑褐色土 黄褐色土を多く含む、堅密



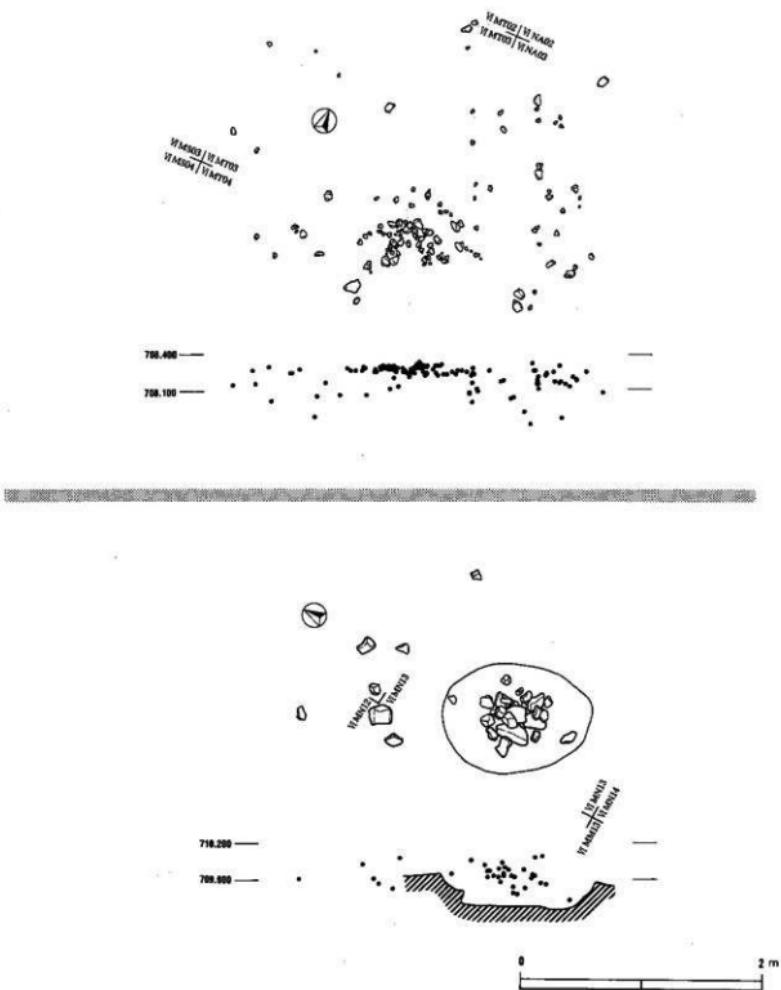
第67図 貢ノ木遺跡 土坑 2



第68図 貫ノ木遺跡 土坑 3



第69図 貫ノ木遺跡 土坑 A



第70図 實ノ木遺跡縄文時代集石

1) 土器

本調査区では量的には少ないが、縄文時代草創期（山内時期区分に従う）から同前期にかけての土器群が出土している。

第I群（第71図1～18・第75図119～121）

器壁の厚さが0.6cm前後と薄く、内面に指頭圧痕が残され、外面全面に縄文が施文される一群を本群とする。口縁部内面に縄文が施文されるもの（1類）とされないもの（2・3類）がある。

1類（1～8）は口縁部内面の縄文施文を特徴とする一群である。磨滅しているものもあるが、おむね口縁端部から約1.5～2cm幅で横位帯状に斜縄文が施文され、胴部内面にまで及ぶものはない。多くは単節斜縄文が施文されるが、5のようにその下位に縦走する縄文が一帯付加される例もある。

外面は口縁部から底部にいたるまで斜縄文が幾段か施文される。口縁端部に縄文が施文されるものとされないものがあり、前者の断面形は角頭状、後者は丸みをもつ。

全形を知りうる例はないが、1～3・8をみると口縁端部が短く「く」の字形に外反しており、4～7はゆるく外反し、胴部がやや張るように垂下し、底部はやや尖底や丸底になるものと思われる。

2類（9～18）は口縁部内面に縄文施文を持たない一群で、器形は1類と同様と考えられる。施文される縄文には単節斜縄文（9・13）、条が縦走する縄文（11・12）、同一原体を用いた羽状縄文（10・15～18）、異条の縄文（14）がある。

3類（119～121）は同一個体で縦位に単節斜縄文（R L）が施文され、粘土帶の接合部内面には指頭圧痕が認められる。石英粒を胎土に含み、器壁は0.8～0.9cmとやや厚い。

本類は表裏縄文系土器群である。表裏縄文系土器の変遷觀は確定しているとはいえないが、おむね内面全体に縄文が施文されるものが古く、少ないものは比較的新しいとされる（広瀬 1997）。この変遷觀に従えば、本類は口縁部内面にのみ認められる長野県飯山市三枚原遺跡例（木島平教育委員会 1977）と類似し、表裏縄文土器の中でも後出的なものと考えられる（長野県考古学会 1997）。

さらに、表裏縄文土器の縦年的な位置は確定しておらず、燃糸文系土器群成立以前に縦年する立場（戸田 1988）と燃糸文系土器群前半段階に併行する立場（宮崎・金子 1989）がある。前者の立場に立てば燃糸文系土器群成立直前、後者の視点にたてば燃糸文系土器群前半期とされようか。

第II群（第71図19～31）

燃糸文土器を本群とする。胎土中には若干の纖維が混入するが脆くはない。指頭圧痕が認められる31をのぞいて、内面は平坦に調整されている。

燃糸文は横走あるいは斜走して施文されるものが多いが、21は木目状燃糸文様のもの、31は縦走の燃糸文、28・29は部分的に縦走の燃糸文が施文されている。

なお、20・23・25～29は縄文原体がよく似ており、同一個体の可能性が高く、この個体は「口縁部が横位に施文され、胴部が縦位の異方向施文の文様構成をとり、軽じような胎土をもつ若宮型燃糸文土器」（宮崎・金子 1992）の特徴と類似する。三の宮遺跡の報告では「稻荷台式土器新から稻荷原式に若干かかる段階」としており、この段階に相当しよう。

第III群（第72図32～51）

押型文土器を一括する。量的にはきわめて少ないが、施文具から6類に細分することができる。

1類（32）は表面磨滅した平行四辺形の格子目文が密接施文される。原体長は約2.5cm。胎土は微量な繊維が含有する。器壁の厚さは約0.5cmである。32は格子目文の横位密接施文であり、口縁部以下異方向密接構成構成の立野式（馬場 1995）とは異なる。

2類（33）は山形文が施文され、原体端部の重なり合う部分は菱形となる。原体長は約2.5cm。胎土中に微細な砂粒が多く含まれ、脆い。器壁の厚さは約0.5cmと薄い。

3類（34）は無文帶を挟んでやや脚長の山形文と大粒な楕円文が施文される。原体長は不明。胎土は砂粒を含み、器壁の厚さは0.7cmである。

4類（35～44）は楕円文が密接施文される。器壁の厚さは0.4～0.8cmと幅があるが、0.6cm程度の薄手のものが多い。35～38、40、42の胎土には少量の繊維が含まれている。41は楕円文の中に小円形の窪みが認められる。小破片であるため詳細は不明。42は底部付近の破片で、本類の底部が尖底になる可能性が高いことを示している。

5類（45～47）は楕円文と平行条線文が組み合わさるものである。長野県山ノ内町上林中道南遺跡「押型文系土器d異形押型文土器A類」（長野県山ノ内町教育委員会他 1996）、新潟県卯ノ木遺跡「平行状線文」（中村 1963）に類例を認めることができる。平行条線文の原体端部は山状を呈する45と、平坦な46・47がある。

6類（48～51、125）は帯状の楕円文と変形綾杉文が交互に施文される。綾杉文を交互に刻した「複合鋸齒文」ともいうべきもの（48）、横位のもの（51）、縦位のもの（49、50）など変形綾杉文は多様である。原体長を計測できるものは48のみで、2.4cmを計測する。

125はほぼ全形を知りうる6類の好例である。横方向に施文された帯状の楕円、綾杉文が交互に3回繰り返され、底部にいたる。底部には楕円文が密接施文される。原体は長楕円文が3.0cm、綾杉文が3.5cmと長めである。推定口径24.4cm。

第三群は、焼成温度が低く胎土中に繊維を含む焼成温度の低い、横位密接施文で異種文様並列施文の塞ノ神式（会田・中沢 1997）に類似点が多く、早期中葉（押型文期後半）に位置づけられよう。

第IV群（第73・74図52～88、第76図127～131）

沈線と貝殻腹縁文によって、口縁部文様帶に鉤の手入組み文のモチーフ等を中心とした複雑な文様が施文されるものを本群とした。胸部文様帶をもつもの（1類）とないもの（2類）がある。

1類（71～74・127・128）71・72は同一個体である。1類の胸部文様には口縁部文様と同様の明確でない組み状文が施文されるもの（71・72）、交差させた文様が施文されるもの（73・127・128）、縦区画して鉤の手入組み文のが施文されるもの（129）がある。

2類（52～70・75～87、130・131）は、貝殻腹縁文を平行沈線文の間に配したもの（52～56・75～88）、鉤の手入組み文や鋸齒文で貝殻腹縁文が廻されたもの（57～65・120・125）、貝殻腹縁文の上に太目の沈線文や波状文を施文した頸部付近のもの（66～69）などがある。

豊田村月夜岳遺跡（高橋 1963）、木島平村三枚原遺跡（木島平村教育委員会 1987）、飯山市新堤遺跡、鳴沢頭II遺跡、下境大原遺跡（飯山市教育委員会 1991・1992）などの周辺にも断片的ではあるが類例をみることができ、早期中葉の田戸上層式併行期の土器群ではないかと考えられる。

また、S Q03では楕円押型文、異種併存押型文（塞の神式）と71～74の土器はほぼ同一層位から出土しており、編年的位置づけに課題をのこす。

第V群（第76図126）

太目の沈線による直線文、波状文が施文される。早期中葉の土器で第IV群の土器より若干後出のものと思われる。

第VI群（第74図89～98）

刺突文のある土器群を一括する。施文工具の違いで2分類する。

1類（89～92）は櫛歯状工具による細沈線と棒状工具の刺突文である。89～92は同一個体。長野県中野市がまん淵遺跡縄文時代第III群土器（鶴田 1997）、茅野市判ノ木西遺跡第3類（小林 1981）に類似し、「ほぼ田戸上層式併行もしくはそれに後続する段階」の土器群（鶴田 1997）と考える。

2類（93～98）は「く」の字状の連続刺突文である。文様が刺突文と沈線文と異なるものの、岐阜県根方岩陰（関野 1988）、福島県塙喰岩陰（福島県教育委員会他 1994）などで出土している田戸上層式の古い段階の土器群の文様モチーフに類似している。

第VII類（第74図99～102）

無文土器を一括する。99、100は同一個体と思われ、口唇部は円頭形を呈し、内外面とも丁寧なナデ調整が認められる。101は石英細粒が大量に含まれる。102は器壁の厚さが薄く、内面に若干の指頭圧痕が認められ、石英粒と長石粒が胎土に含まれる。99・100は縄文早期中葉平坂式（原田 1991）と類似するが101・102は類例を求めることができなかった。

第VIII類（第75図103～106）

同一個体と思われる一群で、半裁竹管による縱方向の条線文が施文される。多量の粗い砂粒が胎土に含まれ、器壁は0.5cmと薄い。時期は縄文早期後半であろうか。

第IX群（第75図107～110）

縄文早期後葉条痕文系土器群を一括する。107は表裏とも条痕文が地文として施文され、頸部に絡条体圧痕が施文される。長野県牟礼村丸山遺跡（長野県史刊行会 1998）に良好な類例がある。

108～110は絡条体条痕文が施文される。

第X群（第75図111～118、122、第76図132）

内面指頭圧痕のないヘラナデやナデ調整されている縄文前期前半の羽状や斜縄文の土器を一括する。

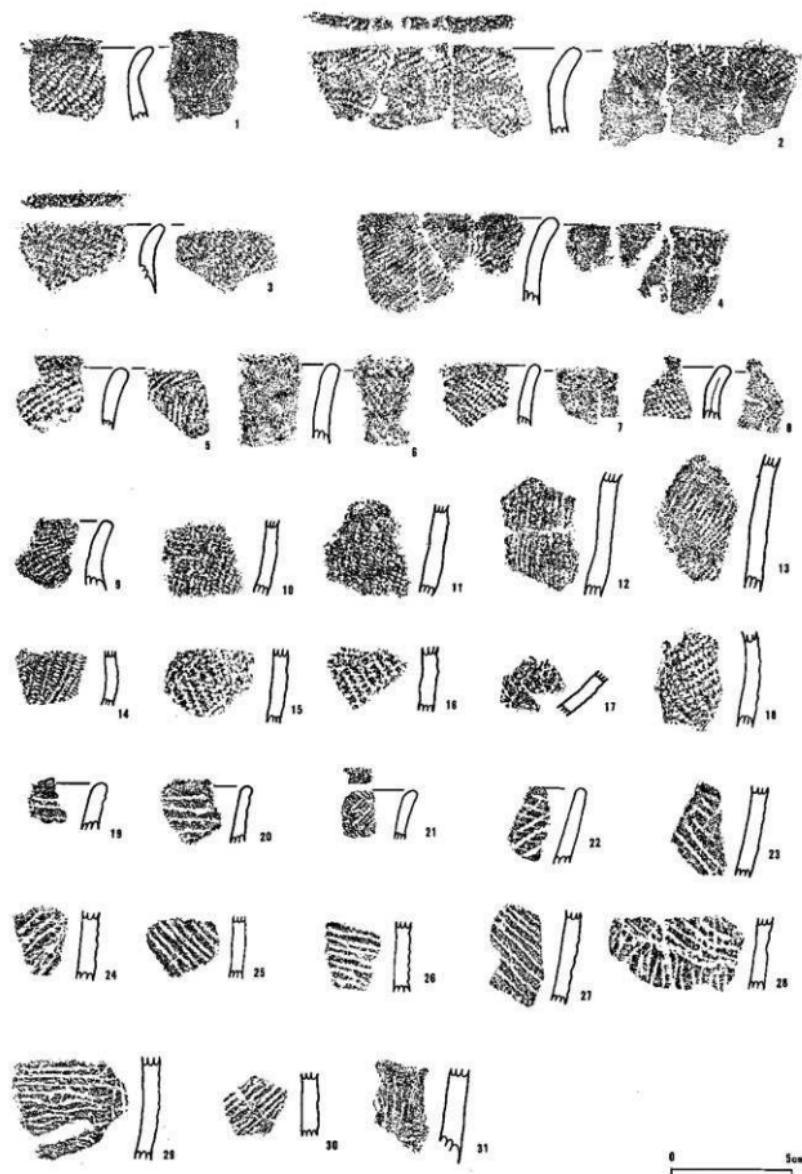
118～118は同一個体である。繊維を含有しない内面ヘラナデ調整された黒浜式併行の羽状縄文である。

122は前期前半の複節縄文の土器である。

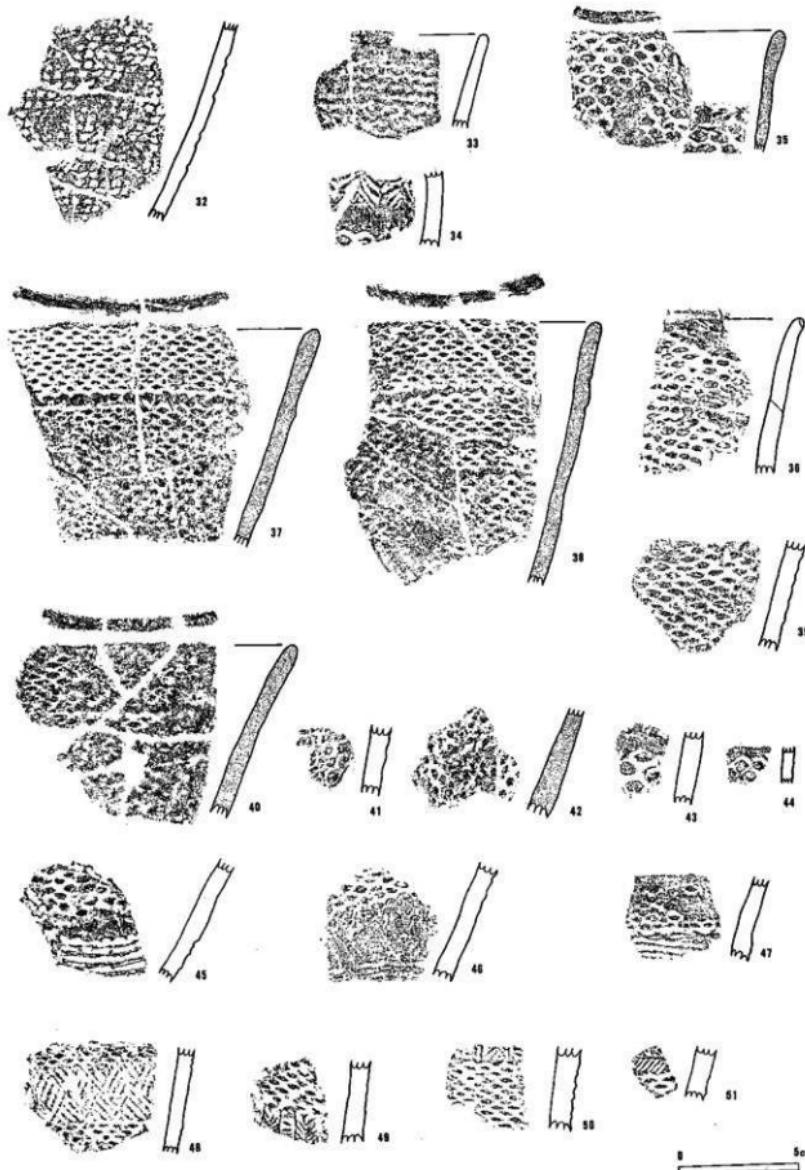
132は有段の頸部と口唇部下に縄文側面圧痕で刻みが巡る、結節羽状縄文の土器。器壁は0.6cmで薄く、胎土は繊維が含有し、灰色に近い色調である。推定口径は32cm。

第XI群（第75図123・124）

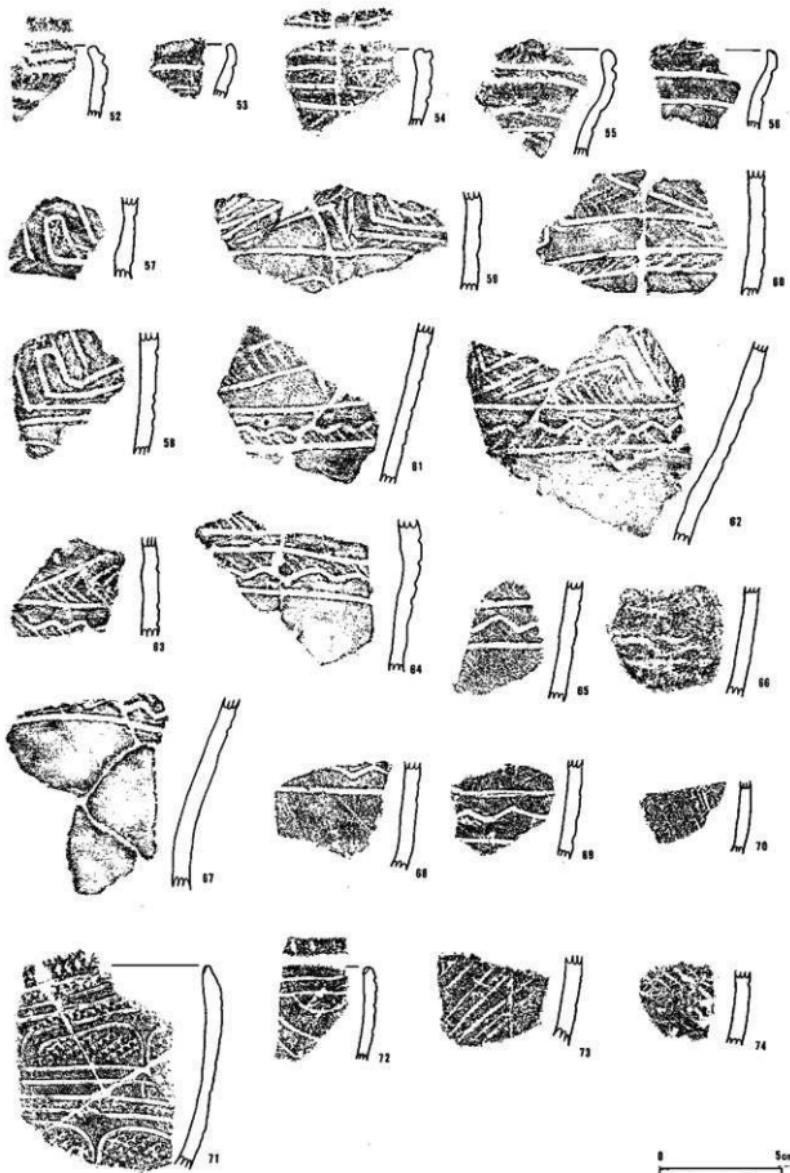
この群は半裁竹管で沈線文が施文された土器（縄文前期後半期）を一括する。123は波状口縁をもつ深鉢形土器の破片で、0段多条の羽状縄文を地文とし、半裁竹管による縱形の重ねた木の葉のような文様が施文される。123は大倉崎遺跡の上原式新段階の土器（百瀬 1988）に類似する。124は半裁竹管による集合平行沈線文を地文に浮線文が施文される。124は諸磯b式に併行しよう。



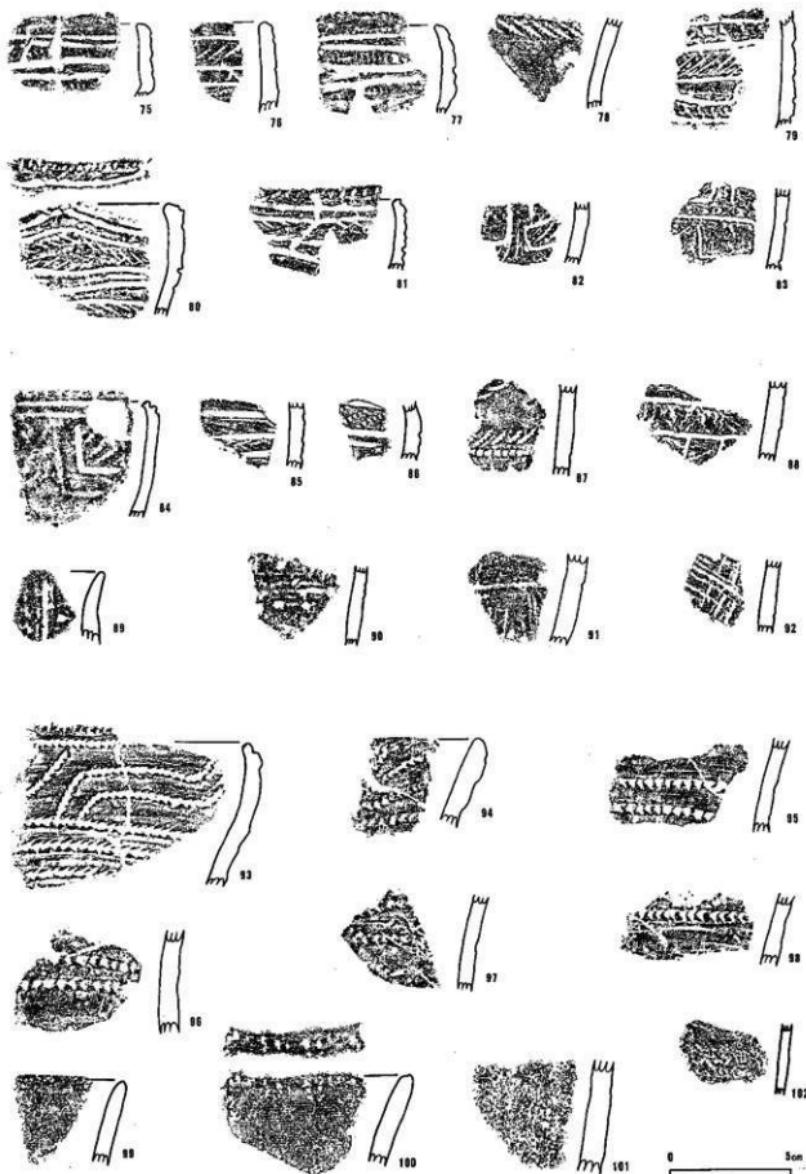
第71図 實ノ木遺跡 繩文時代土器 1



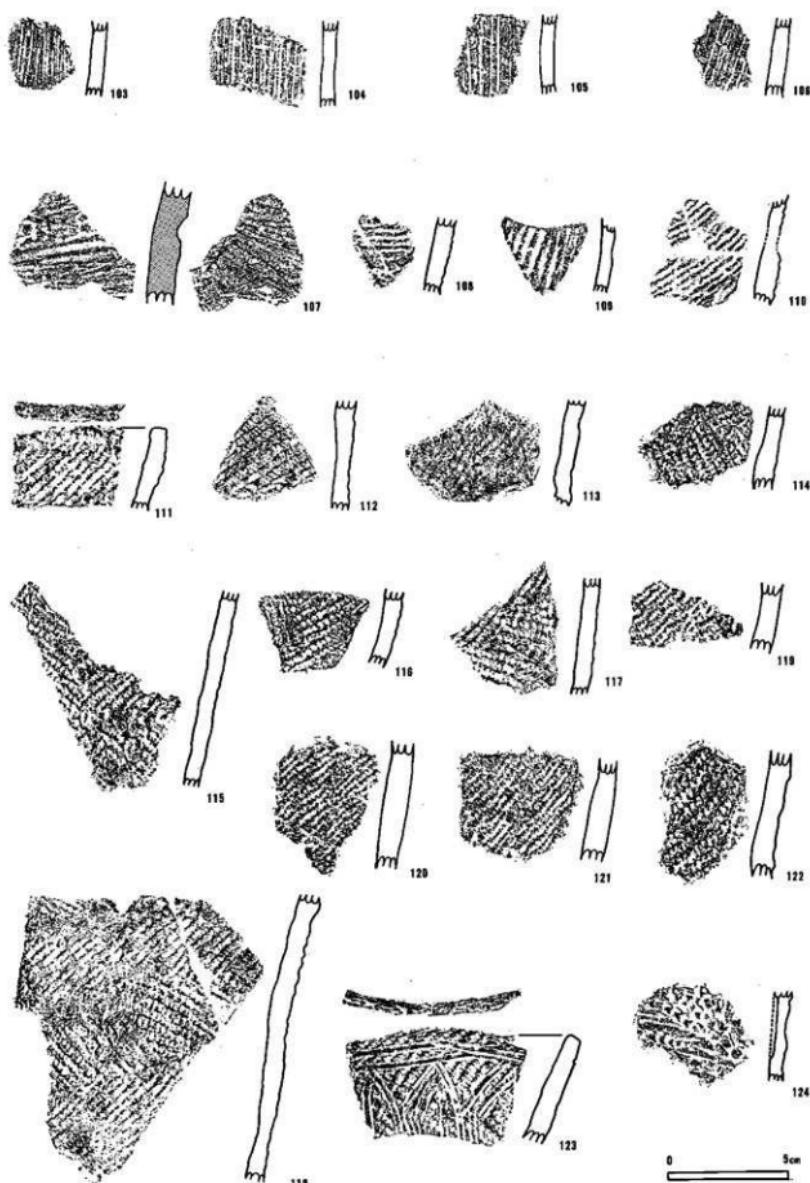
第72図 貫ノ木遺跡 繩文時代土器 2



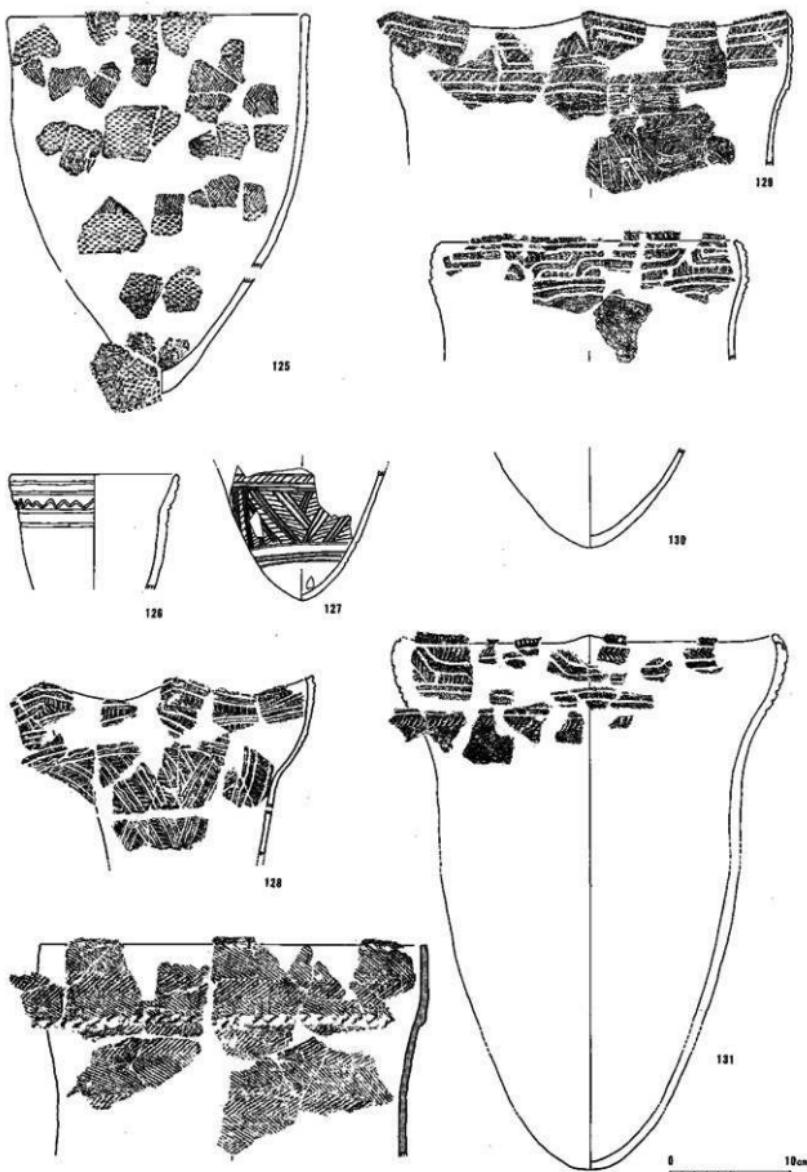
第73図 貫ノ木遺跡 繩文時代土器 3



第74図 貫／木遺跡 繩文時代土器 4



第75図 貫ノ木遺跡 繩文時代土器 5



第76図 貫ノ木遺跡 繩文時代土器 6

第9表 貫ノ木遺跡出土土器觀察表1

第10章 萬ノ木遺跡出土主體觀察表 2

番号	調査区分	遺物番号	遺物名	所持部位	表面状況	文様・模様・特徴	分類	時期	出土	地質	色調(目)	色調(PM)	備考
95		SQ11	SQ-11-23	II c 腹部	ナメ	朝夷文。	素面2類	縄文早期中葉	砂粒・心窓・微細な心窓・凹窓。	黑	灰白色	灰白色	
96		SQ11	SQ-11-27	II c 腹部	ナメ	朝夷文。	素面2類	縄文早期中葉	砂粒・心窓・微細な心窓・凹窓。	黑	灰白色	灰白色	
97		SQ11	SQ-11-23	II c 腹部	ナメ	朝夷文+縁い比叡文。	素面2類	縄文早期中葉	砂粒・心窓・微細な心窓・凹窓。	黑	灰白色	灰白色	
98		SQ11	SQ-11-21	II c 腹部	ナメ	朝夷文。	素面2類	縄文早期中葉	砂粒・心窓・微細な心窓・凹窓。	黑	灰白色	灰白色	
99	V-M	V-M-66	III 口縁	ナメ	無文。	漆塗。	漆塗	縄文中期中葉	砂粒・瓦窓・石斑・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	
100	V-M	V-M-62	III 口縁	不規	無文+口縁剥りみ切り。	漆塗	縄文中期中葉	砂粒・瓦窓・石斑・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色		
101	V-G	V-G-1364	II 細部	腹周囲	無文。		漆塗	縄文早期中葉	砂粒・石斑・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	
102	V-D	V-D-99	-A5 捺印	腹周囲	無文。		漆塗	縄文早期中葉	砂粒・白色(白色)・多點。	無	灰白色	灰白色	12.2.21
103	V-M	V-M-885	II 腹部	ナメ	無文(牛頭竹管による)	漆塗	縄文中期中葉	砂粒・瓦窓・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色		
104	V-M	V-M-886	II 腹部	ナメ	無文(牛頭竹管による)	漆塗	縄文中期中葉	砂粒・瓦窓・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色		
105	V-M	V-M-915	II 腹部	ナメ	無文(牛頭竹管による)	漆塗	縄文中期中葉	砂粒・瓦窓・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色		
106	V-M	V-M-897	II 腹部	ナメ	無文(牛頭竹管による)	漆塗	縄文中期中葉	砂粒・瓦窓・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色		
107	V-R	V-R-3558	II 腹部	貝合	無文系条文・施本体庄田文	漆塗	縄文中期後葉	砂粒・心窓・微細な心窓・凹窓。	合符	灰白色	灰白色		
108		SQ04	SQ-04-9-13	II a 腹部	施周囲	無条件文模様	素面2群	縄文早期後葉	砂粒・瓦窓・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	
109	V-H	V-H-464	II 腹部	施周囲	無条件文模様	漆塗	縄文早期後葉	砂粒・瓦窓・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色		
110		SQ03	SQ-03-21	II a 腹部	施周囲	無条件文模様	漆塗	縄文早期後葉	砂粒・瓦窓・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	
111		SQ05	O	II 口縁	ナメ	下口縁・無文(LEL)・横位置施文・施周囲10号・施2號。	漆塗	縄文初期の前	砂粒・瓦窓・小窓が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	高麗時代行期
112		SQ05	SQ-05	II a 腹部	ナメ	低級施文(LEL)・横位置施文。	漆塗	縄文初期の前	砂粒・瓦窓・小窓が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	高麗時代行期
113		SQ05	SQ-02-03	II a 腹部	ナメ	低級施文(LEL)・横位置施文。	漆塗	縄文初期の前	砂粒・瓦窓・小窓が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	高麗時代行期
114	V-D	V-D-103	II a 腹部	ナメ	無条件文(LEL)・横位置施文。	漆塗	縄文初期の前	砂粒・瓦窓・小窓が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	高麗時代行期	
115	SQ06	SQ-02-03	II a 腹部	ナメ	無条件文(LEL)と(LEL)の横位置施文。	漆塗	縄文初期の前	砂粒・瓦窓・小窓が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	高麗時代行期	
116	V-D	V-D-104	II a 腹部	ナメ	無条件文(LEL)・横位置施文。	漆塗	縄文初期の前	砂粒・瓦窓・小窓が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	高麗時代行期	
117	SQ06	SQ-03	II a 腹部	ナメ	無条件文(LEL)・横位置施文(LEL)・横位置施文。	漆塗	縄文初期後葉	砂粒・瓦窓・小窓が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	高麗時代行期	
118	SQ06	SQ-02-4-3	II b 腹部	ナメ	低級施文(LEL)と(LEL)を横位置に施す。	漆塗	縄文初期後葉	砂粒・瓦窓・小窓が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色		
119	SQ04	SQ-04-12	II b 腹部	ナメ	無条件文(LEL)・横位置施文内面に施す。	漆塗	縄文初期後葉	砂粒・瓦窓・小窓が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色		
120	SQ04	SQ-04-1	II b 腹部	ナメ	無条件文(LEL)・横位置施文・施周囲内面に施す。	漆塗	縄文初期後葉	砂粒・瓦窓・小窓が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色		
121	SQ04	SQ-04-3	II b 腹部	ナメ	無条件文(LEL)・横位置施文・施周囲内面に施す。	漆塗	縄文初期後葉	砂粒・瓦窓・小窓が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色		
122	V-B	V-B-337	II 腹部	ナメ	最終段の3段階施文。	漆塗	縄文初期前葉	砂粒・瓦窓・小石が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色		
123	V-D	V-D-1425	II a 口縁	ナメ	段落の1.2の間に施す文とし、段落1.3と段落2.3を含む文。	漆塗	縄文初期前葉半	砂粒・瓦窓・小石が多點・微細な心窓・凹窓。	無	黑褐色	黑褐色		
124	SQ11	SQ-11-3	II 腹部	ナメ	高麗時代地文・横位置施文。	漆塗	縄文中期後葉	砂粒・瓦窓・小石が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色		
125	NQ11	SQ-11-59	II c 腹部	ナメ	ナメ	無条件文(LEL)・横位置施文。	漆塗	縄文中期後葉	砂粒・瓦窓・小石が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	
126	V-D	SQ02	SQ-0-2	II c 口縁	ナメ	骨壺頭の大きい4本の施文様の間に施す。	漆塗	縄文中期後葉	砂粒・瓦窓・小石が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	
127	SQ06	SQ-02-7	II c 腹部	ナメ	ナメミヨヒ。	無条件文(LEL)・横位置施文内面に施す。	漆塗	縄文中期後葉	砂粒・瓦窓・小石が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	
128	SQ06-09	SQ-09-214	II c 口縁	ナメ	ナメミヨヒ。	無条件文(LEL)・横位置施文内面に施す。	漆塗	縄文中期後葉	砂粒・瓦窓・小石が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	
129	SQ16	SQ-16-28-29	II c 口縁	ナメ	ナメ	無条件文(LEL)・横位置施文(LEL)・横位置施文。	漆塗	縄文中期後葉	砂粒・瓦窓・小石が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	
130	SQ01	SQ-01-15	II c 腹部	ナメ	ナメ	無条件文+比叡文(縦線)・口縁内面に施す。	漆塗	縄文中期後葉	砂粒・瓦窓・小石が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	
131	SQ06	SQ-06	口縁	ナメ	ナメ	無条件文(LEL)・横位置施文内面に施す。	漆塗	縄文中期後葉	砂粒・瓦窓・小石が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	
132	SQ07	SQ-07	II 中位	口縁	ナメ	無条件文(LEL)・横位置施文内面に施す。	漆塗	縄文中期後葉	砂粒・瓦窓・小石が多點・微細な心窓・凹窓。	無	灰白色	灰白色	

第11表 貢ノ木遺跡出土土器観察表3

2) 石器

繩文時代の包含層は第Ⅰ層～第Ⅲ層と考えられるが、旧石器時代の遺物も混入している。ここでは土器集中(SQ)からの出土であったり、明らかに繩文時代の所産と考えられるものに限って掲載した。

有茎尖頭器(第77図1)

VI-S区からの単独出土である。層位もIV層と、並示している石器や野尻湖周辺で土器と有茎尖頭器を伴う星光山荘B遺跡よりも下層からの出土となっている。斜状並行剝離が施された後、側縁を鋸歯状に仕上げている。基部最大径からのびる直線的な茎部をもつ。形態から土器を伴わない時期の所産とも考えられるが、単独出土のため、繩文時代の石器として扱った。無斑晶質安山岩製。

石錐(第77図2～5)

石錐は4点を図化している。これらは大きく2種類に分けることができる。一つは凹基無茎(2・3)であり、もう一つは平基無茎の三角形錐(4・5)である。凹基無茎の二つはどちらも黒曜石製であり、全面を丁寧な押圧剝離が覆っているため素材の形状は定かではない。形態的に齊一性が高い。4は珪質頁岩製である。正面左方向からの連続した加撃により得られた素材のバルブを除去し、周縁の簡単な調整により形づくりかれている。5は正面上方からの連続した加撃による剝片を素材とし、簡単な周縁調整で三角形に仕上げかれている。このように丁寧な押圧剝離を施された凹基無茎錐と、素材の形状を大きく残す三角形錐が認められるが、こうした材質・加工・形状の差が何に起因するものかは不明である。

スクレイパー(第77図6・7)

6は縦長の剝片を素材とし、裏面からの調整で水滴形に整えられている。形態的に東北地方によくみられる石笛、管状石器と呼ばれているものによく似ている。裏面下部には、使用痕と思われる光沢が認められる。機能部と考えられる下縁はつぶれが顕著で、ある程度の硬度をもつものへの使用が想定される。7は縦長素材の打点部を除去し縁辺に加工を施して刃部としたものである。刃部はゆるい弧状をなす。石器下部は一部裏面からの調整も行われて茎状に作出されている。6・7ともに珪質頁岩製。

三角錐形石器(第77図8)

大きな平坦な剝離を石器裏面とし、そこからの急斜度の調整によって断面が三角形になるように仕上げられている。三角形の稜線上は握りやすくするために、つぶれたようになっている。正面下部の大きな剝離面にも裏面からの剝離が入る。ここが機能部と考えられる。

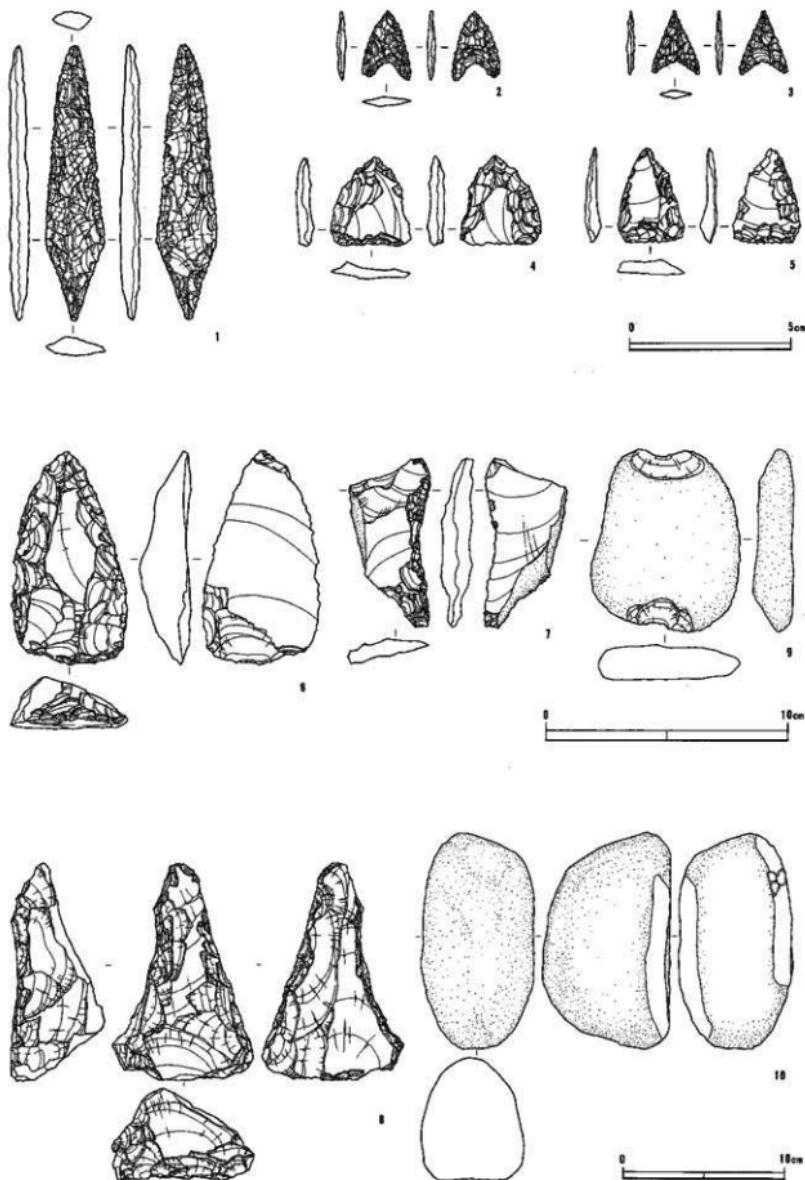
スクレイパー的なものであろうか。撚糸文期に北関東を中心に分布する「三角錐形石器」(石坂・岩崎1988)と呼ばれているものの範疇に入るものである。無斑晶質安山岩製。

石錐(第77図9)

扁平な安山岩の礫を素材とし、裏面からの加撃により縄かけ部を作出した打ち欠き石錐である。石材の質が悪く風化が進んでいるため、粗ずれ痕等、使用の痕跡を認めるることは難しい。

特殊磨石(第77図10)

断面山形の亜円礫を用い、底面に接する稜を磨り面としている。磨り面は稜状長軸方向に2条みられる。一部につぶれがある以外は、敲打の痕跡は認められない。押型文に伴う特徴的な石器である。



第77図 貫ノ木遺跡縄文時代石器実測図

1) 土器参考文献

- 飯山市教育委員会 1991 「新堤遺跡・トノ池南遺跡 国営農地開発関係発掘調査報告！」
- 飯山市教育委員会 1992 「鳴沢頭Ⅰ・鳴沢頭Ⅱ・カササギ野池・休場・下境大原遺跡 国営農地開発関係発掘調査報告Ⅱ」
- 神村 透 1983 「立野遺跡」『長野県史』考古資料編全1巻(3) 長野県史刊行会
- 金子直行 1988 「草創期終末の土器群に関する覚え書き」『埼玉考古』第24号
- 木島平村教育委員会 1977 「三枚原遺跡」
- 小林秀夫 1981 「第II章 茅野市羽ノ本山西遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財公募地発掘調査報告書』茅野市・原村その3
- 関野哲夫 1988 「静岡県下の押型紋段階の様相」『帝塚山考古学研究所シンポジウム資料 繩文早期を考える—押型文化の諸問題—』
- 高橋 桂 1963 「北信月夜岳遺跡調査略報」『信濃』15-3
- 鶴田典昭 1997 「まとめ がまん源遺跡縄文時代Ⅲ群土器について」「がまん源遺跡」上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13
- 長野県埋蔵文化財センター
- 戸田哲也 1988 「衣裏繩文土器についての所感」『埼玉考古』第24号
- 中島宏 1991 「表裏繩文系土器群の研究」『埼玉考古学論集1991』埼玉考古学会
- 長野県考古学会 1995 「—表裏繩文から立野式へ—」『長野県考古学会誌』77・78
- 長野県史刊行会 1988 「長野県史」考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物
- 長野県南ノ内町教育委員会他 1996 「上林中道南遺跡 Ⅲ」
- 中村孝三郎 1963 「卯ノ木押型文遺跡・貝坂遺跡」長岡市立科学博物館
- 原田昌幸 1991 「撫糸文系土器物式」考古学ライブラリー61 ニュー・サイエンス社
- 広瀬昭弘 1977 「三枚原遺跡」木島平村教育委員会
- 広瀬昭弘 1995 「表裏繩文土器研究の課題と編年の位置」『長野県考古学会誌』77・78 衣裏繩文から立野式へ
- 福島県教育委員会他 1994 「六郎次遺跡 塩喰岩陰遺跡」東北横断自動車道遺跡調査報告25
- 宮崎朝雄・金子直行 1989 「井草式土器及び周辺の土器群について」『研究紀要』第5号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎朝雄・金子直行 1992 「若宮遺跡出土土器群の再検討—静岡県東部における押型文系土器群の出現と展開—」『研究紀要』9 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮下健司 1988 「縄文早期の土器」『長野県史』考古資料編 全1巻(4)
- 百瀬新治 1988 「II 2 縄文土器(4) 縄文前期の土器 前期V期」『長野県史』考古資料編全1巻(4)
- 山内清男 1969 「繩紋草創期の諸問題」『MUSEUM』第224号

2) 石器参考文献

- 石坂茂・岩崎泰一 1988 「撫糸文文化における石器群の一様相—スタンプ形石器と三角錐形石器を中心として—」『研究紀要』5 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木道之助 1991 「石器入門事典 縄文」
- 町田勝則 1996 「石器の研究法」『長野県の考古学 長野県埋蔵文化財センター研究論集』I
- 八木光則 1976 「いわゆる「特殊磨石」について—中部地方における縄文早期の石器研究への問題提起—」『信濃』第40巻第5号

第3章 西岡A遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

西岡A遺跡は、長野県上水内郡信濃町大字野尻字傳九郎1521-1他に所在する。本遺跡は、野尻湖の西から南西方向に次第に標高を増していく仲町丘陵の最南端に位置し、隣接して東側に貫ノ木遺跡が広がるが、貫ノ木遺跡よりも一段低い西向きの緩斜面にある。野尻湖までの距離は約2kmほどである。標高は685m前後である。

本遺跡は、過去に発掘調査歴がなく、遺跡の詳細な情報はなかったが、隣接して野尻湖発掘調査団によって調査がされていた貫ノ木遺跡の状況などから、旧石器時代を中心とした遺跡であることは予想されていた。また、今回の調査の前年にあたる1993年には東方200mにある西岡B遺跡において宅地造成に伴う事前調査が信濃町教育委員会によっておこなわれ、斧形石器をはじめ旧石器時代の遺物が発見されていた。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法

前項でも述べたように、西岡A遺跡は遺跡情報が少なかったため、事前に県教委・町教委によって試掘調査を行い、遺跡の範囲を確定していった。調査区の設定については隣接する貫ノ木遺跡と同時にい、大々地区の呼称も両遺跡で通しにした（P 6 第2図参照）。バイパス建設予定地の大々地区は、IX・X・XIV・XVの4区画であった。

X区は、貫ノ木遺跡と本遺跡との境界部分にあたり、急斜面であったが、表土層より石器類が若干採集されたので、重機によりトレンチ調査をおこなった。トレンチは、幅を2mとし、バックフォーにより、表土および黒色土を除去後、ジョレンによる精査をし、遺構・遺物の検出作業を行い、遺物等が見られなかった場合は、再度重機により数cmずつ掘り下げては、ジョレンによる精査を繰り返し行い、最終的にはⅦ層の上面（約4万年前の黒姫火山のスコリア層）まで掘り下げたが、包含層から遺物を検出することはできなかった。

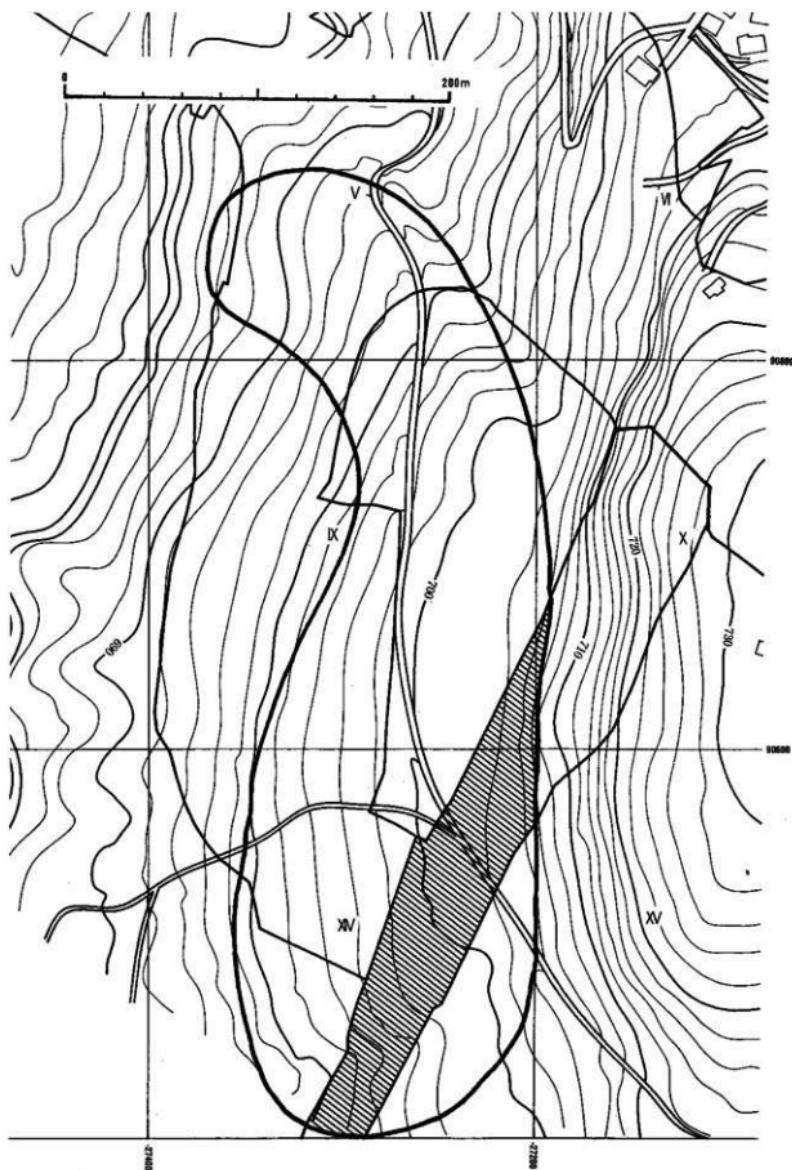
IX・XIV・XV区が平坦な地形であり、町教委による試掘でも遺物が発見されていたため、新たなトレーナー調査は遺跡の南端にあたるXIV区の最南端で一部行ったのみで、基本的には調査対象範囲を面的に広げて調査を行っていった。重機により表土及び黒色土除去後、Ⅲ層上面よりジョレンを用い精査を行っていった。原則としてVb層まで精査を行って、遺物が検出されなくなつてから、下層の文化層を確認するため、部分的に重機を用い、試掘坑を設けていった。

(2) 調査経過（調査日誌抄）

平成6年度

8月9日 貫ノ木遺跡との境を確認するため、斜面部に重機によるトレンチ調査開

始。バイパス用地内の西岡A遺跡の調査開始となる。貫ノ木遺跡寄りの斜面



第78図 西岡A遺跡調査区

	上部より下部に向かってトレンチを入れる。		群にはなりそうもない。
8月22日	トレンチ内からの遺物は検出されない。	10月14日	X IV-J区において剝片出土。遺物はきわめて希薄で、遺跡の周辺部にあたると考えられる。
8月23日	重機によるトレンチ調査終了。	11月20日	X IV-S区でIII層中より赤化疊が確認される。
8月25日	空測・空撮を実施。トレンチの設置状況の記録を行う。	11月28日	X IV-S区出土の疊は疊群と認定し調査を進めるが、疊の密集度はあまりなく、散漫な分布状況をしめす。
8月26日	XIX-X区北側より重機による表土削ぎを開始する。	12月8日	調査範囲の測量調査(9日まで)。
9月1日	ジョレンによる精査開始。	12月9日	発掘調査終了。
9月12日	調査範囲は順次XIV区へ移行。		
9月28日	X IV-E区より疊が出土するが、疊		

(3) 調査結果の概要

今回の調査対象範囲における遺物の出土は希薄であった。旧石器時代の遺物はXIV-D区より疊1点、XIV-E区より疊3点、XIV-I・J区にかけて無斑晶質安山岩製の剝片が3点が散在していた。いずれも出土層位はIV層であった。また、さらに南の調査区であるXIV-S区からはIII層中より疊が18点出土した。密集した分布状況ではなく、直径約10mの範囲に散在していたが、疊は赤化していることから疊群としてとらえた。III層の疊群なので縄文時代の所産とも考えられる。他に縄文時代の遺物として、砂岩製の石棒1点がXIV-D区より単独出土した。

隣接する高速道の調査地区では旧石器時代の遺物集中（ブロック）が、IV層中から數ヵ所確認されている。バイパス用地内ではブロックは検出されず、遺物が散在していた状況であった。おそらくは、遺跡の縁辺部にあたり、遺物が比較的希薄な地区だったと考えられる。

(4) 基本土層

西岡A遺跡の土層は、貫ノ木遺跡台地部の土層と同じであった。したがって層序名とその特徴については第2章第1節（4）を参照されたい。

第4章 まとめ

野尻バイパスに建設に伴って発掘調査された貫ノ木遺跡・西岡A遺跡の成果と課題を以下に示し、報告書のまとめとする。

1 貫ノ木遺跡

1) 自然科学分析の成果

黒耀石産地同定分析 沼津工業高等専門学校望月明彦助教授に委託して分析をおこなった。方法はエネルギー分散蛍光X線分析法をもちい、遺物は非破壊で分析し、56点の黒耀石製遺物の産地が推定できた。結果は、すべて信州産で、和田峰系が35点と一番多く、霧ヶ峰系が20点、麦草系が1点であった。出土傾向をみると和田峰系はⅢ～Vb層まで出土しているが、V層が多いのに対して、霧ヶ峰系はⅢ～IV層とより上層に出土する傾向がある。Vb層主体の日向林B遺跡はほとんどが和田峰系になる。おそらく和田峰系から霧ヶ峰系への時間的変遷がたどれるものとおもわれる。

放射性炭素年代測定 遺物が多数出土したVb層中から検出した炭化物片を、㈱パレオ ラボに委託して加速器質量分析法により年代測定をおこなった結果、以下のような年代がえられた。

VI-N 311 Vb層 32,260年±590年B.P

VI-N 312 Vb層 32,110年±610年B.P

残存脂肪酸分析 VI-S区SH58の疊1点に黒色のタール状の付着物が認められたため、㈱ズコーシャに委託して分析を行った結果、残存している脂肪はイヌ、タヌキのような動物やマガモ、モズ、ツグミなどのような野鳥の脂肪とよく類似していることが判明した。

2) 旧石器時代の石器群について

石器群の特徴 本遺跡から出土した主要な石器は、台形様石器、斧形石器、砥石、ナイフ形石器、槍先形尖頭器などがあり、複数の石器文化が存在していたことは確実である。では、いったいいくつの石器文化が残されたのであろうか。P20第3表の出土層位に着目すると、器種によって出土層位に偏りがあることが看取される。Va層とVb層の出土量を比較した場合、Vb層になると出土量が大幅に減少してしまう器種に、ナイフ形石器、搔器、彫器、楔形石器があり、Va層・Vb層とともに、そう変化がない器種として台形様石器、斧形石器がある。また、IV層とV層で違う石器に槍先形尖頭器がある。これらをまとめると、①Vb層には台形様石器、斧形石器を主体に若干のナイフ形石器をもつ石器文化、②Va層には台形様石器、斧形石器、ナイフ形石器を組成としてもつ石器文化、③Va層でナイフ形石器、搔器を組成としてもつ石器文化、④IV層の槍先形尖頭器を特徴とする石器文化が指摘できそうである。さらに③・④は細分の可能性が十分に考えられるので、本遺跡では約3万年前から約1.2万年前の上部旧石器時代の期間に4つ以上の石器文化（文化層）があったことが想定されよう。

遺跡の構造 疋群の出土層位も一様でなく、上記の石器文化にそれぞれ対応しそうである。石器の集中部であるブロックにも規模その他にバラエティーが認められる。しかしながら、日向林B遺跡に見られるよ

うな環状を呈するブロック群は認められない。日向林B遺跡とは性格が違う遺跡であったと思われる。その違いの詳細な検討は、本書のバイパス調査区に隣接する高速道の調査区の成果と合わせながら最終的な解釈を行いたい。ここでは遺跡の構造に違いが想定できることを指摘するにとどめておく。

3) 繩文時代の遺構と遺物について

今回の調査区では草創期から早期にかけての良好な資料をえることができた。遺構として検出したものは陥し穴が多く、遺物との関連が希薄ではあるが、繩文時代の遺物がほぼ早期に限られることから当該期の遺構として捉えることには問題はないと考える。いわゆる住居跡を伴わない繩文時代遺跡の一様相が明らかになったといえよう。

2 西岡A遺跡

今回の調査対象地区は西向きの平坦な地形であったにもかかわらず、遺物の出土は希薄であった。しかし、西側に隣接する高速道の調査区において、旧石器時代の遺物は多数発見されている。一方、北東側に隣接する貫ノ木遺跡の地形的に平坦な場所は、ほぼ全域に渡って遺物が密集して検出される。貫ノ木遺跡と西岡A遺跡との標高差は約10mあり、貫ノ木遺跡のほうより高所に立地する。遺跡の存続期間も、貫ノ木遺跡は約3万年前から約1.2万年前まで上部旧石器時代の各時期の石器群が累積的に密集して検出されたのに対し、西岡A遺跡は一時的な遺跡、特にAT降灰以降の石器群が比較的小規模なまとまりをもってひろがっている（高速道の調査地区が中心）。隣接するこの2つの遺跡は対照的な遺跡の成り立ちを示しているといえよう。西岡A遺跡の今回の調査範囲はおそらく遺跡範囲の縁辺部にあたったため、遺物の出土量は少なかったが、さまざまな遺跡構造をもつ旧石器時代遺跡の1面を示す資料であった。

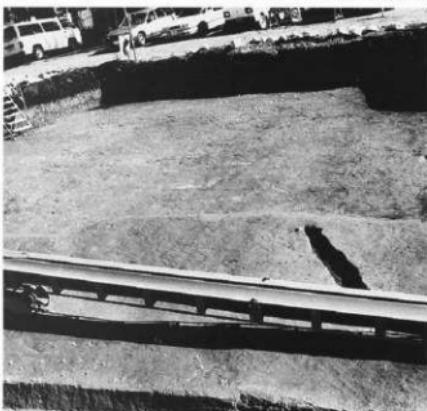
3 野尻湖周辺の旧石器時代遺跡群について

本書で扱ったバイパス建設に伴う調査と、高速道建設に伴う調査を合わせると、9遺跡で約70,000点の旧石器時代遺物が発掘された。日本を代表する旧石器時代遺跡群であることが明らかになったといつても過言ではない。それぞれの遺跡の内容は一様ではなく、旧石器時代人の複雑な行動様式が、まさにこれから明らかになりつつある。本書に記された成果はその第一歩であり、今後刊行される高速道の調査成果によってさらに再構成されていくものと思われる。

写 真 図 版



基本土層（白地部）



右・左：旧石器時代
遺物出土状況



左：旧石器時代遺物
出土状況（断層部）

右：S H-26





左: SH-124
右: SH-112



S H-124周辺の裸群・配石 (Yb層)

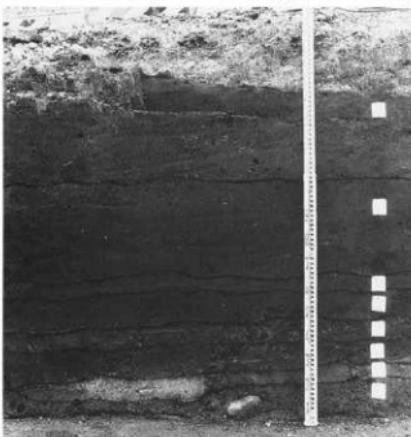
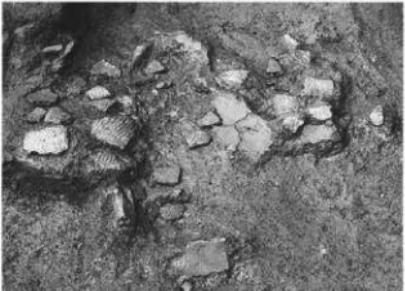


左: 砂岩剝片の集中
右: 砧石出土状況

左上：縄文時代陥し
穴群
右上：SK-77



左下：SQ-11
右下：基本土層
(低地部)

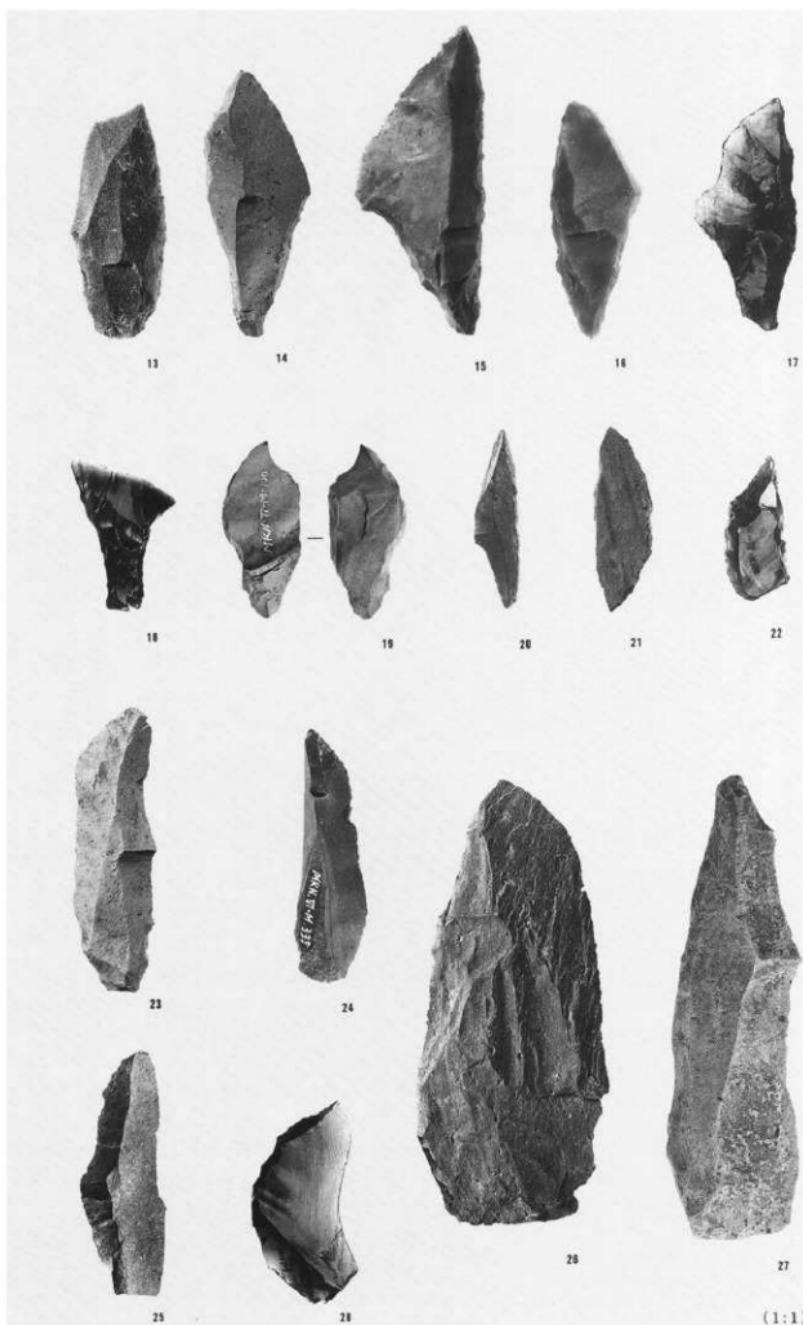


SQ-01

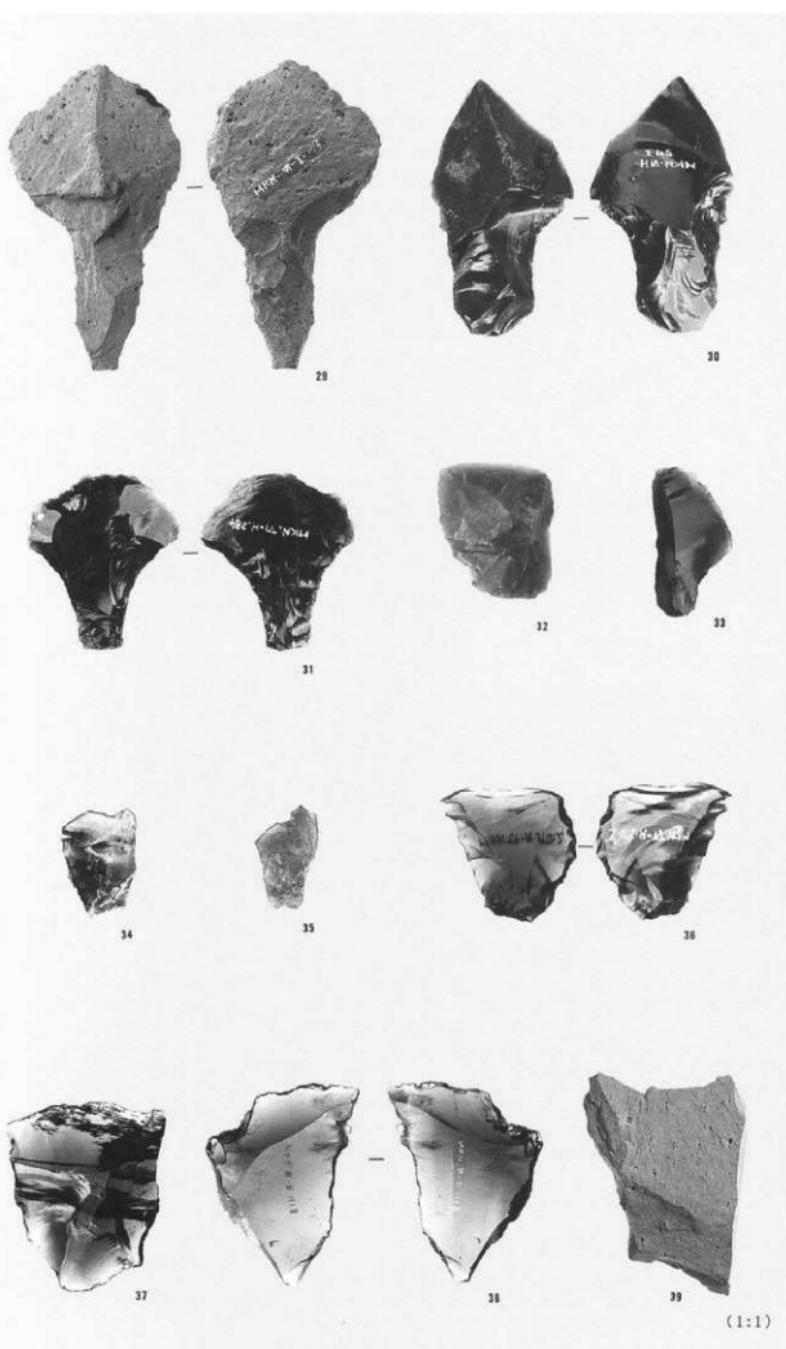


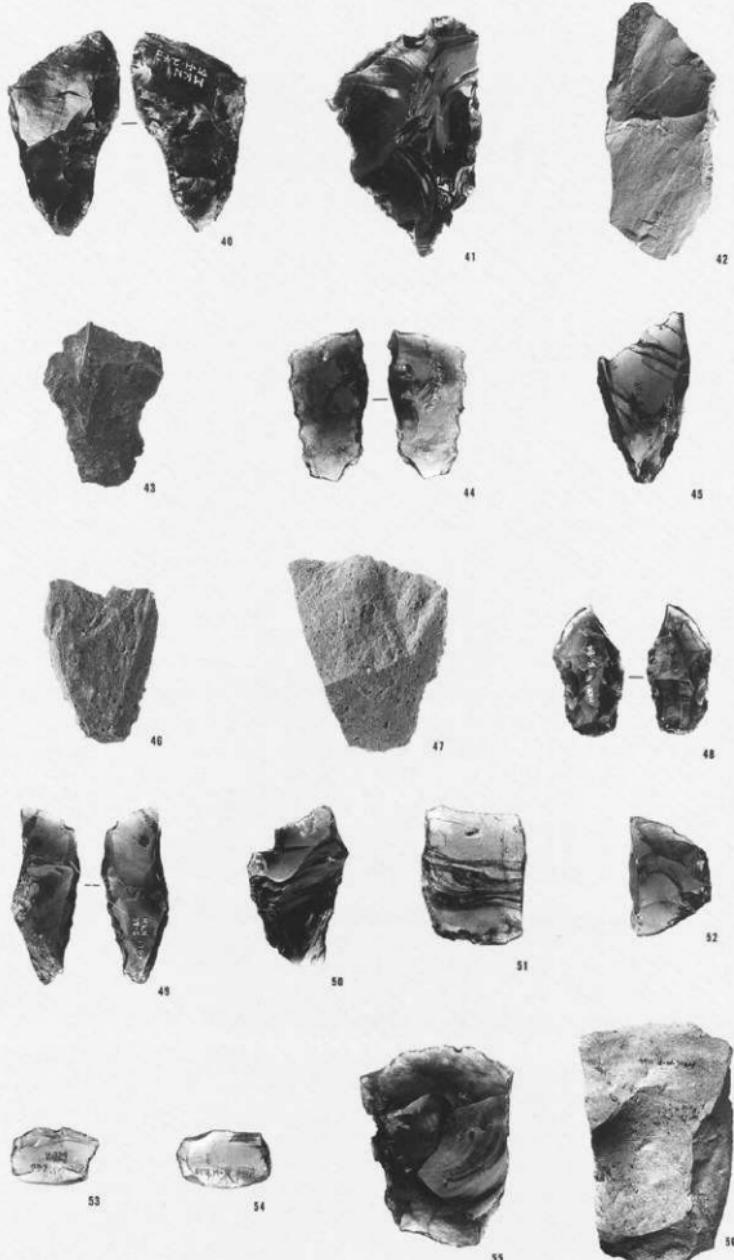


(1:1)



(1:1)





(1:1)



57

58



—



59



60



62

(1:1)



63

(2:3)





72

73

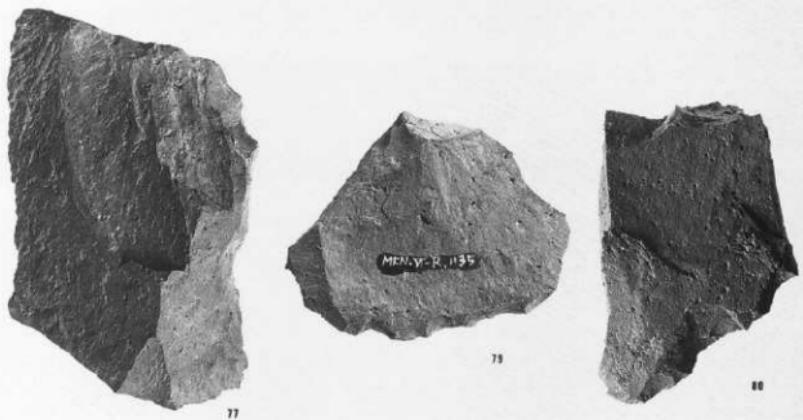
74



75

76

77



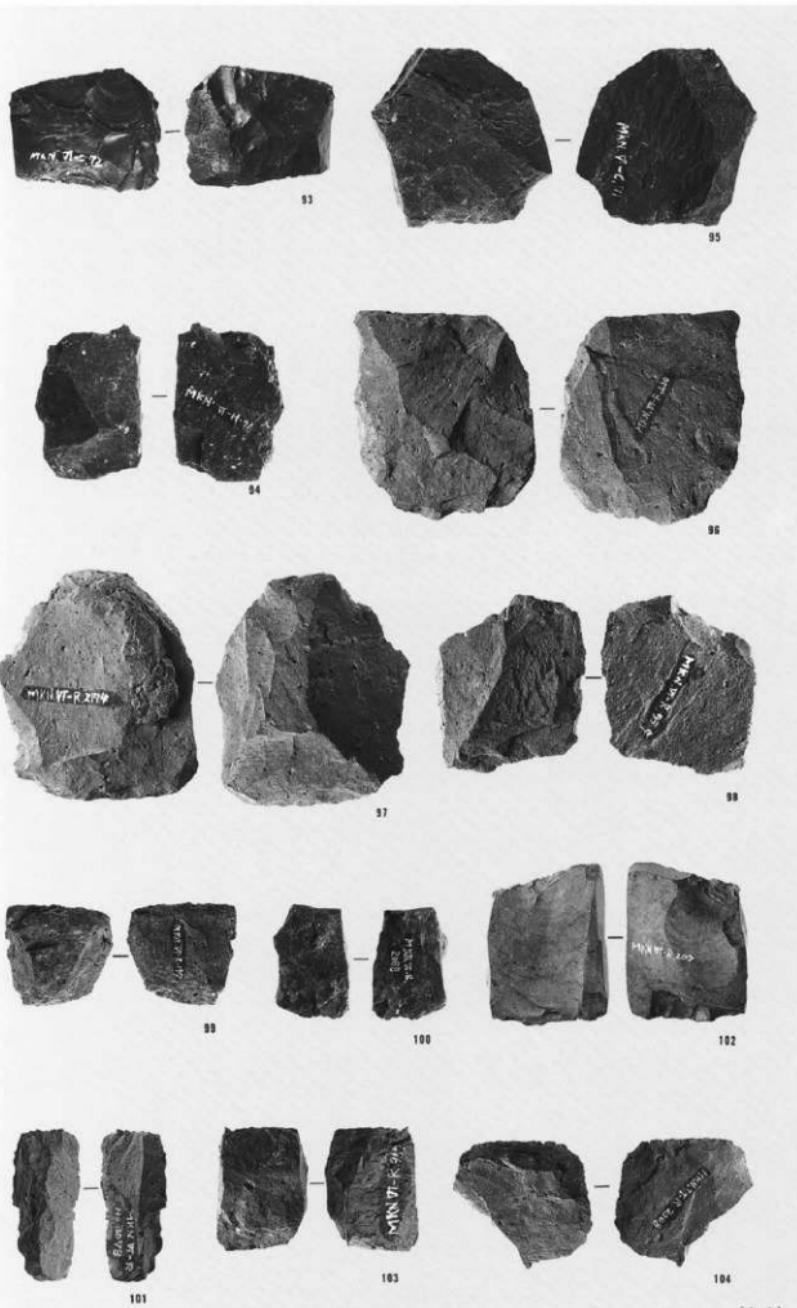
78

79

80

(1:1)





(1:1)



107



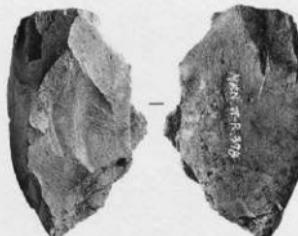
105



106



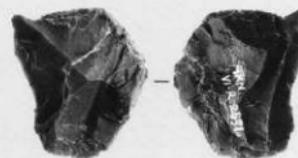
108



109



110



112



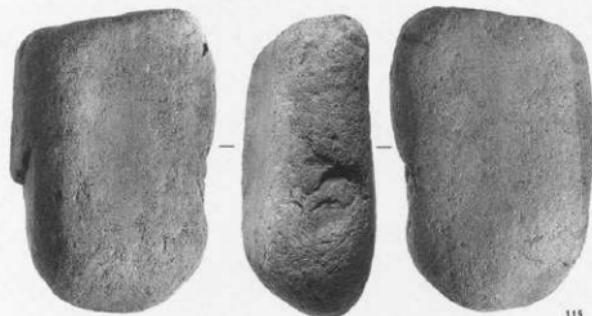
111



113

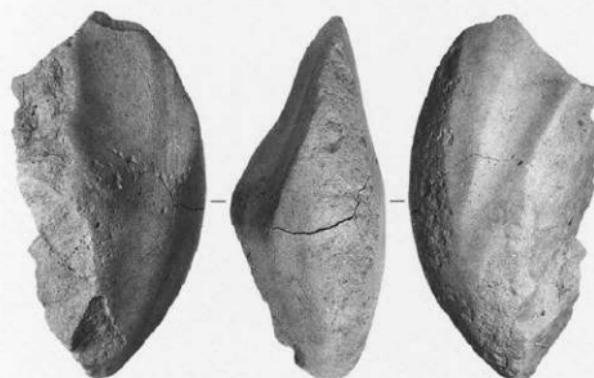


114



115

(1:3)



116

(1:4)



117



118



119



120



121



122



123



124



125



126



127

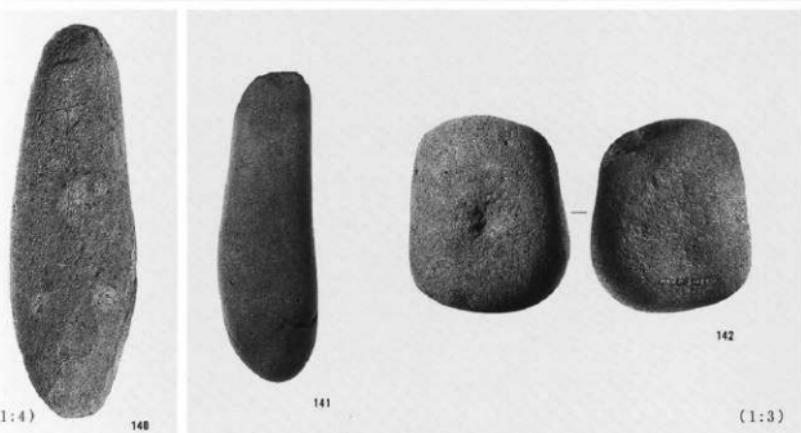


128



129

(2:3)

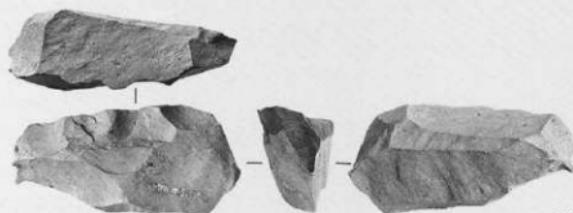




143

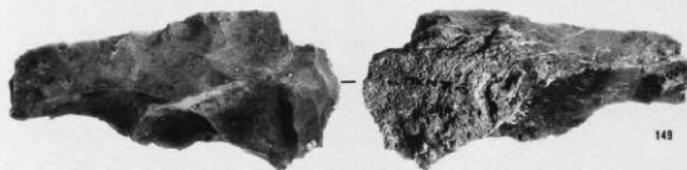


148



147

(2:3)



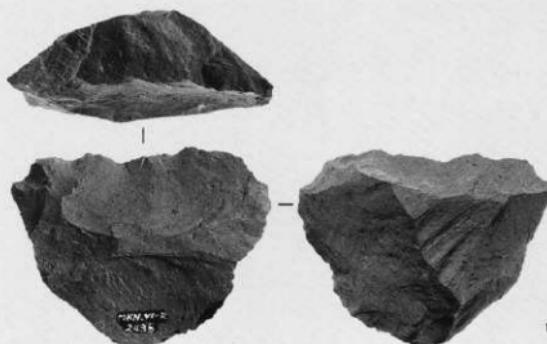
148



151

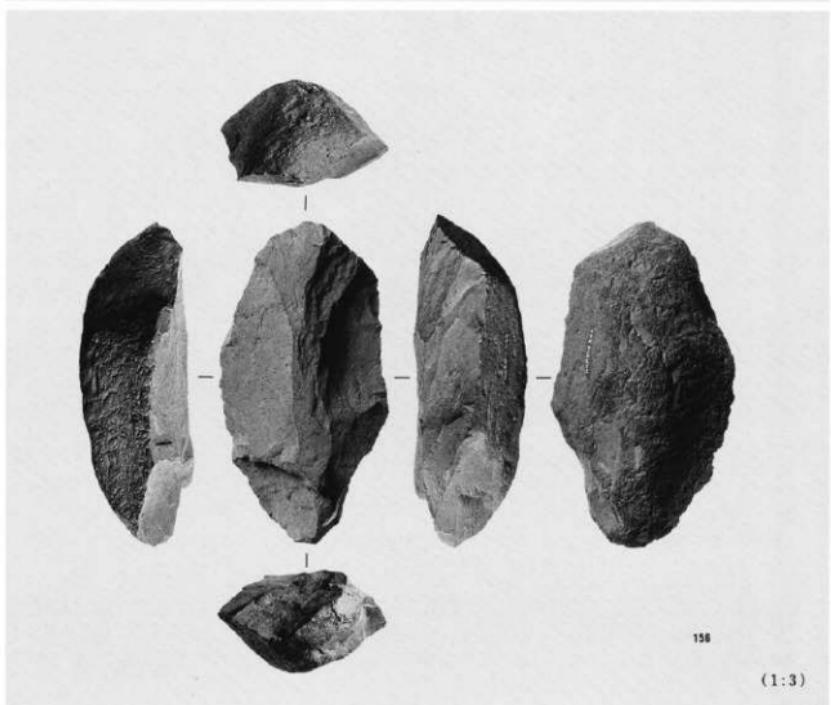
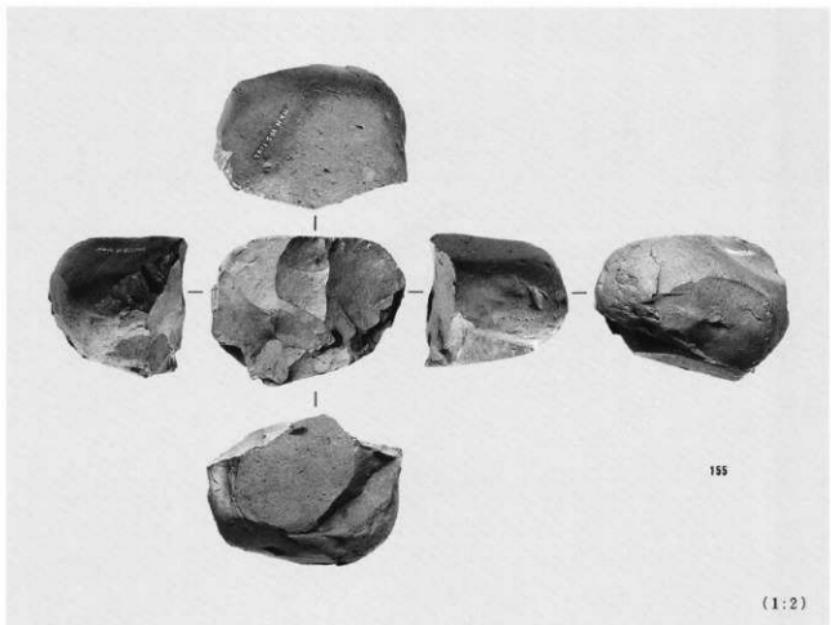


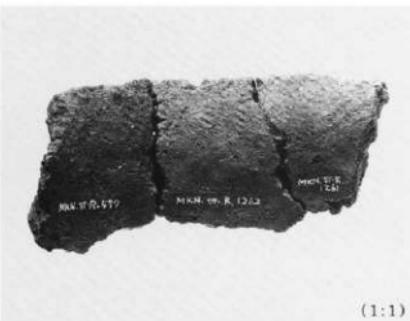
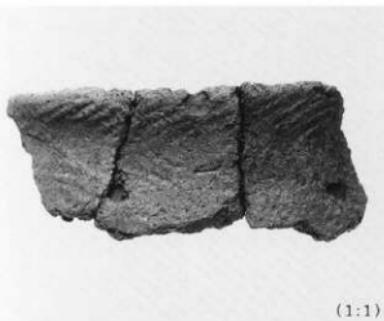
152



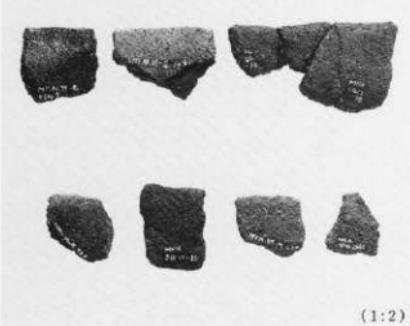
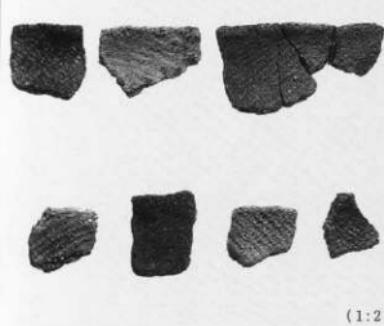
154

(2:3)





表裏繩文
(S=1/1)(第I群)
左:外面
右:内面



表裏繩文
(第I群)
左:外面
右:内面



左:繩
(第I群2類)
右:撚糸文土器
(第II群)

回転押型文
(第Ⅲ群)



(1:2)



(1:2)



(1:2)

左：格子目文
(1類)
右：山形+横円文
(3類)



横円文 (4類)

(1:2)



左：横円+条線文
(5類)
右：横円+変形綾杉
文 (6類)

(1:2)

(1:2)



回転押型文
(第III群)



(1:4)



貝殻沈線文
(第IV群)



(1:4)



貝殻沈線文
(第V群)

貝殻沈線文
(第IV群)



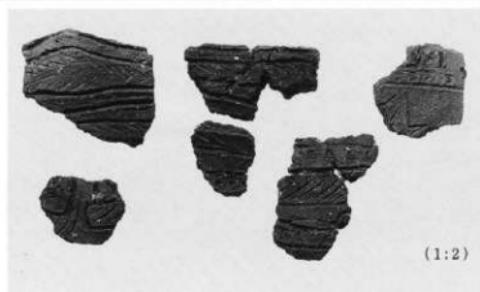
(1:2)



(1:2)



(1:2)



(1:2)



左上、右上、右中：
貝殻沈線文
(第IV群)



左中、左下：刺突文
(第V群)



右下：無文
(第VI群)

左：条線文

(第VII群)

右：縦条体条痕文

(第VIII群)



(1:2)

(1:2)



(1:4)

左中、左下：羽状網文
(第IX群)



(1:2)

右中：縄文
(第X群)



右下：半截竹管文
(第XI群)



(1:2)

(1:2)

